

悠遊

第二十八号

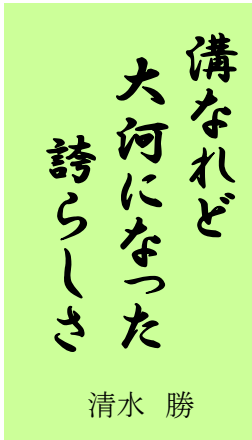


企業OBペンクラブ



密な場所
ストレス発散
蜜な時

大月 和彦



溝なれど
大河になった
誇らしさ

清水 勝



法螺の音に
吼える狛犬
夏の霧

池田 隆

悠遊

第二十八号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「鮭（彫り絵）」

八木 信男

鮭といえば高橋由一。あこがれの絵だ。鮭ではないがアジの干物を版画にしたことがある。でもいつかは鮭を…という気持ち少し動いた。鮭の切り身を版画に！ でも失敗。ため息まじりに彫り絵はどうだろう？ 切り身が浮き出るように鮭を彫り、その上にアクリル絵の具で描いた皿の上の鮭。皮には掟破りの銀の絵の具。出来上りを知人に見せた。「あかん。盛り付けが逆さまや」と非難され「皮を見せたかったから！」と居直る。最近、北斎が鮭の切り身を描いたと知った。皿はなく鮭が宙に浮いているからずるい。でもやっぱり皮を見せたかったんだなあ。



目次

▽巻頭言……………	齊藤 征雄 4	▽私の癒やし……………	川村 邦生 38
ⅡエッセイⅡ		▽川辺のラヴ・イズ・オーヴァー……………	木村 敏美 40
▽OBペンクラブとわたし……………	新井 良佑 6	▽コロナ後に日本が取るべき道……………	児玉 寛嗣 42
▽ベートーベン……………	安藤 晃二 8	▽私の故郷……………	齊藤 征雄 44
▽心空老師と「アリの会」……………	池田 隆 10	▽感染症の日本への流入は？……………	清水 勝 46
▽季語……………	池松 孝子 12	▽浜松駅の駅ピアノが弾きたい……………	志村 良知 48
▽勘違いとエッセンシャル・マネー……………	市川 忠夫 14	▽音楽の精神性の呪縛……………	下山 健夫 50
▽宇宙開発と国際秩序……………	稲宮 健一 16	▽車と私……………	杉浦 右藏 52
▽災害……………	上田 信隆 18	▽モロッコへの旅……………	田原 敬 54
▽大阪府立住吉高校生徒歌にまつわる話……………	上原 利夫 20	▽小別更好……………	塚田 實 56
▽抗コロナ奮戦記……………	内田 満夫 22	▽断捨離・勿体無・そして……………	富岡喜久雄 58
▽コロナ禍日常そしてモリカケサクラ……………	大越 浩平 24	▽俳句と母……………	中村 晃也 60
▽私の初体験……………	大津 隆文 26	▽全国乗り鉄旅あれこれ……………	長尾進一郎 62
▽高野辰之と中山晋平「ころろぎしをはたして」……………	大月 和彦 28	▽大丈夫？「気になる日本語」……………	西川 武彦 64
▽コロナを逃れての旅さまざま……………	大野 晃 30	▽お金がなくなれば死ぬ……………	新田由紀子 66
▽『昭和の精神史』との出会い……………	大平 忠 32	▽トランプ大統領と安倍首相……………	野上 浩三 68
▽横文字の発音と表記……………	大森 海太 34	▽「赤字」は駄目なのか……………	野瀬 隆平 70
▽コロナの年のコンサート……………	川口ひろ子 36	▽世界の大長編小説を読む……………	長谷川 修 72
		▽母百歳に寄せて……………	浜口須美子 74
		▽うどん談議……………	浜田 道雄 76
		▽秋来ぬと……………	原田 信 78
		▽企業OBペンクラブと私……………	平尾 富男 80

▽GOTOトラベルキャンペーンに参加して…… 福本多佳子 82

▽コロナ禍の中で…… 藤原 道夫 84

▽三文判でオランダから必死の脱出行…… 細谷 博 86

▽穴原温泉の旅…… 松田 昌康 88

▽百歳の胃…… 松谷 隆 90

▽天国は曇りのち晴れ…… 三 春 92

▽米国大統領選挙…… 森田 晃司 94

▽我が授業…… 八木 信男 96

▽土佐藩の料理人…… 矢澤 正二 98

▽ボケ防止の大ボラ噺(その2)…… 山縣 正靖 100

▽『矢われた時を求めて』岩波書店版…… 吉田 真人 102

▽『ペン俳句』で錆びない私に…… 宮原由利子 104

▽ジョルダノ・ブルーノ…… 松浦 俊博 106

▽一辺倒外交のつけ…… 首藤 静夫 108

▽私の履歴書(2)——世田谷は終の棲家——…… 大泉 潤 110

▽阿部典文さんを偲んで…… 野瀬 隆平 111

Ⅱ 創作短編Ⅱ

▽室原川の蜎…… 大塚 喜子 114

▽鼻飾りの男…… 内藤真理子 119

Ⅱ 活動報告Ⅱ

▽何でも書こう会…… 124

▽掌編小説勉強会…… 125

▽サロン21…… 126

▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞…… 127

▽ペン川柳…… 133

▽ペン・フォト句会…… 138

▽英語を読もう会…… 139

▽何でも読もう会…… 140

▽ホームページ関連…… 141

▽クラブ活動を振り返って…… 142

▽会員名簿…… 146

▽編集後記…… 148

表紙の絵

八木 信男

アート

安藤 晃二 木村 敏美 首藤 静夫

塚田 實 野瀬 隆平 福本多佳子

山縣 正靖 (五十音順)

巻頭言

文章を書くこと、雑感

会長 齊藤 征雄

企業OBペンクラブは、当然のことですが文章を書くことが好きな人たちの集まりです。

文章の形は、小説、各種の短詩などいろいろありますが、「文章を書く」という意味では、私は随筆（エッセイ）が最も基本のような気がします。

毎月二回、800字の「作品」を持ち寄って、内容、構成、文章そのもの、についてあれこれ批評し合います。

「なるべく一つのセンテンスは短いほうがよい」

「いやいや、日常会話のリズムで書けば、センテンスは自然に長くなる。短ければよいというものではない」などカンカンガクガクお互いそう簡単には譲りません。

そもそも文章は、相手に意味を伝える手段だとばかり思っていたら、ある言語学者が、「自分の考えを整理してその結果何らかの結論を得る、そのために文章を書く

という意味もあるのだ」と言っていました。

昔書いた自分の文章を読んで、忘れていた自分の言っている結論に妙に感心したことがありますから、たしかにそういう面があるのかもしれませんが。

テーマは自由と言われても、ネタ探しには苦労します。洒落たオチがついた小咄風の随筆で大向こうをうならせる達人もありますが、ウケを狙ったつもりが、思い通りに伝わらなくてみじめな思いをするのが凡人の悲しさです。

中国宋代の文章の大家欧陽脩という人が、『帰田録』という随筆集の中で次のようなことを言っています。

「余、平生作る所の文章、多くは三上に在り。すなわち馬上、枕上、厠上なり」

馬上、枕上は言うまでもありませんが、厠上はご承知の通りカワヤのことを指します。佳い文章を書くには、寝ても覚めても四六時中そのことを考えなさいということでしょうか。ウンチクのある話ですネ。

エッセイ



写真 野瀬 隆平

OBペンクラブとわたし

新井 良佑

「あなたの会社は、よほど良い会社なんだね」。勤続二十周年の感謝状と金一封を持って帰宅したわたしに、家人がしみじみと言った。「もちろん、良い会社だよ。でもなぜ？」とわたし。「だって、あなたのような飽きっぽい人が二十年も愚痴一つこぼさずに勤めていられるんだもの。毎朝、嬉々として出勤しているのは分かっていたけど、いつか『会社を辞めた』と帰ってくるかと毎日心配していた」と。

会社のことは家庭に持ち込まない約束だったので何も言わなかったが、そんなに飽きっぽい人間だと思われていたとは。「何年一緒に暮らしても、あなたは分らない」という口癖が、本音だったことを初めて知った。

定年退職した時、「よく続いたね！」と驚きの顔で言い、「聖書をいつも読んでいたね。実はいつまで続くのかとずっと興味を持ってみていたの」と続けた。こんな

風に見られていたのかと、わたしの方が驚いた。確かに、学生時代から付き合っていた家人に勧められ、クリスチャンになった。だから、一時自分に合わせてくれただけ、いつまで続くものやらずっと思い続けていたようだ。わたし自身はお互いに分かり合っていると思っていたが、実際、夫婦はそれほど単純なものではなかった。

退職して数年後、ある親睦会の席で、会員の濱田優さん（故人）から、「新井さんも何か文章を書く機会があるのではないの。文章を書く練習になるよ」とOBペンクラブに誘われた。日ごろから文章力がないのを実感し、また文章を書く機会もあまりなかったけれど、せっかくのお誘いでもあるし、また会社の先輩の中川路明さん（故人）も会員だったので、何の予備知識もなく、良い機会かなという軽い気持ちで入会した。

いくつかの分科会に参加して、会員のキャリアと人となりに驚かされた。一人一人が、日本の高度成長を支えた企業の最前線で戦った経歴を持っており、スペシャリスト、群れない一匹狼のプロフェッショナルだった。

会社組織の歯車の一つとして、世の中の流れを乱さないように生きてきたわたしには、とても太刀打ちできるような相手ではなく先が思いやられ、暗澹たる気持ちになった。入会してすぐに退会するわけにはいかないし、語れるような経歴や経験もないし、また何の特技も持っていない自分なので、切羽詰まった。いろいろ思案して思い至ったのが、長年読んできた聖書である。これまで読んできた聖書の知識が、どれくらい通用するものかを試す良い機会かなという思いが湧いてきた。

あの内村鑑三はイエス様に申し訳ないと、自らクリスチャンであると言うのをためらったそうだが、わたしごときはなおさらである。清水の舞台から飛び降りるつもりで書いたのが、入会時の自己紹介であるペン随想、『聖書とわたし』である。忸怩たる思いを抱きながら、「私はクリスチャンである」と公言することからスタートした。

入会間もないころの懇親会で、初対面の会員から数から棒に、「わたしはクリスチャンが嫌いだ！」と面と向かって言われた時は一瞬息を呑んだ。しかし、不思議な

解放感を味わった。話しているうちに意思疎通がはかれ、これからもよろしくと言いつたのが嬉しかった。その後、交流はさらに親密になり、異分野領域のことをいろいろ教えていただいた。ある会員からは、「新井さんはクリスチャンだって。どんな大変な経験をしたの？」と聞かれ当惑した。特別な経験はなく、当たり前に生きてただけだから。みなさんと顔なじみになるにつれ、キリスト教関係の話になると、見解を求められるようになった。わたしのキリスト教がそれなりに認められたようでほっとすると同時に、やっと居場所ができたような安心感を持つことができた。

早いもので、今年で十年あまりが過ぎる。経験豊かで、さりげない心遣いに満ちた会員みなさんのご厚誼のお蔭で、これまでに経験したことがない異空間で、和気あいあいと楽しい時間を過ごすことができた。特に、講演会で個人では絶対に会うことがない人の肉声を直接聞けたこと、聖書を気兼ねなく話せる場と機会を提供してくれたOBペンクラブに心から感謝している。

ベートーベン

安藤 晃二

昨年は「ベートーベン生誕250周年」というキャッチフレーズを聞いただけで終わった。しかし、この仰ぎ見るような偉大な人物、ベートーベンの名が語られるだけでも、自らの音楽的経験を想起しながら、心が動かされる。

高校時代、校内放送のモーツアルトのピアノソナタに心を捉えられた。我が家では兄が文化的なものを先導した。兄は大学の友人の音楽通の影響か、ヨハン・シュトラウスのドーナツ版を買って来た。電気少年で電気機関車の模型造りが生き甲斐の兄に音楽は似合わない印象があった。次に現れた大判の黒っぽいジャケットのアメリカ製LP、音声で始まるそのレコード、兄は専攻する英語の音声学の学習用に求めたらしい。マイフェアレディのヒギンズ教授のそれである。兄の使い走りで、日本橋

丸善にあったブリティッシュ・カウンスルにレコードを借りに行った思い出がある。

学生時代、オケに参加する程音楽に傾倒した。そんなある日、あの黒いジャケットのレコードを手に取り、驚愕した。その内容は、若き日の偉丈夫、バーンスタインがピアノを駆使し、ベートーベンの交響曲第五番について講義していた。アメリカには「標準語」の概念そのものが馴染まないが、ボストンのカーティス音楽院出の美声が語る見事な解説、「何故ハ短調なのか」の説得から始まる。一楽章について、和音、展開部の全般に亘り、オーケストラスコアをピアノで「長調」に変換したものと比較して弾いてみせ、「解るかい、これでは全く正しくないね」と、作曲家の短調に拘った構想の見事さを称える。更に、ベートーベンの音楽作り、次に来る音、フレーズなど、全てが音楽的な妥当性を吟味して作られている、と解説する。何とも達者な専門家のパフォーマンスに敬服するばかり。ベートーベンが何者であるかを叩き込まれた。

二十年後の七十年代後半、ロンドンのロイヤルフェスティバルホール、既に世界的巨匠と呼ばれた白髪の彼が指揮者として眼前に現れた。ダークスーツに白いトックリのセーター、赤いハンカチが胸に覗く。恐らく、その時このホールの中で最もラックスしていた男、彼こそウエストサイドストーリーの作曲者であれば、むべなるかな、である。最後の演目がベートーベン第八番の交響曲であった。冒頭から *trill* (全員演奏) で出る勇ましい曲に輪をかけて勢いよくタクトが振り降ろされたとき、「ドターーン」と大音響。情熱の余り跳び上がったバーンスタインの着地の音であった。一瞬、名状し難い客席の反応が広がり直ぐ止んだ。第二楽章が始まる、これこそ、皆がウィーンフィルのこの音を聴きたいと望んだに違いない、天から降りそそぐ愛すべきリズムとメロディに恍惚感を覚えた。

数年後の夏、ロンドンの北、英国第二の都市バーミinghamを訪れた。取引先から、ライダーカップの戦場のゴルフクラブ、「ベルフリー」に宿泊を勧められた。夕食

の席上、何故かサイモン・ラトルが話題に上る。バーミingham交響楽団を世界レベルのオーケストラに育て上げた若手の指揮者である。その晩、演奏中だと言う。相手はそちらに行きたかったに違いない。数年後、ラトルはベルリンフィルに招かれ、十六年間正指揮者を務める。「人生はこの様に始まる」と、ベートーベンが述べたと言われるが、ラトルのベルリンでの活動開始は、あのジャジャジャジャーの「ジャー」が何処までも飛翔し、聴く者を舞い上がらせる。

昨年末にテレビでラトルのロンドン響を観る。第九の第三楽章、第二バイオリンの流麗な主題がユニゾンで、女性達が優雅に揺れて、誰もが幸福感を満面に漂わせ乍ら弾く。終楽章、独唱者も合唱も、指揮者までが歌い、この作曲家が常に探求する至高の精神性と「星空の果てに住み給う」の詩と和声に包まれ、終わる。

ベートーベン、それは何処までも楽しみ足りない、恩寵とも呼ぶべき、人類へのレガシーに思えるのだ。

心空老師と「アリの会」

池田 隆

一九九九年、NHKテレビ番組「こころの時代」で松尾心空老師と有本アナの対談を聴いた。老師は舞鶴にある西国三十三所の第二十九番札所、松尾寺の山主である。

西国三十三所の諸観音霊場は養老年間の創建で、平安朝の花山天皇が巡拝しながら再興したという。熊野の青岸渡寺を起点とし、畿内の諸寺を巡り美濃の華嚴寺で満願となる。

興福寺、石山寺、三井寺、清水寺など、各所の有名寺院が含まれていることから、江戸期には東国をはじめ全土からの上方周遊観光ルートとしても高い人気を得ていたようだ。四国八十八ヶ所をはじめ、全国各地に札所巡りのコースがあるが、それらの本家本元とのこと。

現代ではその千キロの道程を昔のように歩いて巡る人は少なく、もっぱらバスや列車を用いて札所のみをスポット的に巡るのが主体となっている。しかし巡礼の真髓

は札所でお参りし、納経帳に御朱印を頂くだけでなく、途中の遠く険しい道程をひたすら、黙々と歩くことにあると老師は語る。放送では専らこの西国三十三所徒歩巡礼が主題であった。

心空老師はすでに四周し、他も含め五千キロ以上を歩かれていた。その道中、車ならば見落とす路辺の草花など小さな美しさに気づき、ご接待くださる見知らぬ人々の親切に触れたという。

さらに一日に数十キロも歩くと、足や腰の疲れで心が「無」となり、それがやがて法悦へ高まり、仏がほのかに見えてくると仰る。其こそが「歩行禪」だとのお話。

しかも老師は己ひとりがその功德を受けるのではなく、多くの人と共有していく。各札所の協力を得て「法灯りレー」行事を成功させ、その経験に基づき全ルートを完歩する有志をひろく募った。希望者は百数十名に及ぶ。

熊野から畿内へのコースは後白河法王や平清盛が熊野詣の行き帰りに通ったルートである。その時の長い行列を「蟻の熊野詣」と呼んだ故事に因み、新たな徒歩巡礼会の名称を「アリの会」と名付ける。

当時私は科学技術分野に関与してきた半生を改めて聞いて直そうと、仕事の合間に数日間ずつ長崎から東京へ向い徒歩での旅を繰り返していた。未だ山陽道の途中であったが、心空老師の談話が実感として心につよく響いたことを思い出す。尤も法悦を覚え、仏が見える域へ達するには程遠く、共感したのは道中での様々な出会いや歩き疲れて無心の心境になるところまでであったが。

それまで宗教とは全く無縁の身であり、技術者として現場主義と過程重視を信条としていた。宗教も自らその中に飛び込み、実行してみないと本質は分るまいと、直ぐに心空老師に手紙を書き、「アリの会」へ加えて頂いた。諸費用が入会金の一万円のみで後はすべて明朗な実費精算方式、それに「来る者を拒まず去る者を追わず」という会の運営方針も気に入る。

会の行事として西国三十三所の全行程を十回ほどに分け、各回五日程の日程で春秋各二回実施し、二年半で一週する。個人の都合で参加できない回があれば二年半後の機会を待つ。各回の参加者は数十名で、多くは編笠に金剛杖、白装束に袈裟といった巡礼姿だが、普段の服装

でも構わない。行脚は札所や要所々々で一斉に休憩を取るが、途中は各自のペースで歩き、列は長く伸びる。

心空老師は陸軍士官学校在学中に終戦を迎え、三高から京大哲学科へと進学し、後に僧籍へ入られた。数多くの著作を読むと、その学識の高さに驚嘆するが、徒歩巡礼中は小難しい説教をするのではなく、もっぱら歩き、身体で範を示される。酒をこよなく愛し、風貌は嘗ての今東光を思わせる。

余談になるが、後年に私が企業OBベンクラブに入ったことを知らせると、本会の初代事務局長である故北田氏とは学友で、彼から贈呈されたという『悠遊』の創刊号を私に送って下さった。

この「アリの会」も会員の高齢化で数年前に解散した。私自身は西国三十三所を一周半ほど巡ったが、法悦を感じ、仏を見る段階には達しなかった。ただ一緒に歩いたことで何人かの真の知己を得ることができた。これこそが有難い仏縁であり大きな法悦なのかも知れない。今もそこで知り合ったお二人と奥の細道を歩き続けている。

季語

池松 孝子

季語は日本人の美意識と結びついた文化的かつ歴史的な遺産である。人は自然と共に生きており、季節により変化する自然に森羅万象を見る。このことが日本人の美意識の源泉になっていると考える。

季語の発生は、一般的には平安朝後期とされている。

しかし、奈良時代後期の「万葉集」や平安時代前期の「古今集」の和歌でも、四季による部立てがなされており、それらは季語の萌芽とみなすことができる。

鎌倉時代になって連歌が発展すると、最初の五七五の部分である発句は季節に合わせて詠むべきとされた。連歌会では、指導する連歌師は和歌の本歌取りをはじめ「源氏物語」「伊勢物語」などを講釈できるほどの教養があったという。

貴族や武士のみならず地方の豪族なども出席できたことから公家文化と武家文化を融合する場になったことも容易に想像できる。連歌会では、これまでの貴族文化にあきたりない人々が参加者の中に出てくるのは当然であったろう。

複数の人が参加する連歌会では、季語の力を借りて皆が共通の季節感や情緒を共有することにより、言葉数が少なくとも深い共感を得られる。文字数が限定されているからこそ連想は限りなく広がっていく。

江戸時代になって連歌から派生した俳諧が成立する。

俳諧の季語は、平安時代の和歌から続く、雪月花に代表される貴族趣味の美意識に基づくものではなく、江戸文化独特の、庶民の日常から生まれてきたものが多くなっている。

俳諧を変革した芭蕉は、季語の発掘に熱心であった。

それまでの季節感からの観念的な季語ではない、実際に旅に身を置いて感じられる実感を伴う季語であった。ここからさらにわび、さびの美学へと深められていく。江

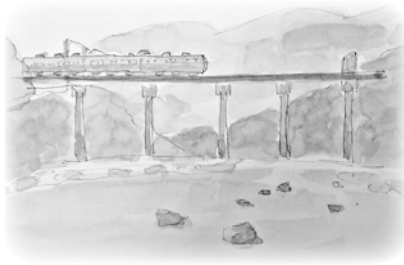
戸時代独特の生活感覚を取り入れたものが季語として加わった。

明治以降台頭してきた「無季俳句」を正岡子規、それに続く高濱虚子は認めなかったといっているだろう。俳句は連歌から派生したもので、発句には「季の詞」を入れるべきという「きまり」は継承してきたのだ。

季語の発生からこれまでの変遷を見てきたが、明治になつて西暦が導入されたことにより、季語は曲がり角を迎えたと考える。それはほかならぬ旧暦と新暦、実際の季節感と暦とのずれにある。植物は気候にまかせてその季節の花を咲かせ実をつける。しかし、特に社会行事に伴う季節感のずれは個人的な日常生活でもなかなか合わないものがある。綿々と続いてきた祭りなどの社会行事を簡単に「ずらす」ことはできない。今なお、関西圏や地方で見られるような旧暦にのつとつた行事を私は好ましく思う。

現代の「歳時記」には五千を超える季語が収録されて

いる。季語は和歌以来の伝統的な美意識そのものである。よつて季語に象徴される美意識を大切にして四季を味わいながら生きていきたいものだ。



勘違いとエッセンシャル・マネー

市川 忠夫

物心がついてから早くも、三・四半世紀〓七五年経ちました。この間「コロナ禍」ほど大きな事件はありませんでした。これまでは、いわゆる「終戦」が最も大きな事件だと思っていましたが、戦時中に生まれた私は、戦争そのものの記憶はなく、終戦後の混乱期については若干の記憶はありますが、それをどう考えるかの知識も知恵も、まだ持ち合わせていませんでした。

「コロナ禍」を戦争にたとえる人がいますが、これまでの戦争とは全く違います。「コロナ禍」は、南米、アフリカ、南極大陸まで含めて世界中に広がっています。まさに「世界大戦」です。しかし、戦いの相手は、国家やテロ組織のような人間集団ではありません。「二〇二〇年に始まり、二〇二二年にはワクチンや特效薬が開発され沈静化する」などと、後日振り返るようなことにはならないでしょう。何故そう感じるのでしょうか？

「コロナ禍」の原因を考えてみました。答は簡単です。多くの識者が言われるように、「人々が自然の生態系を破壊した」からです。

人々による「自然破壊」は他にもたくさんあります。CO₂排出による地球温暖化、森林伐採による生態系破壊、プラスチックによる海洋汚染、PM_{2.5}による大気汚染、人工化学物質による食品汚染、等々マスコミに頻繁に取り上げられています。再生可能エネルギー発電や電気自動車からレジ袋有料化まで、玉石混淆の施策が論じられていますが、最も大事なことが忘れられていると思います。

人々にとって最も大事なものは「医食住」だ、ということとを、「コロナ禍」中で私たちはしっかりと認識しました。しかし人々は、最も大事なものの目的を当てた行動をしていないのです。生きていくために最も大事な行動は「経済」です。ところが現実の私たちの「経済」は全く酷い様相を呈しています。真の「コロナ禍」対策は、この酷い「経済の様相」を変えることにあります。

医は、健康であること＝病氣にならないこと、です。しかしながら、現実には、予防医学とその普及が大幅に遅れています。マスクのように昔から使われているものの効能が、「コロナ禍」中で、世界的論争になるくらい予防医学は遅れていたのです。

食は、量は確保できても、質の悪い＝体に悪いものばかりです。食品の中身は、一世紀前頃に人々が食べていたものに比べると、はるかに劣化しているのです。

住は、大地震や大洪水に弱い危険な場所の住宅や過密都市など、危ないものばかりです。「コロナ禍中の大地震」のような複合災害を多くの人々が心配しています。どうしてこんなことになってしまったのでしょうか？

どうも多くの人々は、二〇世紀に入った頃から「自然は無限である」と大きな勘違いをしてしまい、この勘違いのまま、一世紀＝一〇〇年以上行動してきたようです。でも、食と住についての対策は簡単です。限られた（有限の）物質を多くの人々で分けるのです。終戦直後と同じように、配給制にするしかないと思います。医につい

ては、若干複雑ですが、健康第一＝病氣にならないが基本ですから、予防医学に今の百～千倍の予算をかけることになるでしょう。

「コロナ禍」中で「エッセンシャル・ワーカー」という言葉をよく聞きます。ワーカーとは、マネーを稼ぐ人ですから、「エッセンシャル・マネー」と言う言葉があつて、然るべきです。今の経済ではマネーはひとつですが、これを「エッセンシャル・マネー（EM）」と「ノンエッセンシャル・マネー（NEM）」の二本立てにする訳です。

EMは「医食住」を対象に配給経済、NEMは「その他」を対象に自由経済にします。経済の仕組みを大改革することによって、人々の「自然破壊」を止めるのです。

一世紀以上の長きに渡って人々は「自然破壊」に動んできました。人々の行動様式＝経済様式＝価値観を大きく変える時期にきているのです。

宇宙開発と国際秩序

稲宮 健一

今、一番身近に感じている宇宙からのメッセージは位置情報だろう。カーナビやスマホの画面をタッチするだけで自分の位置が明示される。このからくりの大本は地球を周回しているGPS衛星である。

人工衛星が実現できたと世界中に知らしめたのは一九五七年のソ連によるスプートニクの打上げであり、この突然のニュースをスプートニク・ショックと云った。当時東西冷戦の真っ只中で、西側社会に衝撃が走った。この辺の源流に遡って事実を探ってみよう。

情緒的な天空への思いとは別に、実際に地球を周回できる飛翔体の可能性を具体的に数式で示したのは、一九世紀中ごろロシアのツオルコフスキーであった。第二次世界大戦以前、ドイツでは宇宙旅行の夢が語られ、米国ではゴダードが液体ロケットの実験を行った。この技術

は戦争に利用され、ドイツが英国を攻撃するロケットに結び付いた。戦後このドイツの研究成果は米国とソ連に渡った。最初の人工衛星計画は、地球物理の研究のため一九五七年を国際地球観測年の初年として、世界各国が宇宙を含めて地球を観測する活動の中に含められた。そして、米国が先陣を切ると思われていた。

当時、米ソが猛烈な宇宙開発競争を展開した。重工業力に支えられたガガーリンの有人飛行、アポロ計画による月面着陸等である。大型打ち上げ機には強力な推進力が必要であり、ICBMの実力誇示の意味もあったが、宇宙上での直接の軍事活動はなかった。しかし、情報を基にした知的活動として、スプートニクの単調なビーコン信号を米国のジョン・ホプキンス大学の研究者が注意深く観察していた。彼は地球を周回する衛星の飛翔位置が時刻と共に正確に判明しているので、その逆に、地上の観測者がスプートニクの信号を連続して受信すれば自分の位置を割り出せると閃いた。これを逆転の発想と称した。この原理で潜水艦が海上に浮上して、自ら電波を

発することなく自分の位置を検出できる。この発想が進展して現在のGPSに繋がった。最初のGPSは米軍だけが受信機を備える世界中の軍用機の位置の検出であった。しかし、一九八三年のソ連による大韓航空機の撃墜を契機に、民間航空機の航路確認能力を向上させ、この種の事故を防ぐためGPS信号の活用を民間に開放した。

当時、米ソ間に多くの紛争が起きていた。一九六二年のキューバ危機、一九五〇年代から継続していたベトナム戦争など、偶発的な核戦争を伴う危険な争いだった。この軍拡が両国の財政の疲弊を招き、デタントへと歩み寄り、一九七二年に両国間で、宇宙空間平和利用のための協力に関する覚書が結ばれた。その具体的な第一歩がアポロ・ソユーズ計画である。七五年七月、二人乗りのソユーズ宇宙船十九号が打ち上げられ、その直後米国のアポロ宇宙船十八号が三人の飛行士を打ち上げ、七月一七日に両宇宙船はドッキングを果たし、両国の飛行士の交流が行われた。しかし、その後、時代の推移と共に国際情勢が変わり、一九九一年にソ連の崩壊が起きた。

劇的に両国の関係が変わり、かつて西側の結束のシンボルだった国際宇宙ステーション(ISS)は今やロシアを含め国際協調が実現している。ISSへの宇宙飛行士の運搬は最初米国のスペースシャトルが使われたが、引退したあとはロシアの打上げロケット、ソユーズによりバイコヌール基地から多くの国籍の宇宙飛行士が打ち上げられている。また、ISSへの物資補給用に日本の「こうのとり」が種子島からH-II型ロケットで打ち上げられている。一機のISSに多国籍の人が活動するためには国際間での平和の維持が必須の条件になる。

これに対して、中国の宇宙開発は独自路線を走っている。単なる西側との競走なら、切磋琢磨で将来の発展に寄与するが、軍事目的が加わると、米中の対立が深まる。SDGの観点から見ても、宇宙での人間活動には膨大なエネルギーが消費される。是非ISSに中国の宇宙飛行士を参加させ、宇宙に軍事は持ち込まない国際協調を実現して欲しい。

災害

上田 信隆

「災害は忘れたころにやってくる」。昔からよく言われていることである。三・一一の被害にあつて、私が生きている間はこの種の災害は無いと思つていた。そんな油断からか、コロナについてもこれほどのひろがりやを正直思うことがなかった。しかしながら去年の暮れから今年にかけて第三波が押し寄せてきている。コロナは広がらないという希望的観測による判断のミスである。辛いこと、苦しいことは出来るだけ忘れたいというのは自分だけでは無いと思う。

ワクチンについてもどうしても期待は大きくなる。ワクチンによるコロナの克服をどこか信じているところがある。ワクチンに否定的なニュースをみると腹が立つてくる。世の中にはいろいろな考え方があつたのだが、どうしても自分の判断を優先させてしまう傾向は否めない。第三者的な批判になりやすいマスメディアにはどうも誠

実さに欠けている感じすらする。

政治は結果とは言うが、こと「災害」については政治の対応は難しい。完璧な処理など望めない。考えて見れば最初から予測が出来るものは災害にはならない。災害への対処こそ国民に対する政治の債務だ。だが責任を問うことなど出来ない。政治家の一人や二人で対処出来るものではない。災害時においては全体の合意など取れるはずがない。コロナ対策を見ればよく分かる。手洗い、マスク、ディスタンスの三法則も試行錯誤によつてやつと定着した。

災害を克服するためには多くの犠牲が伴つて初めて成り立つものである。三・一一のような壊滅的な被害を蒙れば大概は目が覚めて皆が協力しだすものであるが、コロナ禍においては医療崩壊の危機によつて医療従事者も真剣に取り組まざるを得なくなつた。同時に国民も医療従事者に理解を深めてきている。

コロナの災害を日本人の試練と思えば我慢が出来るはずだ。この国難を克服できれば日本人は再び自信が湧いてくるだろう。

私達日本人はかつて戦後の苦難を克服し立ち直った。

経済の発展を見て、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という過剰な自信をつけた経験を持つ。それが一夜で泡（バブル）と化し二十年以上の不況に喘いできた。今や日本は経済的には余裕はなくなった。こんなご時世の中のコロナ禍である。今こそ戦後世代の私たちが頑張ってもらっての経済状態に戻す努力をしなければならないと思う。私達の世代の宿命、と思いつつ今一度私達にできることを見直したいと思う。無論、手洗い・マスク・デスタンスは基本であるが、周りの人たちに緊張感を持っていただくために、互いに声を掛け合うように心掛けたいものである。

デジタル化やテレワーク等によりこれからの社会は変貌してくる。特に若い人たちの考え方などに私達とは差異が生じるのは明白だと思う。いつまでも昔の良さを追っていくわけにもいかない。さりとて日本の良さをそうあつさり手放すわけにもいかない。多くの先人達がやってきたように立派な後ろ姿を見せるようにしたいものである。

そのためには私たちはまず健康でなければならない。病気になれば社会のお荷物になりやすい。多くの人たちの助けを借りなければならない。経済的にも一番の負担は病気である。

次に残り少ない時間を自分なりに上手く使いこなすことだと思う。自分一人だけの時間はそんなに多くは持てない。ライフワークの研究があればよいがそういう人は少ない。運動をするにも若い人たちと五分に出来る人はまれである。趣味もほどほどであれば通じるが若者と一緒となればそれともかなりハイレベルでないと通じない。親戚縁者もなかなか思うようにはならない。気がつけば行動範囲は確実に狭くなっている。

場合により、自分ひとりで生きなければならないのは、これ災害だと思う。災害は忘れたころにやってくる。災害を克服するには災害を正しく予測することだ。そのためにも普段から健康に気をつけ無駄使いをしないで、ある程度の小遣いを用意して人に接することだと思う。いつ死んでも悔いがないという心境になるのは凡人の私達には大変難しいことだ。

大阪府立住吉高校生徒歌にまつわる話

上原 利夫

私が住吉高校へ入学したのは昭和二五年でした。旧制中学として入学した生徒は昭和二一年が最後です。その後三年間は新入生がいまません。新制高校生として初めて入学したのが私達で、生徒歌が生まれました。この歌詞の一番は次の通りです。

葛城の山 ほのぼのと

朝日は出でて 天地に

生気さやかに 充ち満つるとき

浪速の南 帝陵に

ああ我ら学ぶ 住吉高校

作詞は、うら若き奈良女子大出身の数学の教師で、高校一年の二学期から担当されましたが、半年ほどで結婚され退職されました。先生は作詞者名を明かさず、自治

会選とし、今日まで七〇年歌われています。

先生の旧姓は浅羽、結婚して永松姓となりました。

ご主人はお医者さんで、三重県津市で新婚生活をおくられました。私が住吉高校を卒業して三〇年も経ったころ、同じ職場（住友商事）の部下の奥さんが浅羽先生の娘さんであることがわかりました。先生も私のことを想い出されたとのこと。先生のご主人がこの一年ほど療養中で神戸市東灘区に住んでおられました。間もなく亡くなりました。忌明けに、青山墓地へ納骨のため上京されることがわかったので、四〇年ぶりにお目にかかれることになりました。

私の母校一橋大学の同窓会館である如水会館で浅羽先生と再会しました。可愛い老婦人になっておられ、面影は変わらない。旧き良き思い出話などに加え、「人事を尽くして天命を待つ」が先生の好きな言葉であるとか。

教育という仕事は、家庭教育でも学校教育でも実に地味で、成果を知るのはずっとずっと後になってからのことが多いのですが、それでいて、手抜きや間違った教育の結果もしつかり現れるので、白紙の子供たちの心に一步

一歩思想を植えていく先生、お母さんの役目というのは、実に大切な仕事である。報われることの遅い、忍耐のいる仕事であるが、それが先生冥利、母親冥利というものだ。こんなようなお話も伺うことができたのである。先生ありがとうございます。

浅羽先生の娘婿は、西宮の甲陽学院から京都大を卒業し、住友商事に入り、ニューヨークにも駐在しましたが、その後膵臓癌を克服したと思ったら肺癌で亡くなりました。子息は東大生でした。娘さんはお元気で横浜に住んでおられます。私の家にもお見えになったことがありますし、毎年、年賀状をいただいております。

住吉高校の生徒歌の歌詞が浅羽先生の作詞であることは、今では知る人は殆どいないでしょう。私は五期ですが、同期に作家がいます。村上卓児君で同期の森川悦子さんと結婚しました。眉村卓がペンネームです。

村上君は高校一年のときに「住吉四季」を作詞、同窓会では生徒歌のあと、続いて必ず歌われます。その四番は次の通りです。

落日燃えて枯芝に

浪速の南風寒し

倒れるまでは肩組んで

友よ励まん住吉の

三年の冬を若き日を

眉村卓が、妻の悦子さんの亡くなるまで五年間にわたり毎日一編のショートショートとして書き続けた実話「妻に捧げた一七七八話」は映画化もされました。

二〇一九年十一月九日、大阪市阿倍野区のやすらぎ天空館で村上卓児氏の葬儀・告別式が営まれました。式場には出版界の著名人も多数参列、多くの供花もありました。

喪主は娘さんの村上知子さんと、父母と同じ住吉高校の同窓生です。知子さんは立教大学文学部フランス文学科卒業、近著に小説『余花』（鳥影社刊）があります。

今思うと五期の同期会は、とても楽しい会で毎年集まりますが、昨年はコロナの関係で中止になりました。

抗コロナ奮戦記

内田 満夫

新型コロナウイルスで外出自粛が叫ばれ始めたたん、物好きの虫が動きだす。こんなときこそ街に出て、繁華でない繁華街をまず見たいと思ったのだ。またこの厄災を奇禍として、「三密」を回避しつつできることがあるはずだと、悪知恵をめぐらす。

早速あちこちに出かけてみる。政府の緊急事態宣言が出た昨年四月頃になると、どこも人影はまばらで、まさにゴーストタウンと化していた。JR三ノ宮駅、三宮センター街、元町の大丸前交差点、中華街、ハーバーランド。普段は人とぶつかりながら歩く街が、苦もなくスイスイ通り抜けできる。神戸港を一望できる人気のテラスも、人が全然おらず貸切り状態だ。

大阪の難波や京都へも足をのびすが、どこもかしこも大同小異。普段は観光客でこった返すJR京都駅や、駅

前の見慣れた混雑と喧騒と交通渋滞といった光景が、影をひそめている。

嵐山にも寄ってみた。渡るだけで三十分待ちとつい数日前に報じられた渡月橋も、桂川の流れと四方の山容を愛でながら悠然と渡ることができた。

ちょうど桜の季節。花見自粛を我慢できない少人数の仲間でこっそり、地元は王子公園で小宴を開く。また半日を費やして一人、生田川、夙川、有馬など、人影まばらな近場のソメイヨシノを堪能して廻る。

ステイホーム中にできる自宅湯治を思いつく。入浴剤を使って、日がな一日、朝寝、朝酒、朝湯を楽しんだ。十和田、奥飛騨、霧島、白骨温泉に、一日に何度も浸かる。まさに「小原庄助さん」の至福だ。

テレビ番組も普段より念入りにチェックし、これはいうものは逃さずに観た。録画はしたもののじっくり楽しむ暇のなかった番組も、三年前のものまで遡ってかなり消化した。その中には懐かしの名画、ドキュメンタリーはもちろん、西部劇なども含まれる。

常日頃行きたいと思いながら、なかなかそのきっかけ

がつかめなかった処も訪ねてみることに。晴天下、近郊高砂の名峰・高御位山^{たかみくら}に初めて登り、東播磨の四方の眺望に感嘆する。そこから遠くない、播磨灘観潮の名所「観涛処」にも立ち寄る。

神戸市西部の垂水区域にも出かけた。その界限にはハイカイ（私流街ぶら）仲間や、高校時代の同級生を含め五人が住んでいるが、とんと訪れたことがなかったのだ。海神社や大歳古代遺跡、舞子墓園、多聞寺など、地元の名所巡りで一日を過ごす。仲間それぞれには、在所近くを通り過ぎたタイミングで、「……なう（now）」のショートメールを入れてからかう。

ちょうど放映中のNHK大河ドラマ、光秀ゆかりの丹波八上城、黒井城にも登ってみた。恐竜化石が出土したと話題の、篠山川の川原にも降りてみる。かねて念願の舞鶴にも、一泊二日で初めて足を延ばし、得意のカラオケ曲「岸壁の母」を熱唱して帰る。

いつかやりたいと思っていたJRの大阪近郊区間乗りまくりにも挑戦する。マニアにはよく知られた、いわゆる「一筆書き」乗車である。神戸を出て大阪、和歌山、

五条、奈良、草津、米原を経て、琵琶湖を一周して帰る十五時間のツアーとはなった。何度か乗り替えをしたが、どの線のホームも車両内も思惑どおりガラガラで、たっぷりワンコイン「乗り鉄」を楽しむことができた。

不要不急の外出自粛がこの間、繰り返し叫ばれた。しかし実は、不要不急だからこそ心弾み楽しいのだということ、今回はつくづく思い知らされた。

仲間には、こんな時こそ頻繁にメール交換をと呼びかけていたが、行動自粛で脚が止まると、メールする活力自体も失せるものらしい。はかばかしい反応は返ってこず、ことごとく私からの一方通行、空回りに終わってしまった。

十月になって、写真本『ヒトおらへん』を出版した御仁のいることが地元紙で報じられた。物好きが私だけではないことを知って、嬉しくなった。

コロナ禍日常そしてモリカケサクラ

大越 浩平

令和二年はコロナに始まり、老人は罹患すれば重症化率が高くなるとのご宣託で外出制限生活が始まった。昨年は、今でもそうだがスーパーへの買い物は週二回を目途、月に数回の映画館通いはゼロ、他人と殆ど出会いのない旅行を三度、好物ホルモン焼き飲食ゼロ、趣味のアナログレコード鑑賞店行きも月一以下、それも客のいない開店時入店、客が入れば退散。レコードを預けている珈琲屋さんへはゼロ回、なぜならその店は若者しか来ず、無症状の若者が怖いから。OBペンクラブはフット句会最優先、十人前後で老人ばかりでかなり安心。妻は渋谷、私は新宿の病院通いにはタクシー利用、とても混んでいる電車に乗る勇気がない。簡素化した新年の準備をし、令和三年を迎えた。新年の来客は断った。

令和二年八月に人のあまり来ない場所にハイキングに

出かけた。二時間程度の軽いコースだったが、困難が待ち受けていた。それほど勾配の無い百メートル程度の岩場道に出合うが立つて歩けないのだ、筋力が落ちてバランスが取れない、ザックを背負って這って歩いた。一月から八月まで運動を何もしてこなかった付けがきた。ゴルフも一年以上していない。

帰京して毎日四十分程度の体操と散歩をする事にした。そこで問題発生。散歩の後に夕食をつくる意欲とパワーが出てこない、これには本当に参った。外食も出来ず、毎日弁当では辛い。見かねた娘が、いくつか総菜を作り置きして冷蔵庫に入れてくれた。これは助かった。

一日の過ごし方がパターン化した。七時半起床、朝食準備、八時半朝食終了、朝刊二紙、出版広告と書評熟読、ジャンルを問わずこれらと思えば書店に発注。十一時四十五分、夕食のネタに三分クッキングTV鑑賞そして昼食。昼食後は読書または家事、三時半、散歩と体操、五時夕食準備、夕食と飲酒 入浴 就寝。一日が終わる。単調な一週間、一か月があつという間に過ぎていく。

平成二十六年、『悠遊』二十一号に「負の遺産 安倍内閣」を寄稿した。その時懸念した危惧が現実化している。

ところで八年続いた安倍政治は何だったんだろう。株価は上げた、外交も成果はあった。

しかし記憶しておかねばならない事実がある。「桜を見る会」では安倍前首相、国会で百十八回、森友学園問題では官僚の虚偽答弁が百八回、そして公文書の改ざん、隠蔽、破棄。国民に知られたくない不都合な事実を隠し続けた。虚偽と知りながら国会答弁をしているその時間にも、国民は税金で彼らに給与を支払っている。そんなバカなことがあったたまるか。

安倍首相は退陣、菅首相登場、学術会議人事介入。この二人は、「民が国家の主であり、官僚の雇用主も国民」であること等眼中にない。官僚は国民全体のために働くことを忘れてはならない。

コロナ禍は、安倍政治が作り出した国民の格差拡大をあぶりだした。最大の被害者は、子供と老人達や非正規

労働者等の弱者だ。菅首相はしきりに「自助」を強調するが、彼らはすでに自助できる社会の枠組みから遠く外れている。彼らに自助を求めることは政治がゆがみ、政策が失敗していることを自白している証拠だ。

ここは徹底的に「公助」によって救わなければならない。底辺を安定化することが、社会安定の基盤なのだ。

コロナ禍により、世界のゆがみが噴出ししている。世界がどう変化するか予想もつかない。

「人間の愚かさを見くびつてはいけない」。ユヴァル・ノア・ハラリの言葉が気になる。

この一年、皆様と共に無事に過ごせることを願うばかりだ。

追記

その昔、十円玉を握りしめ、駄菓子屋で紅梅キャラメルや酢昆布を買うと、くじ引きができた。引いて当たると水飴煎餅等貰えた。外れくじを引くと、ああ「スカ」だ、とがっかりした。ああ「スカスカ」ガースだ。

私の初体験

大津 隆文

土井たか子氏は昭和から平成にかけて活躍した有力な政治家だった。女性として初めて社会党委員長そして衆議院議長を務め、大きな足跡を残された。私生活では日本国憲法と結婚したと称し、独身を通された。

ある時、某業界の組合関係の大会に来賓として出席し挨拶をされた。冒頭「皆さん、人は誰でも初体験は忘れられないものです」と切り出すと会場がどよめいた。私もあらぬ事を想像して一瞬息を呑んだ。見事に肩すかしを食らった。

人は誰も全く無垢、無体験でこの世に生まれ、無数の初体験を積み重ねて現在に至っている。その中で忘れられない初体験が私にもいくつかある。

あれは中学生の時だった。ソロバンが得意だった私は学校代表チームの一員として、ある女子商業学園で開催された珠算大会に参加した。休憩時間に小用を足そうと

してトイレに行った。当然のことながら男子用はなく女子用を使わせてもらった。用を済ませると目の前に鎖がぶら下がっている。何だろうとつい引いてみると、本当に驚いた。凄いい音がして水がどつと流れてくる。なかなか止らないので壊してしまったかと不安になった。

うぶな私の鮮烈な水洗トイレ初体験であった。

昭和三十三年、上京して大学の寮に入った。寮のトイレは憧れの水洗であった。ここで初めてトイレットペーパーを知った。こんなに便利なものがあるのかと驚いた。

子供の頃の落し紙は新聞紙を切ったもので、切るのは私の仕事だった（新聞一頁を八枚に切るのが普通で、九枚に切るのには少し技術が要った）。そんな私にとってトイレットペーパーの文化的ショックは大きかった。夏休みには一巻き貫つて帰って、田舎の弟や妹にこれが東京だよと見せてやりたいとさえ思った。

寮の風呂で友人が小袋に入ったシャンプーをくれたことも忘れられない。それまでは頭も石鹸で洗うのが当たり前と思っていたが、泡立ちも全く違うし、世の中にはこんなしやれた品があるのかと驚いた。

上京して環境が大きく変わり、カルチャーショックが数々あったが、食べ物でも初体験が少なくなかった。

中でも思い出深いのは、寮の友人と渋谷の恋文横丁に出かけ初めて食べたタンメンである。それまで中華といえばラーメンしか知らなかったので、世の中にはこんなに美味しい料理があるかと感激した。以後六十年余り、私は今も野菜たっぷりのタンメンが大好きだ。

環境が変わるといえば、昭和五十一年に転勤したニューヨークでも沢山の初体験をした。

アメリカ建国二百周年の年だったが、当時ニューヨーク市は財政的に破綻状態で街は荒んでいた。驚いたのは事務所のあるビルのトイレ利用に鍵が必要なことだった。

トイレといえば赴任前に先輩から忠告を受けた。小用の時日本は事後に手を洗うが、米国では事前に手を洗う。ポイントは手とあそことどちらが汚れているかであり、あちこち触っている手の方がはるかに汚いのでまず洗う、もし事後に手を洗うとあそこが悪い病気で汚れていると思われるので絶対しないように、とのことであった。

赴任後トイレで注意深く観察したが、アメリカ人も事

後に手洗いをしていた。あれは先輩が私を担いだのだろうか、真相は分からないままだ。

ニューヨークでは初めて口にする料理が色々あった。とくに記憶に残っているのがタルタルステーキだ。

牛肉を生で食べる料理があると聞き一度試してみたいと思った。なかなか機会がなかったが、ある時高級レストランに招待され、メニユーを見るとタルタルステーキがあるではないか。早速注文した。皆の注文を取り終わった後ウェイターが私のそばに来てそつと聞いた。「ユーは自分が何を注文しているか分かっているのか」と。出てきた料理の外観は焼く前のハンバーグに卵黄が乗ったような一品だった。とても美味しかった。機会があれば是非また注文したいと思った。

近頃、歳を重ねたせいか以前のような初体験の感動を味わうことがほとんど無くなった。世の中は新しいこと、未知なことに満ち溢れているのに何故だろう。

初体験が面倒になったか、臆病になったのだろうか。あの子供のような旺盛な好奇心、些細なことにも感動する新鮮な感受性はどこに置き忘れたのだろうか。

高野辰之と中山晋平（こころざしをはたして）

大月 和彦

新幹線が飯山駅に着くと、唱歌「故郷」（兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川…）のメロディーが流れる。作詞者は、長野県中野市出身で飯山とは深い縁のある国文学者高野辰之だ。

辰之は一八七六年、下水内郡永江村（現中野市）の農家に生まれ、村の小学校から飯山町的高等小学校へ二里の道を歩いて通学した。長野師範を卒業後飯山的高等小学校訓導を勤め飯山の名利真宗寺の三女と結婚。師事していた上田万年博士の下で国文学を研究するため、二六歳で上京する。

文部省属の職を得て、東京音楽学校の邦楽調査掛として浄瑠璃など邦楽の調査研究を行う。かたわら、文部省で小学唱歌教科書の編集に従事する。この間に音楽学校教授の岡野貞一とのコンビで「朧月夜」、「紅葉」、「春が

来た」など唱歌の名作を生み出した。当時教科書の著作権は文部省にあり、作詞者と作曲者の名は長い間伏せられて、その一部が明らかになったのは戦後になってからである。

辰之にとって教科書づくりは国文学研究のための副業だった。後に「私は役所勤めというのは如何にみじめであるかを実感した」と述懐し、教科書編集の仕事から解放された時には、やっと晴れて学者の生活に専念できると喜んだという。日本歌謡史研究で学士院賞を受賞する。東大講師、大正大教授を歴任。晩年は郷里に近い野沢温泉に隠棲、一九四七年同地で死去、七十一才。「故郷」と「紅葉」の記念切手が発行された。中野市永江の小学校跡に建てられた高野辰之記念館には両親への手紙などの資料が展示されている。

長野電鉄信州中野駅前に中野市出身の中山晋平作曲、西条八十作詞の童謡「肩たたき」の像が建っている。晋平は大正から昭和初期に「カチューシャの唄」、「証城寺

の狸囃子」、「船頭小唄」など多くのヒット曲を作り、日本のフォスターと呼ばれた作曲家。「東京音頭」は、今も各地の盆踊りに歌われ、ヤクルト球団の応援歌として神宮球場からも聞こえてくる。

辰之より十一年遅く、下高井郡新野村（中野市）の農家に生まれた晋平は、父親の急死で母親に女手一つで育てられる。中野町の高等小學校を卒業後、野沢温泉の隣の小學校で教壇に立つが、志を立て上京する。島村抱月の書生をしながら東京音楽學校に学ぶ。卒業後浅草千束小學校で教師をするかたわら作曲活動を続ける。松井須磨子が歌う「カチューシャの唄」がヒット、続けて「ゴンドラの唄」、「波浮の港」など次々と歌曲を作った。また童謡運動に参加して「証城寺の狸囃子」、「あの町この町」、「十日町小唄」や「野沢温泉小唄」などの童謡、新民謡のほか校歌や社歌など三千曲の作品を残している。一九五二年熱海の山荘で死去、六十五歳。中野市の生家跡に建てられた晋平記念館には遺品や手紙、作品集などが展示され、晋平のメモデューを聴くことができる。

晋平は、音楽學校在学中に郷里の先輩辰之の講義を聴き、生涯慕っていた。辰之は、よく學生を自宅に招いて歓待し、特に同郷出身の學生をよく可愛がったと教え子たちがいう。

教科書編集者として、教訓や地理歴史の知識を盛り込んだ唱歌を作っていた辰之は、大衆受けのする歌曲を作り、唱歌に批判的な童謡運動に参加した晋平と立場や考え方が違っていた。が、晋平の作品には好意的だった。自著で「カチューシャの唄」について「こうした歌が生まれた背景は時代の必然である」と功績を認めている。

一九二八年に辰之は飯山町のスキー協会から頼まれて（ここは飯山、スキーの名所、月や花より雪を待つ…）と詞を作り、晋平に作曲を依頼して出来た「飯山小唄」は、当時なぜかレコード化されず、今はすっかり忘れ去られている。

コロナを逃れての旅さまざま

大野 晃

十勝川温泉、二月十一日から二泊三日の旅

昨年は、新春一月十五日から二十四日までオーストリアのインスブルック近郊でスキーを楽しんだが、これが海外への旅の最後となりました。すでにイタリアではコロナが発生しており、ブレンナー峠を越えると危険な情勢でした。

もっと大変だったのは羽田空港で、旧正月を利用する中国からの旅客でごった返していました。

今思えば日本政府はこの時に手を打つべきだったのです。

まだ国内の旅の制限はなかったので二月十一日から二泊三日で、帯広空港から十勝川温泉を訪れました。帯広には六花亭があります。駅から五分ほど歩く本店ではお茶を飲みながらお菓子を食べることができます。僕の愛用スポットの一つです。駅自体には大した設備はなく、

少し出ると飲食店が連なっています。

熱海、六月五日一泊

熱海の伊藤園というホテルは安いので外の景色が見えるだけで満足すべきなのでしょう。

久し振りにお宮の松を見ることができました。

熱海には勝手知った店が多いので楽しく過ごすことができました。伊東まで足を延ばしましたが、やはり日帰りでは忙し過ぎでした。

伊香保温泉、八月一日から三泊四日

徳田屋旅館に宿泊。新宿のバスターミナルから草津行で途中下車が便利。私個人には草津の湯は熱すぎて苦手です。伊香保神社へは道を歩いて上ることに意味があるようです。見晴台からの眺望は素晴らしいものでした。さすがに草臥れて帰りはケーブルのお世話になりました。

もう一か所、ここでは榛名湖にバスで上ることができません。バスの終点には立派なホテルがあつて、湖を眺めながらランチを楽しみました。

どちらにも良いところがあつてゆっくりと滞在したいと思いました。

紋別温泉、十一月二十四日から三泊四日

今大変評判の悪いGOTOキャンペーンを利用した旅で七千円の優待券を紋別滞在中に使うことが義務づけられていました。宿のビール代にも利用可能で助かりました。北海道内なら有効で千歳空港が一番恩恵を受けそうです。ただその後の推移を見ると札幌はコロナ危険都市になって素通りの客が増えています。

コロナの危険性について私見を述べますと、東京に居るよりも北海道の田舎にいた方が遥かに安全です。

危険なのは夜の飲み屋街ではないでしょうか。

私のようにホテルの食堂で夕食を済ませて、寒い寒いと寝てしまう観光客には危険はありません。夜の食事が目の敵にされていますが、正しい判断と思っています。

紋別の街はだだっ広くてこの寒さでは長時間歩くのは無理でした。極端な言い方ですが街の大勢は飲み屋さんなので昼間は立ち寄れる場所が少なく歩くのも大変でした。食事で印象に残ったのは種々の貝類が出て美味しく頂きました。街に出て海産物のお土産を買うのも楽しみの一つでした。

二十六日は「三の酉の日」というニュースが流れていました。浅草の活気ある姿を思い浮かべました。北海道も東の外れではどうしようありません。

年が変わっても浅草の人出は余り減らないようですが、隠れたファンが多いのでしょうか。

最近の浅草について私は距離を置いています。その理由は、いまだでは東京で一番物価が高いのが浅草ではないかと思っていますからです。一般には新宿や渋谷の方の競争が激しくてサービスも値段も浅草を遥かに凌いでいるように思えるのですが――。「浅草は田舎者の街」と言ったらどやされそうです。

結局昨年の私の旅は海外の旅が禁止状態になって不完全燃焼に終わったようです。

兄弟に会うのも知人を訪れるのも、相手が東京に住む人間をどんな目で見ているかを考えると敢えて訪ねようとの勇気が湧いてきません。

結局その不満の尻を北海道に持って行っているような気がして申し訳なく思っています。

『昭和の精神史』との出会い

大平 忠

この本に出会ったのは昭和四十年だった。社会人となつて三年経った頃である。『ビルマの竖琴』の著者である竹山道雄の名前に惹かれて求めたのだった。ページを開いて読むにつれ、頭を殴られたような感じを受けた。この時から日本近現代史に対する考え方が大きく変わった。

この本は、E・H・ノーマン著『日本における近代国家の成立』に対する疑問と批判から始まっていた。「歴史を見るとときには事実の確認から出発しなければならぬ。しかし、ノーマンは、既定の大前提からの論理によつて事実を歪めている。あるいは、都合のいい事実だけを選んでゐる」。私はそれまで、ノーマンのこの本を学生時代から日本近現代史の教科書と考えていた。ショックだった。

竹山道雄は、日本の戦後進歩主義の論理の矛盾を、ノ

ーマンを例にあげて批判していた。ノーマンは言う。「明治維新の政治革命は、民衆が達成したものではなく封建支配階級の一翼によって達成された」。竹山は、「これは確かにそうであろう。しかしだからといってこれが昭和の超国家主義に結びつくものか。部分的真理の一般化という誤りを犯している」と突く。そのほか例を挙げて、条件と原因の混同があると説く。「天皇制ファッショ」が歴史を作ったとの進歩主義の主張も、この過ちを犯している。

ショックの二つ目は、東京裁判の進め方と判決に対する疑義である。被告たちがはじめから侵略の野心を持つて共同謀議をしたという前提に立った裁判であり、同じ過ちを冒していると指摘していた。さらに、ソ連に対して日本が侵略したと判決文にあるが、ソ連が日本を侵略したのであり、日本はソ連を侵略したことはない。誤った判決であると書いていた。その当時、戦前の日本の行ったことは全て悪と言い、またソ連判事と同じことを言う人たちが存在したことは事実だった。

東京裁判判決の問題点を、昭和三十年の時点ではつき

りと指摘し発言した竹山道雄の勇氣は称えられよう。残念ながら東京裁判史観は未だに色濃く残っている。

シヨックの三つ目は、昭和の混沌と闇の究明の中で、ソ連のコミンテルンの影響について述べている箇所がある。これにも衝撃を受けた。『近衛文麿の上奏文』について触れた部分は、それまで読んだ昭和史には全く出て来なかった切り口だった。

『昭和の精神史』は、昭和三十年に書かれて三十一年に発刊された。日本では昭和二十七年まで占領軍の検閲があり、時期を待ったのだろうか。ノーマンは昭和三十一年スパイの疑いがかかり、エジプト・カイロで自殺した。

この本を読んでから、日本近現代史について勉強しようとしたが、仕事をしていた時期は司馬遼太郎を読んでも終わってしまった。まとまった読書をしたのはこの十五年である。順不同に近現代史についての本を乱読した。今も、あちらこちらと頭を突っ込んでいるが、強いて言えば、現在の焦点は次の二つである。

一つは、猪木正道の教え子、高坂正堯、中西輝政を読

んでいるうちに、『ヴェノナ文書』にぶつかった。一九四五年から公開されたソ連コミンテルンのアメリカ共産党分子への暗号電文である。これは、『近衛上奏文』とも関連がある。さらに二〇一一年フーバー元大統領の回顧録が出版され、日米開戦から戦後の日本施策に至るまで新しい事実が判明してきた。これらインテリジェンスの歴史の研究は、第二次世界大戦の全貌を知るためにも、現在中国が世界各国で行っている目に見えない文化侵略工作を知る上でも必要であろう。研究成果を読みたい。

二つは、猪木正道の師であった河合栄治郎に取り付いた。すると、大変な巨木であることが分かってきた。東大経済学部にあつて、昭和の初めはマルクス主義に潜む危険性について声を上げ、その後は台頭してきた全体主義の批判を敢然として行つた。昭和十五年東大を追われ、起訴された。昭和十九年五十三才の若さで亡くなった。戦後、左右に偏しない河合が存命であれば、日本の社会科学界左傾化のブレーキとなつたのではと無念である。

骨の髄からの自由主義者であつた河合栄治郎の名著『学生に与う』を遅まきながら読もうと思う。

横文字の発音と表記

大森 海太

窓を開ければ港が見える

メリケン波止場の灯が見える

ブルースの女王、淡谷のり子『別れのブルース』の冒頭である。ここでいう「メリケン」とはアメリカンのこと、昔は小麦粉のことをメリケン粉とも言っていた。正しくはアメリカンだろうが、メリケンのほうが発音の響きには忠実に思える。

アメリカ海軍の軍人で十九世紀半ば日本に開国を追ったペリー提督のことを、以前はペリリと習った。これもペリーが正しいのかもしれないが、ペリリのほうが英語のRの発音に近いような気がする。

ヘボン式ローマ字で知られたヘボン博士と、『ローマの休日』で有名な女優オードリー・ヘップバーンが同じ苗字だと知ったときはビックリした。彼女の名前を発音

に近い表記にすればオーリ・ヘボンかもしれない。

どうも昔の人のほうが耳で聞いた音に近い表記をしていたようで、アルファベットで記された文字を几帳面にアイウエオに変換して書き表すのは戦後になってからであろなか。

以前チェコのプラハに行ったときのこと、この著名な作曲家ドボルザークの名前は、彼の地の発音によれば母音がひとつ（一音節）だと聞いてさらに驚いた。日本語で表せば、

朝ばらけド・ボルザークの夜明けかな

明らかに六音節である。ところがこれをチェコ語（スラブ語系）に倣って表記すれば「ズブジャク」とでもするのかわ、「ズ」も「ブ」も子音だけで母音があるのは「ジャ」のところだけである（ネットで調べると「ズ」のところにもごく弱い母音が入るので二音節とされているが、現地では一音節と言っていた）。

台湾であちらの連中がしきりに「エレクトロニー」と言う。何のことか分からなかったが、あとで聞いてみると「エレクトロニクス」のことであった。日本人は表記されている音を、強い音も弱い音も同じように発音するが、中国系は大胆に省略する。でも響きとしてはエレクトロニーのほうが英語に近いのではないか。

シンガポールで「カバ」と言われたときは、これまたさっぱり分からなかった。よく聞いてみると駐車場のことで、car park と言っているのだが、「カバ」としか聞こえない。

以上述べてきたような日本人の横文字の音感、我々が受けてきた英語教育とも関連があるのではないか。なにしろ中学一年で初めて英語の授業で習うのは「アイ アム アー ボーイ」「ジス イズ アー ペーン」とても英語とは思えない。その後大学受験に向けてかなり難しい英文を読まされたが、発音に関してはほとんど無関心に近かった。その点、最近では小学校でも英会話を

勉強するようだし、だいぶ改善してきたとは思われる。

いっぽう日本語にはわりあいフレキシブルなところがあつて、いろいろな外国語を我流で簡単に取り入れてしまう。文字のないところに漢字が輸入され、まもなくカタカナやひらがなが開発され、そのうちに和製漢字も登場した。ポルトガル人と交流して「カルタ」や「テンブラ」などが日本語のボキャブラリになった。

ごく最近ではパーソナルコンピュータが「パソコン」となり、スマートフォンが「スマホ」となり、和製英語を数え上げればきりがなし。そうかと思うと「入力」だの「検索」だの古くさい漢語が当り前のように使われているのは奇妙だ。

いずれにせよ「アメリカン」も「ヘップバーン」も、「パソコン」も「スマホ」も外国に行ったらまったく通じない。これからの若い人たちには日本人のカラに安住せず、広く世界に通用する人間になってもらいたいものである。

コロナの年のコンサート

川口 ひろ子

「ウィーン・フィル良かったわよ、感激しちゃった」
ウィーン最頂の音楽仲間S子が興奮気味に話しかけてきた。「え！ 日本で？」「そう、サントリーホールで」

コロナ禍の為多くのアーティストの来日公演が中止になる中で信じられない話だ。

公演の様子は数日後の新聞に、「ウィーン・フィルの心意気」と題して大きく報道された。以下その概要。

二〇二〇年十一月五日から十一日迄ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の来日公演は、北九州、大阪、川崎、東京の四都市で行われた。オーストリア政府からの強い要請があった為、特例として我が国へ入国が認められた。

感染対策は徹底していて、チャーター機で来日、国内移動の新幹線車両は貸し切りの他、ホテルからの外出は禁止など、団員の行動は厳しく制限されているツアーであった。指揮者のワレリー・ゲルギエフは「強い意志と音

楽を愛する心を持つ私たちは、コロナ克服という難しい問題の前に、音楽や芸術の力がいかに強いということを示したい」と語っている。

演奏曲目にモーツァルトがなかったのは残念であるが、チャイコフスキーやR・シュトラウスの作品など、困難を乗り越えて前進しようという思いを込めた演奏は、日本各地の音楽ホールを連日満席にし、S子のような熱烈ファンの心に強く響いたことであろう。

音楽仲間の平野玲音さんはウィーン在住の女流チェリスト。ヨーロッパ各地でソロ及び室内楽演奏を行い活躍中で、年二回は東京でもリサイタルを開催している。私たちの同人誌「モーツァルティアン」に毎号連載されるエッセイには、これら音楽活動と共に、ウィーンのグルメ情報が語られていて楽しい。

二〇二〇年秋号では、コロナに負けまいと頭をひねり絶えず工夫をしているウィーンのアーティストたちの活動を紹介。その一例が、夏に開催された街を挙げてのお祭り「ウィーンは賑やかになる」で、音楽家だけではな

くあらゆる分野の芸術家二〇〇〇人が参加して行われた八〇〇のパフォーマンスだ。これはウィーン市史上初めての試みだという。平野さんはムードザム小路の屋外舞台でイラン出身のピアニストと共演、「コロナ危機の中で不安を抱える人々の明るい未来への希望となりますように」との願いを込めて演奏したと記している。

国家プロジェクトともいえる大規模なウィーン・フィロ日本公演とウィーンに住むフリーの芸術家たちの市民運動。一丸となつての困難克服の祈りを込めたこの二つの活動は強烈なメッセージを発信し、レポートする人たちの、そして私たち多くの読者の心をも熱くする。

さて我が国、以下はモーツァルト限定のごく僅かな演奏会を聴いた私の感想である。

二〇二〇年前半はコロナ禍の為海外演奏家の入国が認められず、予定していたコンサート多くは中止となった。蔓延収束の兆しの見えた秋からは国内で活躍する若手を起用した代替公演が行われた。全て水滴飛散の少ない弦楽器を起用した少人数編成の室内楽演奏会であっ

たが、いずれも活気溢れる飛び切り上等の演奏で、今年前半の私の欲求不満を吹き飛ばしてくれた。なかでも光っていたのは「破れかぶれだ、この際暴れてやろうか」と言わんばかりの若手トリオの威勢の良い演奏だ。本音むき出し、激しい動きにも拘わらず演奏に乱れないのは基礎がしっかり身についているからであろう。

ここ数年来の我が国の若手クラシック演奏家の進歩成長は著しい。私は、劇場の閉鎖で発表の場を失った彼らの豊かな才能と可能性に期待している。

世の激変をチャンス到来と捉え、コロナ禍収束後に備えて準備を始めてほしい。音楽の都・ウィーンの皆さんの意気込みを見習って、臆せずに変化に挑戦してほしい。若い音楽家の情熱は、今回の危機を必ず乗り越えて魅力ある未来へ繋げる力を発揮すると、私は確信している。



私の癒やし

川村 邦生

令和二年に今まで経験したことのないような事態が発生した。中国ウィルスによるコロナ騒動だ。世の中は外出自粛、三密回避などを強く求められ、我ら暇人にとって唯一の楽しみである飲み会、カラオケが制限されて気が滅入る日が続いている。「毎日が日曜日」族から憂さ晴らしが取り上げられてしまった。巣籠もりを強いられ何をしていいかわからない。巣籠もり中、家人の協力が得られ、家仕事を求められる人はまだ幸せだ。ぐうたら人間の私は、その仕事さえ得られず何もすることがない。これはストレスだ。

私の唯一の仕事は朝夕の犬の散歩だ。片足を引きずる老犬を引っ張りながらする散歩、歩く速度はとても遅い。私も片足が悪いのでお互いにかばいあうことで老老の気が通じる。

すれ違う犬仲間からいたわりの眼差しとともに、ねぎらいの言葉をかけられる。犬の名しか知らない友人もできた。同じ時刻に同じ場所を通るので、足音を聞きつけ挨拶の為に門まで出てくるワンちゃんもできた。よしよしと頭を撫ぜ用意してきたおやつをあげる。

散歩途上の家で九十歳を過ぎた老夫婦が、四、五匹の保護猫を外飼いしている。私の足音を聞きつけおやつをねだりに来る。道路にごろりと転がりすりすり甘える。ここでもおやつをあげる。特にまだ小さい二匹の茶白双子は怖さ知らずか老犬を無視し、寄ってきてねだる。散歩中に癒しを求める私、彼らがおやつ目当てと分かっている、いつも待っていてくれることは嬉しい。

自宅の庭に鳥の餌箱を置いている。朝の散歩を終えた後は小鳥への餌やりだ。雀たちはお隣の雨トイに並んで待っている。餌箱に近づき用意し始めると、トイから一斉に飛び立ち餌箱近くのかなめもちの木に集まる。そろそろ朝ごはんだとわかるのだ。餌箱に稗粟を入れるのを

待っている。

ミカン、リンゴ等をもちの木に刺すと、近くで待っていたようにつがいのメジロが食べにくる。彼らより大きなヒヨドリがどこからかきて小鳥を追いはらってしまう。どこの世界も同じだ、強いものから食事が始まる。

最後のエサやり仕事は、金魚、メダカ、エビだ。勝手に動き回る魚たちを眺めているとこれもまた無心になる。冬の間は水が温む昼間の仕事になる。

犬、猫、小鳥、魚、それぞれでも癒しの生き物だ。更に加えてはならないことがあった。それは庭の草むしりだ。生き物とは少し違うが、草むしりも気持ちが悪く着く作業だ。

小さな台車に腰を掛け、手が届く場所の雑草を見つけて抜く。ただこれだけの作業である。考えることなく悪者をやっつけるつもりで手を動かす。そして草むしりした所を振り返り気分良くなる。これが癒しになっている。

コロナ騒動はまだまだ続く様相だ。当然ながら外出や

三密の自粛は続けざるをえないであろう。しばらくはストレス解消の為に、人との接触を減らし、彼らとのコミュニケーションがいいかなーと考えてしまう。

コロナ騒動で喜んでいるのは、いつもより沢山、そして定期的におやつをもらえる彼らか。そう考えればいいではないか。



川辺のラヴ・イズ・オーヴァー

木村 敏美

吸い込まれる様な青空、心地良い風に吹かれ、福岡市西方にある室見川の広い土手の中の遊歩道を主人と散歩していると、何処からか管楽器の曲が聴こえてきた。

遠くに橋が見え、近づくとは音は橋の付近から出ている。

見ると川の向こう側の橋の下で、一人の若者がサクソフォンを吹いている。思わず足を止めて聴いた。繰り返しの同じ曲で、時々やり直しているので練習中なのだろう。聞き覚えのあるその曲は、かなり前にヒットした欧陽菲菲の「ラヴ・イズ・オーヴァー」だった。五月晴れの川辺は、青々とした草が風に揺れ木々の若葉が輝き、サクソフォンの音色は何処までも響きわたり心に滲みた。

遊歩道の散歩者達も、そして橋の上にも立ち止まって聴いている人達もいた。

その日は、運転免許証の更新の手続きで最初の難関、認知症検査の日。ほぼ五十年ぶりに受けるペーパー試験

は本当に心配だった。ついに後期高齢者となり、認知症検査は必須科目、七十六点以上とれば、後は実技と適性検査、講習だけで気楽だが、四十九点以下は病院の検査を受けなければならない。

無事合格ラインを通過。晴れ晴れとした気分で主人と合流、免許センターを出たのが昼過ぎだった。

コンビニで弁当を買い、車を走らせていると室見川が見え、川辺の土手の中にある運動公園で弁当を開いた。

丁度コロナ騒ぎで、緊急事態宣言がまだ解除されていなかったが、好天気に誘われ、子供連れや高校生のブラスバンドらしい生徒が数人練習していた。

草の上で暫く横になつた後、公園の先にある遊歩道を散歩していると遠くから音楽が聴こえた。それが前出の「ラヴ・イズ・オーヴァー」だった。

人生を振り返ると様々な多くの音楽に出会っている。

戦後の混乱期に山奥で育ったので、音楽は学校で習うか時たま聞くラジオから流れる歌が全てだったが、不思議によく覚えていて。古関裕而の「鐘の鳴る丘」、「高原

列車は行く」「黒百合の歌」他に少女時代の美空ひばりの歌は一番だけだが今でも歌える。九歳で福岡市に移住。中学校ではクラシックの音楽鑑賞の時間があり、感想文は先生に褒められた。高校生になると、すでに社会人になっていたシャンソン好きの長姉の影響で「枯葉」、「詩人の魂」、「パリの空の下」等、日本語で歌う歌手も出てきてよく聴いた。

十八歳で社会人になり、薄給ながら映画も見られる様になった。「太陽がいっぱい」、「禁じられた遊び」、「道」をはじめ、たくさん観たが、主題歌が素晴らしく忘れられない。また歌声喫茶ができ、ロシア民謡等を友達と歌った。他にタンゴやラテン系の音楽、ジャズもあったが、コンサートに行く程の余裕もなく、レコードも持っていなかったもので、偶然聴いたラジオやテレビの音楽番組が記憶の全てとなった。

そんな青春時代、ラジオでビゼー作曲「真珠採り」の第一幕の曲が軽音楽と共によく流れていた。明るく広々とした海が見えるようで、希望と淡い出会いへの期待が湧き、好きな曲の一つとなった。その頃カラヤンやビー

トルズが来日する事が職場で話題になっていた記憶がある。

二十二歳で結婚して、長男を出産した時、当時テレビドラマで人気の「飛び出せ青春」の主題歌「太陽がくれた季節」がふと頭を駆け巡りはじめ退院する迄続いた。また、三十九歳の時、主人の赴任先マレーシアで母危篤の知らせを受け帰国、何とか間に合ったが他界。マレーシアに戻る飛行機の中で、フォークソングの「バラが咲いた」が着陸するまで頭の中で続いた。この後、この国では珍しい赤い野ばらが庭先で私を待っていた様に二輪咲いたと、短い詩を書いている。

人生の大きな出来事の時、思いがけず出会った曲。

長男誕生で「太陽がくれた季節」。母との別れの時、「バラが咲いた」。満七十五歳を迎える二〇二〇年には、サクソフォンの「ラヴ・イズ・オーヴァー」

歌は世につれ、世は歌につれではないけれど、どれ程多くの名曲が心の支えになっているのか計り知れない。

コロナ後に日本が取るべき道

児玉 寛嗣

コロナ禍で観光業や飲食業をはじめ経済活動が大きく落ち込み、どの国の政府も企業救済や失業対策のため積極的な財政出動で支出を大幅に増やしている。その原資は国債だ。

これまで国債発行を続けてきた日本の発行残高は昨年四月時点で既に対GDP比二五〇%にもなっていた。国債のほぼ半分は日銀が保有している。国の歳入のほぼ半分は国債に頼っているのだから残高が増えるのは当然だ。日本人は払った税金の二倍のサービスを享受していることになる。

コロナ対策で企業・医療関係者支援や失業者救済のため増えているし、感染状況次第ではさらに残高が膨れ上がることもあり得る。これまでバラマキ行政は財政収支が悪化させると政府に批判的だったマスコミもパンデミックという緊急事態であることを意識してか、「これ以上、

国の借金を増やすな」という批判は影を潜めている。

しかし、国民全体の年収であるGDPの三倍近くの金をこの先どうやって返していくのかの道筋は見えない。

政治家は経済を持続的に成長させて税収を増やし、支出との差額を返済に充てると言ってきた。だが、少子高齢化で年金・医療などの支出が今後増えるなかで、それがどれだけ現実的なのかはなはだ疑問だ。むしろ、国家予算の国債に頼る比率は年を追うごとに増えている。

最近、「現代貨幣理論」(MMT)という従来の経済学の考え方からすると暴論とも言われる説が脚光を浴びている。この理論は、「政府が自国通貨を発行している限り、国債残高が増え続けても自国通貨建ての国債が返済できなくなることはない」という説である。すなわち、国債残高の増加は心配することはないという、日本にとって願ってもない説である。

その論では市中銀行などに回収している国債が満期を迎えた時、あるいは満期を待たずに国債を売り現金化したいと言った時に、その額に相当する国債を新たに発行

し、日銀に買い取ってもらい受け取った現金を国債償還に充てればよいというわけだ。海外の投資家に対しても自国通貨建てであるから為替変動を気にすることなく同様な対応が可能だ。

従来、通貨を発行する中央銀行（日本では日銀）が国債を買い取ることは禁手とされてきた。通貨を発行する中央銀行を政府から独立した組織とする体制をどの国も取ってきたのはそのためである。国債を発行し続けるとインフレが高じ、最終的にはハイパーインフレが起ころとの恐れがあると考えられているからだ。

だが、市場経済制度のもとでは物の価格は需要と供給の関係で決まる。消費者が必要とする以上に物が出回っていれば、国債発行で出回る通貨の量が増えてもインフレは起きないのではないだろうか。

かつて日本でも第二次大戦直後、激しいインフレが起ったことがあった。原因は戦争の影響で農業をはじめ、あらゆる製品の生産量が大幅に低下し、圧倒的に供給が需要を下回ったことにあった。現状の日本では大規模地

震などの災害により生産設備が広範に破壊されたり、世界各地での戦争の勃発により輸入が途絶えたりしない限り、需要・供給バランスが大幅に崩れてハイパーインフレが起きることはないだろう。

発展途上国では国債残高が増えると対外的に通貨の信用失墜に繋がって自国通貨の暴落（日本で言えば大幅な円安）が起きている。これは輸入品の高騰を意味し、国民生活を大きく圧迫する。しかし、日本では円安にはなっていない。この理由のひとつは日本がドイツに次ぐ世界第二位の経常黒字国であり、世界有数の対外純資産国でもあることだ。つまり、金持ちの国と見られ、円の信用があるからだ。将来、高齢化が進み経常赤字国に転ずるようなことがあれば信用は失墜する。それを避けるために、経常黒字をいかに維持するかである。今はコロナで頓挫しているが海外観光客の増加も黒字に貢献している。それにとどまらず、技術競争力をつけるなどして海外で稼ぐ力を今のうちにつけなければならない。

私の故郷

斉藤 征雄

故郷を離れてかれこれ六十年になるが、私の出身地は福井である。福井市に隣接する丹生郡天津村風巻にゅうぐんあまつむらなまきという四十戸ほどの集落が私の生まれたところで、そこで成長期の十八歳までを過ごした。

（天津村は昭和三十年に三村が合併して清水町になり、平成の大合併で福井市に編入された）

村は專業農家が多い農村だった。私の家は江戸の文政時代に地域の地主から分かれた分家で、屋号を「清太夫」といい、父が五代目に当たる。隣に本家があった。当時かつての地主は農地改革で土地を失い、没落していた。

私の家は、母と祖母で稲作の農業、父が高校の教師をしていたので、わが家は專業農家に比べれば経済的には少し恵まれていたと言えるのかもしれない。母も結婚前は小学校の教師だった。私は長男で、姉と弟がいた。

小学校入学が昭和二十六年、中学卒業が昭和三十五年だった。経済白書が「もはや戦後ではない」と謳ったのは昭和三十一年であるが、私の子供時代は、日本が戦後から脱却して高度成長が始まるその前夜であった。

農村には田んぼと里山があるばかりで、初夏には蜚が群れ飛んでいた。映画館や商店街もなく、テレビもまだ普及していなかった。

私は、小学校では合唱、中学ではブラスバンドと放送部に所属して熱心に活動した。それ以外は家でラジオを聞いたり、マンガ本を読むぐらいしかする事がなかった。成績は、高校進学に心配はなかったが、将来に特別の夢を抱くこともなく、姉や従兄が大学へ進んだので、自分もどこかの大学へ入ることを漠然と考えていた。

農作業の手伝いは比較的よくやった。そうした環境の中で野山の自然を満喫した。この年になるまで大きな病気をすることがないのはそのおかげかもしれない。

遠出するのは学校の遠足ぐらい、当時の農村には家族旅行の習慣もなかったので、年に一度越前海岸へ家族で海水浴に行く程度だった。もちろん、家には車などはあ

るはずもなく、私はほとんど生まれた農村しか知らない、田舎の少年だったのである。

高校は、福井市にある県立高校へ進んで、十キロ以上の砂利道を自転車通勤した（雪が積もればバス通学）。進学校だったので、高校生活は受験勉強一色、遊ぶ暇はなかった。男女共学だったが質実剛健の校風の中で、まじめな高校生活を送った。そして高校を卒業するとともに私の福井での生活は終わった。

こうした十八年だったから、福井で生まれ育ったとはいっても、福井のことを実際のところあまり知らずに過ぎたと言っても過言ではない。

しかし身体に染み込むほどの強い記憶に残ったものに雪がある。福井は豪雪地帯で、平野部でも積雪が一メートルを越えることも珍しくない。私が高校三年の冬は、歴史に残る三八豪雪さんぱちゅうだった。

秋は冬支度、そして三月まで雪に閉じ込められる。春には雪解けを待ちかねて農作業が始まる。雪国の暮らしは、雪との戦いであり共存である。

子どもの頃はそれがあたりまえであって、冬に風揚げをしたり半ズボンで遊んだりする子供たちを絵本で見て、同じ日本とは考えられなかった。しかしある頃から、日本の反対側には雪の降らない快晴の空があることを知ったときには、何とも言えない悔しさを感じたものである。私の中で雪国からの脱出が、いつの頃からか強い願望になっていたのである。

その後、学生生活や会社生活で全国各地を転々とし、そして東京が「終の栖」になろうとしている。

両親が亡くなってからは、福井を訪れることも少なくなってしまった。福井のことをあまり知らず、しかもそこからの脱出をひたすら願ったにもかかわらず、今思えば福井が故郷という思いは自分の中でむしろ強くなっていることに気付く。

私にとつての故郷ふるさととは、いったい何なのだろうか考える。それはいわば、母親の胎内の延長のような懐かしさなのであった。それが私にとつての故郷への思いなのだという気がしている。

感染症の日本への流入は？

清水 勝

新型コロナで明け暮れる毎日を過ごしていることから、感染症について考えたり、調べたりするようになった。島国である日本に感染症はどこから、どう伝わってきたのか。どんな歴史とかわりがあるのか。

結核、天然痘、マラリア、ハンセン病、麻疹、梅毒、コレラに焦点を当て、調べてみた。

◆稲作とセツトで結核菌が来た

古代人の遺跡からは人骨や排泄物の化石（糞石）が数多く発掘されている。弥生時代人の人骨からは結核痕跡である脊椎カリエスの進行がみられる。縄文時代人には見られなかったことから、弥生時代の特徴である稲作文化との関連が考えられる。即ち、稲作と共に結核菌も大陸から伝わってきた（紀元前五〜四世紀頃）に違いない。

◆仏教交流と天然痘

『日本書紀』によれば、欽明天皇十三年（552年）

と敏達天皇十四年（585年）に疫病の流行が記されており、とりわけ敏達天皇時の病については膿疱ができたところ。これは天然痘（痘瘡）の病状と推定できる。敏達天皇は仏教の普及を認めていたので、大陸から多くの渡来人が仏教の教えとともに天然痘ウイルスをも持ち込んだと考えられる。この病は仏教への信仰の傾斜に対し、八百万の神々の怒りであると仏教弾圧派を勢いづけた。

天然痘はその後も永く人々を苦しめる。とりわけ聖武天皇の天平七年（737年）には大宰府管内から流行し、瞬く間に全国に広まり「死者はかぞえることができないほどであった」（続日本紀）とある。この流行の背景には、新羅で疫病が大流行していたのも知らずに、新羅との交流を盛んに行っていたためだろう。

なお疫病のほかにも干ばつや災害にも見舞われた苦難の時代であったが、見事立ち直って大仏建立をはじめとした天平文化の礎を築いた時代でもあった。

◆光源氏も瘡（おこ）（マラリア）を病んだ

水田に生息するハマダラ蚊が媒介するマラリアは「養老律令」（757年）に瘡として記載されている。

この病はイタリア地方の風土病であったものがローマ帝国の拡大に伴い、中国に、そして日本にやってきた。

『源氏物語』の「若紫の巻」に「わらはやみ」と記載されている他、『御堂関白記』にも三日に一度高熱に苦しんだ様子が書かれている。

◆感染症にも関わらず遺伝病とされたハンセン病

差別を生んだハンセン病は、らい菌の潜伏期間が数十年と長く、感染力が弱い。そのため長い時間接触のある家族内で感染することが多い。それ故に歴史的にも世界的にも遺伝病と誤解されてきた。

ところが、『日本書紀』（720年）、『令義解』（833年）に白癩しらだげと記述され、七世紀の初めに百済から白らい者が渡来したとされていただけに、だれもがそれを気付かないまま遺伝病と扱っていたとは…。

◆江戸の人々が恐れた空気感染の麻疹はしか

平安時代後期に書かれた歴史書『栄花物語』に「あかもがさ」が流行した（998年）と書かれている。これは麻疹はしかを意味している。とりわけ江戸時代には二十数年の間隔で、十四回の流行が確認されている。

麻疹ウイルスは感染力が非常に強く、空気感染するため、江戸のように人の集まる所では大流行になりやすい。生類憐みの令で有名な徳川綱吉も麻疹で死んだという。

◆世界を高速感染した梅毒

1493年、コロンブス探検隊が西インド諸島から持ち帰ったとされる梅毒は、それから僅か一九年後に、海賊集団の倭寇により日本に持ち込まれた。また、豊臣秀吉の朝鮮出兵をきっかけに九州で流行した。豊臣家の忠臣であった加藤清正、前田利長が梅毒で死去したため、徳川家康は大阪城攻めの姿勢に転じたといわれている。

◆コレラ菌はペリー艦隊が契機か

永らく鎖国をしていた日本にコレラがやってきたのは1822年、オランダ商人が持ち込んだ。さらに安政五カ国条約が調印された1858年に、ペリー艦隊のミシシッピー号が長崎に寄港したときに、コレラに感染した乗組員から全国に流行した。その恨みが黒船、異国人に向けられ、西洋人Ⅱ病原菌として攘夷思想が高まった。

なお、死亡率の高いペストは、幸いにも日本には明治二十九年まで持ち込まれることはなかった。

浜松駅の駅ピアノが弾きたい

志村 良知

令和二年正月、お屠蘇気分の夫婦の会話で、家内が「ピアノが弾けるようになりたいな」という願望を出してきた。子供の頃オルガンで遊んだことがあるという。

私自身も弾けると広言できないまでもピアノの前に座ったら両手を使って何か一寸音が出せる、というようになってみたい。親父は師範学校で習ったピアノを九十歳過ぎまで楽しんでいたし、今そのピアノは兄が弾いている。

それまで純粹に鑑賞目的だった「YouTube」を学ぶ側の眼でいろいろ開いてみるようになり、テレビでも駅ピアノの番組を見るようになった。

浜松駅の新幹線コンコースには地元ピアノメーカーが威信をかけて最高級ピアノを最高の状態で置いていることも知った。その巨大で高価なフルコンサート・グラン

ドピアノは誰でも弾けるのである。これでモーツァルトを弾く。実現可能とはいえないが不可能ではない、がベストだという「目標」として最高ではないか。

新型コロナ禍はあつという間に深刻化し、仲間とやっていたギター・クインテット、その名も「ソワサンデイス（七十）」の練習は音を出して合わせるという性格上、密閉・密接で長時間となることから中止、五月頃の開催を予定していた仲間内発表会も無期延期になってしまった。ギターは基本的にはソロ楽器なので、バンドの練習が無くても弾ける曲や弾きたい曲は多々あるが、長らく一緒にやってきた「ソワサンデイス」と離れるとモチベーションも下がる。家内も体験学習を終えて通わんとしていたピアノ教室が閉鎖されて行き場を失ってしまった。

ここに至ってピアノ導入が必須となった。狭いマンション暮らし、勿論電子ピアノである。ネットであれこれかと慎重に調べて結局一番無難なモデルを発注した。二日後、本体、専用の木製脚と椅子、その他付属品一式

で大きな梱包が幾つも届いて玄関に山と積まれた。

家の中で鍵盤楽器の生の音がするというのは一家を構えて四十年来無かった経験である。それがピアノの一年生の出す電子ピアノの音であろうとも気持ち豊かにさせる。

これまでは右手の人差し指一本でしか触ったことがないピアノに向かう。楽譜は見慣れているので音符と鍵盤の位置と音の長さの関係は頭の中では理解できる。しかし、それを両手の動きにするのは全くの別の話。鍵盤は思ったより巾広く重く、三歳児でも弾けるはずなのに小指などろくに音が出ない。

ギターにもピアノにも運指記号がある。要らないという人もいるが、私はこれが付いてないとどうにもならない。まずいことにピアノの運指記号はギターとは異なっている。五十年間ギターの運指に慣れ親しんでいると運指記号そのものが混乱の元になる。

肩の力を抜き脇から肘を楽にして、手はお碗の形で上

から吊り下げるように、指は鍵盤に平行に、と頭では分かっていたても、手はだらしなく寝ころがりたがり、指は斜めになって隣の鍵盤に触りたがり、左の手は右手に連動して一緒に動きたがる。前途は多難である。しかし、楽器の練習は反復しかなく、歳はとつても反復で上達できることは経験として分かっている。クリスマスには、ハ長調の「きよしこの夜」の弾き語りに成功した。

ピアノとギターという性格が違う楽器を両立できたら楽しいであろう。バンドの活動はいづれ再開できる。ピアノには戦国武将の天下取りに比肩する野望ともいえる目標がある。

七十代で夢がある人は九十代で歴史に残るそうである。「ソワサンデイス」を發展させ「キャトルバンデイス（九十）」として発表会を開きたい。新横浜駅まで三十分歩いて行つて新幹線に乗り、浜松駅でフルコンサート・グランドピアノに謁見したい。

音楽の精神性の呪縛

下山 健夫

高校生になり男子の級友は皆別々の高校へ進学したが、その頃より中学の仲間達とクラシック音楽を楽しむようになった。オーケストラの演奏を日比谷公会堂で良く聴いたが、技術の上がった今のプロオーケストラではとても考えられないけれど、当時はホルンのパートになると音を外す事がたびたびあった。演奏会の後は銀座の不二家でパフェ、今考えるとかわいものだ。

少ない小遣いをためてLPレコードを求めたが、当時は「レコード芸術」を図書館で熟読し、自分の求めたものの評価に一喜一憂したのも懐かしい。当時、音楽評論家が批評に使う「音楽の精神性」は理解が難しく、今もって何を表しているのかわからない。

又、学生時代には、モダンジャズは喫茶店でしかめ面で難しい顔をして聴き、馴染めないものと思っていた。勿論その後はポップス、カラオケ演歌あらゆる音楽に

親しんだつもりだが、「音楽の精神性」という表現には出会っていない。

クラシック音楽も所謂前衛と呼ばれるものをコンサートで聴くこともあるが、今は専らメロディーラインがある、昔はモダンジャズと言われたジャンルの方を良く聴くようになっていく。

二〇二〇年はベートーベン誕生二百五十周年で数々の特別な番組が行われていたが、コロナパンデミックが続き家の内に留まっていることが多かった為、私の心にはベートーベンの曲は重すぎた。三月の後半にコロナの感染が増えだし、欧州での爆発的な感染が報じられていた時、モーツアルトのレクイエムを映像で観ていて「怒りの日」の歌詞そのものの状況が起こっているのかと思つた。昨年聴いていたほとんどはこのモーツアルトの協奏曲、室内楽曲だった。それも昔集めた、高い評価だった、精神性が高いCDでは無く、綺麗な音で批評が低かったものを聴くことが多かった。歳をとり精神性の呪縛を離れて、やっと好きなものを好きだとして聴くことが出来る様になった。そうなると昔購入したCDを聴き返して

みると、立派ではあるが格調が高すぎて気楽に聴き流すには残念ながら適していない。

幸いにも室内楽を楽しむ年齢になって購入したもののうち、いくつかは実演を聴いている。当時の巨匠ではなく、自分達と同じ年齢層の若手なので、比較的重い演奏ではないから助かっている（但し、今は彼等も巨匠と呼ばれているが）。

昨年の巣籠中に、以前良く行った米国出張時に自分への土産として求めたCDを、全てFLACというフォーマットに替えた。CD何枚にもなるオペラも含めて、安くなったSDカードにCD何百枚分もが入り、ウォークマン、スマホでも全てが持ち運べる状況になった。同時に愛読書も自分でPDF化をしたので、何処でも楽しめる状況になった。皮肉なことだが昔とは違い出張が無くなってしまい、旅行にも行くことが出来なくて残念だ。

結局、昨年は一月と十二月の二回しかコンサートに行けず、いずれも庄司紗矢香のコンサートだった。彼女のコンサートはここ十五年程毎年聴いて、どの様に変わるのかを楽しみにしてきたが、パガニーニコンクール優勝

者としてテクニック重視の選曲や所謂大曲が多い。パツハを取り上げてくれてはいるが、昨年末のリサイタルは足が悪く椅子に座つての演奏でもそのような選曲であった。アンコールでは、いつものテクニック重視の曲では無いものを演奏してくれて、そろそろレパートリーリストにあるモーツアルトもと期待している。

昨年は何回もチケットを予約したが、この二回以外のものは全て払い戻し、今年こそ是非生のコンサートを沢山聴きたいものだ。



車と私

杉浦 右藏

私は昭和三十五年に車の運転免許を取得。平成二十八年に所有車の車検が切れる機会に車を処分し、運転免許を返上した。五十六年持っていたことになる。国際免許の期間もある。写真付き身分証明書の提示が必要なきが有るので運転経歴証明書を二千五百円支払って取得した。「自動車等の運転は出来ません」と言う朱書が中央に書かれてある以外は運転免許証と同質である。

写真入りマイナンバーカードが有るからと思ったが、このカードは、本人が死んだ時、国が税金の取りはぐれが無いようにする制度で、縦割り官庁間・地方自治体等とのシステム連携が無く使い物にならない。

国際運転免許の話

国際運転免許を取得した経験が二度ある。欧米のいわゆる先進国で言うジュネーブ協定と異なることをイラン国・フィリピン国で経験した。イランに居たとき一時帰

国の機会が有って、免許証の有効期限が切れていることに気づき、免許証センターに書き換えに行った。当局はイラン国の運転免許証は日本では認められないと言う。公安委員会との質疑復活は長い話となるので省略するが、長期で外国に行くには国情の勉強が必要だ。

中古車は何故駄目か

昭和三十五年から昭和四十五年まで中古車ばかり、以降は新車だけ。生まれて初めての外国生活を命じられて、所有車を処分して新車を現地調達後、新車の良さを体験してから中古車は駄目だと悟った。前の所有者の手入整備が良かったのか悪かったのか見極めが難しい。中古販売業者は信用できない。私の場合、四回中古車を買ったが最初のダットサンライトバンは良く走った。以降三回とも調子が悪く金食い虫で苦勞した。

空冷と水冷の話

イランでの体験は忘れられない。六人の専門家でテヘラン大学内の電気通信研究センターに赴任した。ベント一人、BMW二人、ワーゲン三人、車が全員取得できた所でカスピ海への揃い旅に出かけた。テヘランからカス

ピに行くには三つのルートがある。東部回りのアバリルト、真北のチャールス越え、西部のラシト回りである。東部はイランの秀峰、五千六百^{メートル}のデバマンデ山の横を通る。カスピ海は海拔マイナス三十^{メートル}だからヒマラヤからトルコに連なる四千^{メートル}級の山脈を越すことになる。テヘランは南側千三百^{メートル}の高地だから山脈の南側と北側では景色が全く異なる。山脈越えで判ったことは、空冷車は三千^{メートル}以下では規格通りの性能を発揮するが、それ以上高度が上がると性能が落ちる。第二次世界大戦で、日本の零戦がB-29に手も足も出なかった理由が良く判った。近道の急峻なチャールス越えドライブでは、速度が歩くより遅くなり、長蛇の後続車を従えることになり、申し訳ないと思うがどうすることも出来なかった。

イランでの残念な思い

イランの国土は日本の四倍だ。サバクには砂利、塩、砂の広大な平原がある。砂漠と言う漢字は石ヘンのみでは不十分で沙漠などに増やす必要があると提案する。この広大なサバクに直線と起伏しかない道路を運転していて空の果ての天国に行く感じがした。

BMWとワーゲンビートルスではスピードが全然違う。百キロ先の町で会う約束で同時にスタートした。数分でBMWは見えなくなった。ワーゲンはアクセルを踏めども時速百二十kmしか出ないが、BMWは二百km以上出るようだ。BMWを選んだ仲間は幸運だったと羨む。残念なことをした。この爽快感は日本では味わえない。

運転の珍記録

イランから帰国して開港前の成田空港建設に関与した。滑走路への出入りはゲートが有って出入りが厳しい。許可を貰ってメイン滑走路を飛び立つ位置から四千^{メートル}を全速で走ったことが一回だけ有る。車のスピードが遅くて飛べないことを体験した。

今は出来ない越境ドライブ

イラン滞在三年目の正月休みを利用して十三泊十四日のイラク・クエート五千キロの旅をした。イライラ戦争の前で、大使館は大反対であったが実行出来た。目的は車での国境越えとメソポタミア見学であった。人間のビザと車のビザを取得する必要を経験した。

モロッコへの旅

田原 敬

モロッコへ旅をしたのは、二〇〇〇年十一月のことだ。ずいぶん遠い国への旅だなと思った。

当時の記録によると、エールフランス機に搭乗、離陸して直に日本海からロシア領北部の上空に入った。西に沈む太陽を追いかけて飛ぶので何時までも明るかった。モロッコにはパリ経由で夜中の二時に着いた。その後、専用バスで首都のラバトをはじめ、メクネス、ポリビリス、古都のフェスなどを順次見て回った。

旅行中に聞きかじったモロッコの古い歴史は以下の通りである。紀元前九世紀初めにフェニキア人によってチュニジアに建設されたカルタゴは、紀元前六世紀にはモロッコへ進出した。紀元前三世紀になるとモロッコ内陸部にベルベル人がマウレタニアを建設したが、マウレタニアはその後カルタゴの支配下に入った。紀元前二世紀

にポエニ戦争でカルタゴが敗北すると、マウレタニアはローマの属国になった。ローマ皇帝アウグストゥスの時代に属州ヌミディア王国のユバ一世の子の二世に統治を委ねたこともあったが、紀元一世紀には皇帝クラウディウスによりマウレタニアはローマの属州になった。

時代が下って五世紀には、ヨーロッパ大陸の民族大移動で、バンダル族がイベリア半島から北アフリカまで南下し、この一帯を支配した。六一〇年頃、現在のサウジアラビアのメッカでイスラム教が興る。教祖のムハンマドが亡くなり、続く正統カリフ時代にカリフたちはジハードを掲げてアラビア半島を統一し、さらにエジプトも征服する。第四代正統カリフのアリーの末裔が七八年からモロッコへ亡命、ベルベル人の力を借りて、フェスを都とする初のシーク派イスラム王朝であるイドリス朝を興した。

我々は首都のラバトを経てモロッコ最大の都市であるカサブランカに至った。そこで職人達が大勢で皮をなめ

す作業を、ゆっくりと見て回った。コンクリートのタイ
ル張りの染料槽に足を入れムラのない様に皮を踏み込む
作業を、念入りに見た。相当にきつい仕事であつたろう。
近くには生の皮や、屠殺する牛や羊を取引する場所があ
り、革製品が豊富にあつた。我々を見ると、「ボールペ
ンを呉れ」とせがんできた。今回は余分を持たず、あげ
ることはできなかった。外国製品の輸入が厳しく制限さ
れているようだった。

この国は気候が温和で過ごしやすいが、降水量は全般
的に極めて少ない。比較的多い地域でも年間で八〇〇ミ
リ位とは通訳の弁。地域の人は雨が降ると喜ぶ。傘を持
ち歩く必要はなく、「この国には傘はないですよ！」と
言う。

日干し煉瓦造りの古いクサル(要塞化された村)は数々
の映画の舞台になっている。乾いた川を通り石ばかりの
場内に入ると家畜と暮らす生活がある。古い道具類が無
造作に置かれた住居の上の階に通された。部屋の敷物に
座り、間もなく出されたミントティーを頂きながら生活

の様子を窺った。住人は五人位であつたろうか。付近に
は要塞化した共同穀物塔が林立しているのが印象深かつ
た。



小別更好

塚田 實

コロナ禍による外出自粛が続く、自宅にすることが多くなった。夫婦の対話が増えると、昔の単身赴任時代を懐かしく思い出す。

二〇〇〇年に一軒家を建てた途端、英国赴任を命ぜられた。その後ロンドン三年、大阪二年、北京二年と計七年も単身赴任が続いた。子供の教育を考えると、単身赴任を選ばざるを得なかった。例えば家内が同行しても、私は毎日のように顧客と会食をし、担当地域に出張を繰り返していたので、面倒はほとんど見られなかっただろう。子供の教育は、東京にいた時でも仕事が忙しいことを口実に、すべて家内に任せきりで、「あなたは、子供が受験でどこを受けるかも知らなかったわね」と言われた。

単身赴任は出だしから大騒ぎだった。ロンドンで引越しの荷解きを終えた家内を、ヒースロー空港に送ること

になっていた。飛行機は日本航空四〇二便十九時四十五分発だったので、ロンドン郊外メイドンヘッドにあった日立ヨーロッパ社での業務を終えて、ケンジントンのアパートに迎えに行き、空港に送る予定だった。ところが国道に入ると、車は全く動かない。ラジオを聴いていた運転手によると、IRA（アイルランド共和軍）の爆弾を積んだと疑われるトラックが国道で見つかったので、交通を遮断し調査を行っているとのことだった。幸い家内にはプリペイドの携帯電話を渡していた。「車が全く動かない。タクシーを捕まえて、空港に向かって！」と電話で叫ぶ。家内はロンドンタクシーなど一人で乗ったことはない。大きな荷物を抱え何とかタクシーを捕まえても、空港行きの道は全く動かないらしい。「運転手さんに電話を代わって」と伝え、運転手に最寄りの地下鉄の駅に連れて行くよう頼んだ。家内は地下鉄にも乗ったことがない。それでも地下鉄に乗ったと電話があつたとき、その後全く連絡が取れない。ヒースロー空港には出口が沢山あるので、無事日本航空の出発ロビーに着いたか心配だった。飛行機の出発時間はとうに過ぎている。

その日も日立グループ欧州子会社社長との会食があった。ロンドンの日本航空に電話しても、全然繋がらない。デュッセルドルフから来た社長は「デュッセルドルフの日本航空に電話しましょう」と言って電話をすると繋がりに、家内はパッセンジャーリストに載っているという。しかも、日本航空のクルーも空港到着が遅れ、飛行機は約二時間遅れで出発したそうだ。家内は大変だったろう。ほっと一安心して飲んだ日本酒は美味かった。

次の大阪は、国内営業という国際事業と真反対の仕事だった。大阪は出身地なので顧客も優しく受け入れてくれた。靑公園の単身赴任者用マンションに住み、今まで行き届かなかった親孝行もできた。週末は顧客接待など何かと用事があり、東京にはほとんど帰れなかった。

関西暮らしに慣れると、二年弱で転勤を命ぜられ、新たに設けた日立グループ全体の中国事業を纏める中国総代表に就いた。単身赴任の連続を嘆いていたら、中国人の友人に「小別更好しやおひえんはあですよ」と慰められた。「小別更好」

は中国語で「小さな別れは、男女の関係を更によくする」との意味だそうだ。

家内は時々中国を訪れ、九寨溝・黄龍、桂林、三峡下りなど旅行を楽しんだ。二年経ったころ、私にがんが発見され、五年後生存率十五パーセントを宣告されて手術、その後は東京駐在で中国総代表を続けた。中国からの出張要請は止まない。抗がん治療を続けていたので、医者は「この時点での単身出張はとても許可を出せない。奥様同行なら認める」と厳しい。家内に、私費で北京同行を頼み、二泊三日で出張した。家内に頼りきりだった。

計七年の単身赴任の間、家内とは毎日話をした。ロンドンと北京では国際電話用のテレフォンカードがあつて、それを使って電話をした。コンピュータネットワーク接続だったと思う。毎日話したので、「日本にいた時よりもよく話したわね」と家内は笑っていた。

今は巣ごもりで一日一緒のことが多い。歳も重ねてきた。お互い思い遣りの心で新常态を乗り切るよう努力しよう。「毎会努力めいはんぬーはあ」だ。

断捨離・勿体無・そして

富岡 喜久雄

元号が令和になってから、その由来から雅な平安な時代を期待もし、予想もしたが、案に相違し南シナ海は波高く、武漢から発したコロナ禍は止まるところを知らず、発生源を尻目に全世界に猛威を振るいつつあるから梅見も花見も出来そうもない。

そこで内省し我が身を省みれば、令和三年は丑年だから還暦どころか、それを二回りも超えていて、米寿は先でも身体各部に経年劣化を感じて、本体も遂に除却の時間が来たとの思いがよぎる。

通った居酒屋の戯れ歌に「八十路を超えお迎えあるときは、未だ早すぎると言え」と励まされてはいるものの、この辺が身辺の「断捨離」をする時と覚悟した。

そこで、我が陋屋の裏手に「賃貸コンテナ」よろしく設置した三棟の内装物置に潜り込んだ。

そこは書棚からはみ出した書籍、捨てずにおいた嘗ての仕事上の記録、関係書類、南米、東南亜他で買い込んだが、今まで顧みなかった民芸品類、不要となった用済みの衣料品等が積み込まれている。

そこで、売れそうな物はその値段、書類、記録の類いはペンクラブへの作品、或いは憧れの印税生活、間に合わなければ版權遺贈用の自費出版本のネタにならぬかと、にんまり顔で整理を始めた。

だが、いざ始めて見ると、思いを絶って捨てるのが「断捨離」である筈が、現物を手に取ると、古い記憶が悲喜交々に蘇って、用意した断捨離箱に納まらない。

これではならじと、買取屋や地元の書店に声をかけ、値段をチェックすることにした。結果は、衣類や記念の民芸品等は期待外れの落胆価格だったし、世界・日本の文学全集、その他名著の類いは全く「立腹値段」でしかなかった。一方、シンガポール時代にやたらと買い込んだ英書類は、アマゾンで予想以上の値で売られているのを見つけて独りほくそ笑んだ。

リー・クワンユウやサッチャー、ニクソン、クリントン等の自伝物、加えて書棚の裝飾にもなるうかと興に駆られて買い込んだ厚手の英書類、殊にハワイで購入した米国海軍省編纂の太平洋海戦史等は、かなりの値がついているのを発見した。

嘗て地元のブックオフに売った平凡社の百科事典とは大違いだと、にんまりだった。だが、実際に手にして見ると、殆どが最初の数ページか、目次程度しか読んで居なかったことを発見した。すると急に手放すのが惜しくなった。と同時に、この先コロナも居座るとすれば、仲間内の懇談も、居酒屋行きも儘ならぬだろうから、読書時間はたっぷりある筈。ならば、読んでから売っても遅くはなからうと思えてきたのだ。

残るは衣類・雑貨の類のだが、これはメルカリ等の買い取り業者が居るから、何時でも換金可能だろうと踏んだ。衣服は、ビジネススーツや礼服の類だが、これらは書籍、書類の類いと違って処分するに気持ちの抵抗は全くない。だから、すんなりと捨離箱に納まる筈だった。

そして幾許かの手許金が入る筈と踏んだのである。しかるに、思わぬ横やりが入ったのである。

それは家人、殊に孫からで、民芸品は自分たちが貰いたいし、衣料品等はユニセフのTV広告で流される貧しいアフリカの子供達への寄付に使うべきだと主張する。

日頃、小生が、繰り返されるユニセフの寄付広告をテレビで観ながら、「他国に頼るとは何事ぞ、自国政府は何をしている。内戦やるのは自己責任だろう」と自立自尊の精神を論していたことへの反撃のようでもあった。

彼ら曰く「お爺ちゃんの世代だって、戦後にアメリカから古着を只で貰っていたと先生が言っていたよ」、「貧しい人は助けるべきでしょう」と反論するのだ。

日頃、こづかいの無駄使いを戒めて、ケニアのマアタイ小母さんの「もったいない」精神を見習えと説教していた爺様は、ぐっと詰まって、「お前たちの小遣いの源資にもなるのだぞ」、「武士は食わねど高楊枝と言うだろう」等と言いたいのを、じっと堪えて只「お前たちは偉いな」と言うばかりだった。

俳句と母

中村 晃也

これは母・中村路子の没後、ある俳誌に掲載された私の追悼文の一部である。

平成二十七年に母は子宮癌のため癌研に一月入院して放射線治療を受けた。一時は病果が消えた筈だったが翌年初夏に再発し、医師から抗癌剤の投与も限界であると告げられたのは九月になってからであった。本人の体調はかなり悪化していたらしく、普段は床に伏せていることが多くなった。ただ予定されている句会や俳句教室などがある時だけは、きちんとお化粧してシャンとして出かけるので、外部の方々にはそれほど酷い状態とは感ぜられなかったかもしれない。

母の俳句との係わりは敬愛する祖母の棺に歳時記が収められているのを見てからであったという。また父が癌

相手に苦闘している最中、心身ともに苛まれるような看病の疲れを和らげる手段として、一層俳句に傾注するようになった。妻としてまた母としての生活とは次元の異なる世界での研鑽を決意したときから、母の本当の人生は始まったと言える。

俳句は行間の余韻を大切にすること、細見綾子（風）、加藤楸邨（寒雷）などの先生方のご指導の含蓄の深さ、周囲の皆様がどんなに素敵か、句会での知的な雰囲気と緊張感、など母は眼を輝かせて私たちに話してくれ、と同時に自分の才能にも手ごたえを感じたらしく「四十からの手習い」と自ら笑いながらも、頭の下がるくらいの真摯な姿勢で、勉強が深夜に及ぶことも再々であった。

俳句は本人の真の生き甲斐となった。俳句を通じて、親しくなったお仲間と日本国中くまなく旅をすることが出来た。（残された写真と絵葉書のなんと多いことか！）

しかも自分の句集を「簪」、「露」、「渚」そして「滯」と四冊も刊行し、栄えある現代俳句協会賞まで頂くこと

になり、超結社の俳誌「女性俳句」の編集長を三十年も続けた。単なる主婦で終わらずに有意義な一生をすごすという満足感に充ちた生活ぶりは傍目にも羨ましい限りであった。

私どもにとっては素敵な母親であった。いつも若々しく、陽気で明るく、キビシイことを言っても最後は笑いで終わらせる機知に恵まれていた。気が付くといつも母を中心とする人の輪ができていた。子供の頃に母が参観日に来てくれるのが誇らしく、嬉しかったことを懐かしく覚えていた。決して泣き言を言わず、最後まで嫁の悪口は言わなかった。阪神タイガースのファンで、自らを野球ババアと称し笑っていた。ひっきりなしに電話し、手紙を書き、浮かんで来る新しい句をメモしていた。

病魔に冒され体調が悪くなっても、予定された句会を自ら欠席するとは言わなかった。見かねた私の二人の妹が交代で会場まで送り迎えをしていたが、流石に身体が辛いらしく「しばらく休みたいから」と冬の間は休講に

して来春再開として頂くことが多くなった。

逝く前日になって息子の私と病室に二人だけになったとき母が、「俳句は八十歳までで終わりにして少しゆっくりすればよかったかな？」と天井を見ながら問いかけてきた。「俳句をやめていれば呆けてもつと早く死んでいたよ。俳句のお蔭でこんなに充実した人生が送れたんだ。四冊も句集を出して、お母さんのような人も珍しいよ。僕は本当に羨ましいと思っているよ」と答えると「貴方からそんなに言ってもらって嬉しい」と満足そうな感想を漏らした。翌日は午前中に二回も愛用のコンパクトを探して口に紅を引き、午後になって子供たちが全員集まったのを知ったのか、楽しみにしていた春を待たずして逝ってしまった。

春が過ぎても母の書斎は書きかけの原稿がそのまま、あの華やかだった余韻を断ち切るには今少し時間が必要のようである。

早春の死は椅子ひとつ空くことか 中村路子

全国乗り鉄旅あれこれ

長尾 進一郎

日本の鉄道の全線に乗りたい気持ちは昔からあったが、本格的に実行に移したのは退職する少し前だった。それ以前にも旅行や出張で乗った路線は多いが、起点から終点まで完乗した路線となると、関東や甲信越のほかは手薄だった。きっかけは本屋で見た「鉄道乗りつぶし地図帳」。乗車対象はＪＲ、私鉄、第三セクター等の鉄道全般とし、なるべく普通列車で旅をすることにした。

背中を押しているのは、「全国に張り巡らされた鉄道の全線に乗れば、日本を大まかに見たことになるのでは」との自己満足だ。今も乗客減少や災害等で廃止される路線が出ているので、のんびりしてはいられない。現在までの戦果は、昔に乗った分も含めると、距離にしてＪＲ全線の八割強、私鉄等の七割強といったところだ。

ＪＲ線で各駅停車旅をする場合は、普通列車限定「青

春18きっぷ」がお得だ。難点は時期が限られること。対象の地域が遠い場合は、新幹線か飛行機で現地に飛んでからスタートとなる。複数の路線を持つ私鉄や市電では、フリー切符が買えると便利だ。またルート上にある観光地や史跡は、なるべく時間を作って訪れたい。

旅の対象地域を決めたら、時刻表片手に行程を練る。乗りたい各路線を、予定の日数内で踏破できるプランを目ざし、乗車ルート、接続の良否、宿泊地、到着時刻などを当ててみる。この作業がパズルのようで結構楽しい。近年のＪＲは特急列車優先で、普通列車で長距離を移動するには不便ことが多い。乗り継ぎに二、三時間待つことも少なくないが、その間を利用して街をぶらつければ、意外な発見があるかもしれない。

いよいよ当日を迎え、いそいそと列車に乗り込む。座席で車窓を流れる野山や海、田畑や家並みを眺めていると、その地の気候や暮らしを想像させ、旅にきた感慨が湧いてくる。一方、路線自体の形態や特徴、地形との関係を掴みたいときは、列車の先頭か後尾で眺めていると、

手に取るように分かる。中でも山間部や谷沿いを行く路線で、地形に応じて選定された勾配や曲線の程度、トンネルや橋梁の配置を見ると、路線計画や建設の苦労が偲ばれる。古い時期に建設された路線では、長いトンネルを避けて急勾配や迂回ルートで乗り切れることも多く、いかにも地形と格闘している趣が感じられる。

印象に残っている路線を一部挙げると、オホーツク海岸や釧路湿原を行く釧網線、日本海の荒波を見る五能線、緩やかな只見川に沿う只見線、浅間や八ヶ岳、南アルプスを望める小海線、急勾配・急曲線・スイッチバックの箱根登山鉄道、アプト区間のある大井川鉄道井川線、天竜川の谷沿いの飯田線、秘境に分け入る黒部峡谷鉄道、鈴鹿や伊賀を抜ける関西線、ループ線のある上越線と肥薩線、三段スイッチバックのある木次線と豊肥線などなど。急峻な地形に挑むことの多い日本の鉄道路線では、各所に興味ある形態が見られる。

こうしてその日の乗車路線を堪能し、無事に宿泊地に到着したら、まずは夕食。事前に調べるか宿で尋ねて、

その土地の名物を味わえると嬉しい。遠軽のにしんそば、宮古のどんこ汁、宇和島の鯛めし等、記憶が蘇る。一方、街によっては夜七時でも駅前が暗く食堂も開いていない場合があって、店を探して歩き回ることになる。

旅は天気が好ければもちろん有難いが、列車に乗るのが目的なので雨天でも予定に沿って移動する。天候で一番困るのは、豪雨などで急に不通区間が発生することで、旅程の変更を迫られる。春に秋田内陸縦貫鉄道に乗った時は、雪崩の危険から途中の一部区間だけがバス連絡となってしまう、完乗はお預けとなった。

近年、自然災害による被害が増え、復旧をあきらめてバス転換する路線が出ているのは、事情は理解できるが大変残念だ。日高本線の大半の区間が、高潮被害で不通のまま先日バス転換が発表され、同線の完乗は叶わぬ夢となった。逆に、過去に廃線となった区間の一部で市街地化が進み、復活延長させた可部線（広島県）は、稀なケースだが嬉しいニュースである。

今後も、多様かつ多難でもある鉄道の現状と行く末を見守ってゆきたい。

大丈夫？　ゝ気になる日本語ゝ

西川　武彦

「こちらの方でよろしかったでしょうか？」と、駅前スーパールのレジの若い女性。年恰好は、二十代の後半といったところか。

晩秋の早い夕陽が傾いて、三年前に平均寿命を超えた筆者には薄ら寒い時間帯である。土曜の夕方なので、シモキタには若者たちが溢れている。

コロナで家に閉じ込められて飲み会がなくなった昨今、毎晩欠かせない晩酌のワインの在庫が切れているのに気付き、家から歩いて十分足らずの駅前のスーパーへ飛び込んだのだ。

エレベーターで地下に下り、ワインコーナーで一本手にして一階に戻った。税込みで千円ほどのボルドーの赤だ。いつも同じである。

一階と地下は緩い階段で結ばれているが、八十歳を過

ぎる頃からエレベーターに頼るようになってるのが情けない。

「今日はこれだけしておくかな…」と、レジの相手になんとか聴こえる程度の声で呟き、万札を差し出す。

見廻すと左右のお客さんたちは籠一杯に何かと詰め込んで並んでいる。なぜか気後れする。

「一万円からで大丈夫でしょうか？」と、首を傾げて見上げるようにレジ嬢。

「うん、それで大丈夫…」。答えながらちよつと違和感が湧いた。いつものことだ。

短いレジの会話とはいえ、冒頭の「こちらの方でよろしかったでしょうか」も、「…大丈夫でしょうか？」も何かおかしい。筆者が教わって身につけた日本語とは違うのだ。それを使って対応している自分にも呆れた。

筆者は、六十年前、航空会社に入社した。最初の三年間は、羽田空港の国際線旅客カウンターに配属され、カウンターのチェックインから手荷物運びを含めた接客の基礎を徹底的に鍛えられた。勿論、接客の言葉遣いも

。日本語に加えて英語でもしごかれたのが、その後の人生で何かと役に立った。

それが伏線となり、五十代では教育・訓練を統括する部門のヘッドを務めたが、退職して二十年も過ぎると、「大丈夫」などと返しているのだから、我ながら呆れる。

帰り道にあるコンビニに立ち寄り、売れ残って寂しうにしている英字新聞、*The Japan News* を一五〇円で求めた。細かいのがないので、レジの女性に千円札を出す。「こちらから大丈夫ですか？」と、スーパーのレジと同じ対応が戻ってきた。思わず「大丈夫」と返しそうになるのをぐっと堪え、頬を緩めて首で軽く頷いた。

買った物を、右肩にぶら下げた黒のデイバッグに収めると、そのまま家には向かわず、何か新書を一冊求めるのを忘れていることを思い出して、駅前の書店に戻った。言葉遣いのが気になっていたので、購入したのは、内館牧子さんの『カネを積まれても使いたくない日本語』（朝日新書）。「ら抜き」から始まって、「過剰なヘリ下り」

「へんな敬語」「市民権を得た新語」等々が、三百頁にぎっしり詰まっている。実に面白可笑しいので一読をお勧めします。

読書の糧を手に入れたあと、一日五千歩の日課の残りを散歩した。毎日少し違うルートを選ぶ。

途中で知り合いが家の前を掃いていれば、立ち止って言葉を交わす。

立ち話が一区切りついたところで散歩に戻り、しばらくうろついたらあと、歩数が目標値を超えたことを確認して、ふらふらと家に戻りつく。

「あら、帰ったの？ 遅かったじゃない。大丈夫？」と、老妻。「大丈夫」と返す。どうやら我が家も「大丈夫」病に罹っているようだ。



お金がなくなれば死ぬ

新田 由紀子

ある国が他国にサイバー攻撃をして、仮想通貨とやらを二千億円も手に入れていたという。一方、この国では九億五千六百万円の土地をゴミが埋まっているからと、八億二千二百万円も値引いて売ったとかいう。一個人の頭の中には収まりきれない桁数の金額だ。そのお金が行き来して潤うのは、どこの誰なのだろうか。少なくとも、わが向こう三軒両隣の善良で勤勉な庶民ではないようだ。いったいお金とは、どれだけ必要として持てばよいのか。稼ぎ、貯め込み、所有する物の多寡で人の一生が計られる世の中。人生の軸はそんなものであるはずはない。「すべて国民は健康的で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」。この一条が満たされて、人間性や人それぞれの生き方が大事にされる社会に生きてみたい。

一昨年の冬、首都圏に大雪が降った日にA子の兄が亡

くなった。一人暮らしのいわゆる孤独死である。連絡がとれないのを不審に思っただけで訪ねてきた仕事仲間に見えられた。警察によると、推定死亡日は五日前の大雪の日。朝早く雪掻きをしているのを近所の人が見たという。

隣県のN警察署に駆けつけたA子と元妻に写真が示された。散らかった台所の床に横たわる上半身。キッチンマットに伏せた顔。二人は声もなく目を見合わせる。一日が平穏に暮れようという時に、警察署に呼び出され、息をのむような写真を見せられて「はい、間違いありません」などと、言えるものではない。

伸ばした手の先の財布から小銭が散らばっている。雪掻きを終えてコンビニにでも行こうとして、不意に死神に襲われたのか。どんな思いが脳裏を横切ったことだろう。一瞬の悔いはあっても苦しみはなく、迎えにきた父母の霊に手を取られて、安らいで逝つたのだと信じたい。

兄妹は商店を営む両親の元で不自由なく育った。優しく引つ込み思案の兄の傍ら、外向的で男勝りの妹。親はA子に家業を継がせようとしたが、妹が逃げるように結

婚をしようと、兄は会計士の道を諦めて家業に入る。間もなく父が他界すると、母親の心配通り商売は時流にのれずに、失敗と借金を重ねる。温和で趣味豊かな兄が陰しく頑迷になり、支離滅裂に家族にあたるようになって、妻と娘は離れていく。縮小して転々とする家業に母と兄がしがみつくと実家。商売をたたみ母を引き取るために、A子は資金の融通を繰り返す。その母も家業の衰退を憂いつつ亡くなった。「Tちゃんを助けてほしいの」。母がA子に残した言葉。その呪縛から逃れたいとA子は兄から遠ざかった。

大雪の日の二十日程前だったか、久しぶりにポツンと兄からメールが入る。「少し振り込んでくれないか」。暗澹としてA子は見ぬふりをする。あとで思えば、それはいままで用立ててきた額とは違い、融通のきく生活費の額だった。どうしてすぐに手元にあるものを持つていてあげなかったのか。独り身となつて勤め上げた末の、年金生活を守ろうとする利己心が強すぎたのか。

検死を終え、疾病不詳の病死とされた兄の遺体は、現

金・通帳類と身元証明書と共に姪に引き渡された。現金は遺体写真にあった小銭で、どの通帳にも残高はなかった。その場で葬儀社を選ぶと、深夜にやってきたのは、二年前の母のときに兄が見つけてきた葬儀師だった。同じように寒い冬の日、母親の骨壺を抱えた兄を労わるように寄り添っていたのを、A子はよく覚えている。

母親と兄が暮らした崖の上の傾いた家は、すっかり様変わりしていた。電気・ガスは止められ、水道管からは水が噴き出ている。空き缶や酒パックがころがり、流しの中の食器はこびりついて、猫の餌がちらばる。玄関先には半年以上も前からの郵便物が、未開封のまま山になっている。その中に、債務不履行による裁判所からの出頭要請状を見てA子はやるせない思いになった。いくつかのゼロを連ねた金額が徐々に兄の足をすくい、存在を押し潰し、自棄へと追いやったのではないか。

元妻は残高がゼロにまでこまめに引き出された何冊もの通帳を見ながら、ポツリと言った。

「金がなくなれば死ぬんだと言っていたの。本当だったのね」

トランプ大統領と安倍首相

野上 浩三

窮極の愚行

二〇二一年一月六日、アメリカで、国会議事堂にトランプ大統領に教唆された暴徒が乱入し、五人の死者まで出すという由々しい事件が起きた。共和党議員までが「アメリカの歴史上最も恥ずべき事件」と慨嘆した。

三年前、『悠遊』に私は「繰り返される世界史的愚行」を載せた。わが国の真珠湾攻撃とトランプ大統領の世界常識に反する行為を念頭に書いた。常軌を逸した人間が強大な権限を持つ恐ろしさを感じてのことである。

トランプ大統領に対しては、就任一年目の末に弾劾されたので少しは良い方向へ向かうものと期待した。しかし、それからの三年間も愚行は繰り返された。

その最後が国会議事堂襲撃教唆という窮極の愚行であった。もし、再選されていたら愚行はエスカレートし、ヒットラーの再来となっていた恐れが強い。

アメリカ社会の変化

トランプ大統領のような恐るべき大統領が出現した背景にはアメリカ社会の急激な変化がある。

一九八四年に私がアメリカに赴任した頃は、不法移民が大規模に流入していた。しかし、まだ大きな社会問題にはならず、労働資源としての価値さえ認められていた。アメリカン・ドリームも存在していた。

しかし、その後の三〇年余でアメリカ経済は激変し、GAF A（グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップル）の時代となった。頭脳労働者が圧倒的に優位な役割を果たすようになり、肉体労働者の存在価値は劇的に低下した。

肉体労働者の地盤であった工業地帯は軒並みラスト・ベルト（錆びた地帯）と化した。ドナルド・トランプはそのような地帯の、希望を失った住民の票を掴んだ。他方、福音派のキリスト教の教徒が支持基盤の四割を占めている。副大統領だったペンス氏はその指導的な地位に居る。恐るべきことに、大統領の座を失って以降もトランプ人気は衰えそうにない。

安倍首相の奇異な行動

二〇一七年、トランプ大統領が当選した時、安倍首相は就任式の前の段階で、世界の首脳に先駆けてニューヨークの自宅にお祝いに駆けつけた。私には非常に奇異に映った。何故ならば、その前のオバマ大統領は初めて広島を訪れて弔意を表してくれた大統領である。真珠湾被爆七五周年記念祭では「未来志向の合意」を表明し、アメリカ国民の長年の怨念解消への努力をしてくれた。

安倍首相は、もし首相の座に居たら、バイデン大統領にまともに祝辞を伝えられなかったであろう。健康上の理由で交代したが、トランプ大統領の形勢不利と読んで交代したという穿った見方もある。

安倍首相の政治には「トランプ流」が感じられた。森友学園、加計学園、桜を見る会のいずれも野党の厳しい追及を強引に押し切った。それまでの首相であればみな辞任していたところである。これも奇異なことであった。アメリカの大統領は国民に直接選出される、憲法上絶大な権限を持つ機関である。本来は立派な人物が就く。

「トランプ流」は許されることではなかった。

バイデン政権の誕生

バイデン大統領の就任式をCNNで観ることができた。厳重な警戒態勢の下に行われたが、非常に充実していた。バイデン大統領のスピーチが素晴らしかった。十分余りの濃い内容を、原稿を見ず、淀みなく語り終えた。七八歳とは思えない。詩人アマンダ・ゴーマン（二二歳の黒人少女）の詩の朗読も良かった。ドナルド・トランプは二百年に及ぶ古き良き伝統を破って欠席した。

気になるのは、バイデン大統領の対日姿勢がどうなるかである。安倍首相のトランプ大統領への傾倒よりは私にとつてさえ奇異であった。アメリカの民主党陣営にとつては極めて不愉快だったはずである。

アメリカは先ずトランプ外交が生んだ歪みの修復を図らなければならない。その際、対日政策がどうなるかも予断を許さない。幸い、日米両国の間には、民主主義・自由主義という人類にとつて最も重要な価値観が共有されている。バイデン政権が大局的な見地からわが国の存在価値を評価してくれるよう願ってやまない。

「赤字」は駄目なのか

野瀬 隆平

「財政赤字に上限はあるのですか。もちろん、政治的に限界があるのはわかっています。でも経済的に上限はあるのですか」「本当の上限はインフレだけです」

「そうですね。インフレを引き起こさないかぎり、財政赤字はどれほど大きくなってもいいし、政府債務もどれだけ大きくなってもかまわない。それ以外はすべて建前だ」

とんでもない考えだと一般には非難されている、現代貨幣理論（MMT）について、最近交わされた会話だと思われるかも知れない。

しかし、これはケネディー大統領とノーベル賞受賞の経済学者、トービンとの間で六十年以上も前に交わされたやりとりである。

コロナに対処するため、世界の多くの国は国債を発行して急場をしのいだ。日本政府も更なる借金をして、財

政赤字を増やさざるを得なかった。これで本当に良いのだろうか。そんな問題意識から、国の財政を従来とは異なる視点で捉える貨幣論を改めて勉強し直すことにした。これまで慣れ親しんできた常識に逆らう理論なので、すんなりと頭に入って来ないのは確かである。

この理論を正しく理解するには、「お金」についての基本的な考え方を一つずつ確認しながら、論理を展開して行くしかない。その第一歩は「お金は使ったら減るか」という命題である。

個人の財布や家計、民間企業のレベルで考えれば、答えは「減る」だ。しかし、使ったお金は消えたわけではなく、支払先に移動しただけなので、社会全体から見れば「減らない」となる。視点を変えると答えは正反対となるのである。

論理の核心は、貨幣が増える仕組みにある。個人や企業が銀行からお金を借りると、預金口座の残高が増える。「信用創造」といわれるもので、すんなり理解できる。では、政府がお金を借りた場合はどうか。民間銀行や個人を経由するが最終的には日銀にある政府の預金口座の残高が

増える。民間での「信用創造」と同じである。一般に云われているように、政府が借金をすれば民間の貯蓄が減るのではなく、むしろ増えるのだ。ここがどうも、すなりと頭に入らず理解しにくい点である。

考えを更に確認するために、M M T論者の一人であるアメリカの経済学者、ステファニー・ケルトンの著書、『財政赤字の神話』をじっくりと読んだ。冒頭に、「厄介なのは知らないことじゃない。知らないのに知っていると思いつくことだ」というマーク・トウエインの言葉が引用されている。ケルトン自身も、この論理を研究し始めた頃は、すんなりと受け入れられなかったと、正直に告白している。また、最初に紹介したケネディー大統領の会話も、実はこの本で初めて知ったものである。

多くの引用と共に、この本で面白いのは、各章のタイトル横に、取り上げるそれぞれの課題について、「神話」と「現実」とを並べて掲げている点だ。例えば、

「家計と比べない」の章では、

神話 政府は家計と同じように収支を管理しなければならない。

現実 家計と異なり、政府は自らが使う通貨の発行体である。

「あちらの赤字はこちらの黒字」の章では、

神話 政府の赤字は民間のクラウディングアウトにつながり、国民を貧しくする。

現実 財政赤字は国民の富と貯蔵を増やす。

世界の各国がやむを得ず抱えてしまった大きな財政赤字を、どのように捉え処理して行くか。それを誤ると経済の回復が遅れると同時に、格差が益々拡大して社会が不安定なものになるのは確実である。

従来の思考方法を転換して、新たな発想で国の財政を切り盛りしていくことが肝要である。この点に焦点をあてて、今後各国がどう動くか見守りたい。

マーク・トウエインの言葉には、こんなものもある。「自分が多数派の側にいると気がついたら、もう意見を変えてもいいころだ」

世界の大長編小説を読む

長谷川 修

会社を退き、あり余る時間をどう過ごそうかと考えた時、思い浮かぶ目標を書き抜いた。それから十年余、挫折し諦めたものもあるが、続いているものの一つに「世界の大長編小説を読むこと、読み直すこと」がある。

シルバーが読んだ長編は次のようなものである。

『カラマーズフの兄弟』——とにかく読み通すこと——

最初に手にしたのはドストエフスキの『カラマーズフの兄弟』で、光文社古典新訳文庫の創刊に合わせ亀山郁夫訳で出版された頃である。学生時代に米川正夫訳で挑み、前半の神の存在を巡る兄弟の論争の辺りで挫折したが、今回は出だしの部分に時間がかかったものの途中から加速がつき完読した。亀山訳は読者が読み通せることを第一に考え、文章の勢いとリズムを重視し、訳注は一切なく、長い文は短く分け、長い段落は改行を多くと

り、ロシア人の長くて複数個持つ名前や呼称は統一するなどの工夫をしている。米川訳に比べると難しい漢語や漢字は少なく活字は大きめで、老人には優しい。

『カラ兄弟』はドスト氏の遺作でプロローグに続編を匂わせる文章があるが、小林秀雄が「完璧な作品であり、続編は考えられない」と論じて以降、続編論争が続いている。私の直感では本作品の結末はやや唐突であり、読者が自由に続編を想像することは楽しい。

『ファウスト』——第Ⅱ部をもって作品は完成——

ゲーテの『ファウスト』はこれまでに多くの名訳があるが、柴田翔の新訳が講談社版で文庫化されたのを機に再読した。柴田訳も読者の煩わしさを考慮し、訳注は比較的易しい第Ⅰ部では付けず、ギリシャ神話や聖書の引用が多い第Ⅱ部にのみ最小限の注を付けている。柴田訳はゲーテの詩文を美しい日本語に移しておりリズム良く最後まで読み終えた。

第Ⅰ部冒頭の悪魔との契約や末尾の町娘による嬰兒殺しの場は覚えていたが、第Ⅱ部は全く記憶がなく新鮮で時空間を自在に動くスケールの大きい物語を楽しん

だ（若い頃読んだのは第Ⅰ部のみで、それも飛ばし読みだったようだ）。ゲーテは若い頃より小説、詩、紀行文、科学書と多くの作品を残したが、『ファウスト』第Ⅰ部は五十代後半に刊行し第Ⅱ部は死の直前の八二歳で完成し死後刊行された。ゲーテ自身は、第Ⅰ部は凡庸だが第Ⅱ部には手応えを感じると言っていたらしい。『ファウスト』全編をもって文豪が生涯を賭した大作と言える。

『失われた時を求めて』——時間をかけて読書中——

コロナ禍で図書館が閉館となり周りに読む本が無くなった時、浮かんだのがブルーストの『失われた時を求めて』だ。世界有数の大長編で、原稿用紙で一万枚、文庫本で十四巻となるが、友人のY君が吉川一義訳（岩波文庫）の訳出・出版に並走して十年近くかけて読んだと聞いていたので、私も読み始めた。

吉川訳は、前二編の訳者とは異なり訳注は充実しており、原作者が観たと思われる名画や建造物の写真を挟み、当時の文化的背景の説明も詳しい。また、ブルースト特有の長く続く文章の雰囲気をも日本の読者にもできる限り伝え、文体上さまざまな工夫をこらしている。

ブルーストは学校を卒業後定職に就かず、五一歳で亡くなるまでの大部の時間を『失われた時』一作のみに費やした。作品の七十%ほどは生前に刊行されたが、残り死後遺族によって原稿を整理し発刊された。小説には登場人物が多く、時代が主役とも言うべき全体小説なので、ドスト氏の小説のように一気に読むのではなく、訳注も含め意識的に遅読を心掛けている。現在第三巻を読んでおり、あと二三年で読み終えたらと思っている。

三編ともに新訳で、今世紀になって文庫本で出版されたものだ。新訳は先人の翻訳を参考にすることができるだけでなく、情報化の進展で内外の専門家への問い合わせも便利になったからか、どの訳も既訳に比べて平易で読み易くなっている。更に三人の翻訳者に共通しているのは、敬愛する作家の長編を日本の読者に最後まで読み通してほしいとの熱い思いだ。

世界の大長編小説を清新な訳でしかも文庫で安く読めることは、時間に恵まれた老人にとつて究極の贅沢だ。これからも体が続く限り読んでいきたいと思う。

母百歳に寄せて

浜口 須美子

いつのころからだろう。うちの母はもしかして神様から選ばれた人ではないかと思つたのは。

一九二〇年十二月五日生まれ。昨年満百歳を迎え、総理大臣から銀杯と表彰状が届き、富田林市長のお祝いの訪問を受けた。

母は毎朝七時半に、二階から一階へ出勤してくる。鞆にはマスクと口紅と印鑑と紙と筆ペン。真紅の口紅は母のおしゃれ心と気合いの象徴なので、マスクの下で見えなくても必需品である。家族が留守の間、宅急便を受け取り、電話に出て、時には訪問勧誘の人を相手に「奥様はお留守です」とインターホンに向かってお手伝いさんの役を演じたり、我が家の百歳はなかなか忙しいようだ。そしてメモ帳はフト閃いた俳句をメモするため。

白南天老には老のころざし 富貴子

全うもせず百寿とか冬蒔

富貴子

母は大正ロマンの華やかな時代に大阪天満でお嬢様の代表のような生活を送り、格式ある家同士の縁で結婚。

父の仕事の関係により当時列車で九時間も離れた東京で新生活を始めた。その後第二次世界大戦を迎え、父が大阪高槻工兵隊の主計の任務にあたり、母は幼い子供を連れての疎開をも経験した。持ち前の明るい性格で回りの人の協力を得て母の話からは悲壮感はない。でも、子供を背負って防空壕に逃げ込んだり、縁側で日向ぼっこの子供を、敵機の機銃掃射から守るため、覆い被さってみたものの、背中にはもう一人の子供を負っていたことに気づいて腰が抜けたとか、戦争中の子育ての大変さは想像を絶するものがある。

戦後父の家業であった紳士帽子店の婦人帽子部門を立ち上げるにあたり、帽子デザイナーの勉強をして、大阪の堂島で婦人帽子製造販売の店を持つ。母がデザイナーで、父が社長の二人三脚。主に洋裁学校のファッションショーの帽子デザイナーとして華やかな世界での職業婦人のはしりだったようだ。ラジオで婦人帽子の番組を担当したり、私の小学校入学時の集合写真では、着物姿の

お母さん達の中でたったひとりの洋装で、なかなか格好良い母だった。

母が六十三歳の時に九歳上の父が他界。介護の仕組みができる以前の時代に自宅で看取することは容易でなかったと思う。

母は父に対して介護のすべてを尽くしたので、後悔もなく、あとは自分が楽しく機嫌よく過ごすことが父の喜ぶ最高の供養だとフラダンスを始め、心臓手術の九十二歳まで、老人ホームの慰問に出かけ、自分より年下の人を励ます現役の踊り子役を務めた。

俳画、絵手紙、書道、華道も極め「今、自分のできることは何かしら？」と常に自問自答しながら、昨年夏からは、新聞千切り絵に出会い、年末には「百歳の生存証明を制作」と言いながら、千切り絵による年賀状を作成していた。

数年前から「オリンピックの年に百歳になるから、見るのではなく出場するわ」と冗談で言い、聖火ランナーに応募した。選ばれなかったどころか、オリンピックも開催されず、不安なニュースばかりの今、母の百歳のお

祝いだけが一条の光明だった。

母は「生きてるだけで丸儲け！」の言葉が好きで、よく使っている。今も現役で夕食の一品は作ってくれている。南瓜や海老芋の煮物は定番だ。包丁で南瓜を切る百歳は世間には何人いるかしら。市長が母を見て、「富田林の人間国宝ですね」って言われたが、まさしく、母は、百歳の旗頭として神様に選ばれた特殊な人だと思う。



母が作った達磨の千切り絵

うどん談議

浜田 道雄

三十年ほど前の名古屋在勤中のことである。昼に同僚たちとソバ屋へ行ったときのこと。同僚はみな一斉に「合わせ盛り」を注文した。そんな名前のソバは見たことも聞いたこともない。どんなソバが出てくるのか見当もつかなかったが、とにかく私も同じものをと頼んでみた。

ところが出てきたものを見て仰天した。セイロの上にソバとうどんの山が二つしつかりと並んでいる！ 私は呆れて、箸をもったままセイロを見つめ、そして思った。「いくら名古屋が『ソバの江戸』と『うどんの上方』の中間にあるからって、ここまでやるか！」

近ごろは東京にも「合い盛り」と呼ばれるものがあるそう。名古屋出身のOさんにそれを指摘されて、あわてて調べてみた。だが、多くは「カツ丼」にチキンカツやサラダ、ベーコンを合わせたような「丼もの」らしい。

なかには栃木県那須の名物という中華丼に焼きそばを合わせたというところでもないものもあるようだが。

ソバの場合は田舎ソバと普通のソバ、あるいは茶ソバと更科ソバのように何種類かのソバを組み合わせた「ソバ同士」の「合い盛り」が主流らしい。二種に限らず、五種のソバを盛り合わせれば「五色ソバ」というわけだ。名古屋のようにソバとうどんと一緒に盛り合わせるものも確かにあるが、これはどうやら「相乗り」と呼ばれているようだ。

東京は日本各地の人々が集まり暮らしている雑多な街だから、人々の故郷の食文化が「相乗り」するようになっていても、おかしくはないのかもしれない。

とはいえ、「ソバ文化」の東京で育った私には、うどんはやっぱり苦手な食べ物である。なかでも大阪のうどんはダメだ。あのフニャフニャ、ヌルヌル、ネチャネチャとした柔らかな感触がイカンのである。

はじめて大阪でこんなうどんを食べたとき、これは調理場に放っておかれて伸びきったやつを食わされたと思

った。そして子供のころに聞かされた、腹の中から口まで這い上がってきた回虫を気づかずに嚙んでいたという人の話を思い出し、そのうどんが喉を通らなくなった。

しかし、日本のうどん文化は「大阪うどん」ばかりではない。

福岡にもうどん文化がある。このうどんもどちらかといえば柔らか系だが、一年暮らしたことがあるから住んでいる間に慣らされたのか、この柔らかさにはあまり違和感はない。先年、博多駅近くの店で食べた「ごぼ天ウロン」などはなかなかいけると思った。

また、香川の「讃岐うどん」。香川生まれの友人に連れられてイイヤ行った大手町の店で食べたのが初めて。うどんに出汁をブツカケただけのものだったが、これはなかなかよかった。吸り込むとシコシコとした歯応えが心地よく、またさっぱりとした出汁にも嫌味がない。

これは私の好みに合ううどんだと思った。以来、「讃岐うどん」は私の「お好みリスト」に入っている。

さらに、これを「うどん」というかどうか知らないが、「ソウメン」や「ヒヤムギ」は大好きだ。夏だけでなく、冬でも自分好みの硬さに茹でてよく食べる。ひんやりとした喉越しが快適で、ガンを患ってから狭くなった食道もするりと抜けてくれるから、安心して食べられる。

となると、私がダメなのは「大阪うどん」だけということになりそう。大阪にも住んだことがあるというOさんは、「大阪のうどんは出汁をよく吸い込む。そんな出汁をいっぱい含んだうどんは、それはそれで美味しい」といわれるのだが。

「大阪うどん」嫌いは初体験がいけなかっただけのことかなと思わぬでもないが、といって「あのフニャフニャ、ヌルヌルは敬遠したい」という思いはいまも変わらない。だから、どなたかに「もう一度『大阪うどん』を試してみないか？」といわれても、やはり「そいつはまっぴら御免こうむる」と丁重にお断りしたい。

秋来ぬと

原田 信

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

よく知られた秋の和歌。古今集「秋歌上」の冒頭「秋立つる日に詠める」藤原敏行。三六歌仙の一人。

こんな歌を出したからといって文学談義ではありません。和歌を素材にしたパッチワークといえますか、コ罗纳で余った時間のすさびにすぎません。

立秋は八月七日ごろ、残暑まだ厳しき折。このような風に気付くのは夏の終わりですね。そういう時の実感を立秋に因んで登場させた、この日にこそ吹いてほしいという願望もこめられていると思います。目の前の実景と風の音、視覚（否定）と聴覚（肯定）を対比させた構成は見事です。

「秋来ぬと」が初句の歌は後代に相当ありますし、いくつかは「おどろく」と「風」が重なります。

季節の変わり目の歌を古今集から拾ってみます。
早春では、

春の夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やは隠くるる 凡河内躬恒

早春の主役は梅です。春歌上の約五〇首の半分で詠われ、雪や鶯、若菜がかなり出てきます。春の盛りに桜が登場すると暮春まで圧倒的に桜。約九〇首の九割を占め、山吹や藤がちらほら。

春の暮から初夏にかけてなら、

けふのみと春を思はぬ時だにも

立つことやすき花の影かは 凡河内躬恒

五月来ば鳴きも古りなん郭公

まだしき程の声を聞かばや 伊勢

夏歌は三十四首しかないのに、ほととぎすはなんと二八首です。わずかに、花橘、月、雲、なでしこ。

夏の終わりでは、

夏と秋と行きかふ空の通ひ路は

かたへ涼しき風や吹くらん 凡河内躬恒

初秋では秋風と天の川が多いのですが、秋が深まると

月、虫の音、萩。

晩秋は紅葉と菊、そして鹿。

紅葉は袖にこきいれて持ていでなん

秋は限りとみんなのため

素性法師

夕夜小倉の山に鳴く鹿の

声のうちにや秋は暮るらん

紀貫之

初冬では、

龍田川錦おりかく神無月

しぐれの雨をたてぬきにして

読人知らず

み吉野の山の白雪積もるらし

故里寒く成りまさるなり

坂上是則

春への期待

花の色は雪にまじりて見えずとも

香をだに匂へ人の知るべく

小野篁

年の終わり

あらたまの年の終はりになることに

雪もわが身もふりまさりつつ

在原元方

最後はなぜか「老い」の自覚になってしまいました。

恋歌の多い古今集にも老いの歌は散見されます。

こう書いてきて、あらためて思うのは、すでに多くの指摘があるように、日本では千年以上も前のことばが、今でもほぼ判るということです。源氏物語などの例外もありますが、和歌はかなり判ります。英仏などで今の人が読める詩は一四、五世紀以降だと言われます。日本だけだと言う人もいますが、そうでしょうか。知り合いの若い中国人たちは知識層ではなくても古い詩を実によく暗記しています。

ここ数年、寝る前にベッドで漢詩集を開いています。周知の詩もありますが、やはり難関が多いのですぐ眠くなります。たまには和歌集も読みますが、漢詩ほどの睡眠導入の効果はありません。全く知らない漢字や複雑で難解な典拠が出てきて立ち往生したら本を閉じます。和歌でも忘れた古語や知らない表現にぶつかれば同じです。中国の詩人・陶淵明の自伝に「好讀書、不求甚解」ということばがあるのを知って意を強くしました。甚解は「隅々まで追及し理解すること」。「フキユウジンカイ」と唱えながら眠りに入ります。

企業OBペンクラブと私

平尾 富男

私が企業OBペンクラブに入会した契機は、東京外国語大学の先輩だった故高橋孝蔵さんによる半ば強引な勧誘でした。先輩といっても私が英米語学科に入学した時には、高橋さんは既にロシア語学科七年生でしたが、丸紅の子会社、日本海貿易社に入社が決まっていました。OBペンクラブでは長老会員の都甲昌利さんと大学の同期入学だったと後に知りました。

学校では学年も語学科も違いましたから、勉学上の関係はありませんでしたが、運命の悪戯か私の結婚式で友人代表をお願いするほどの親しい関係になり、私の人生で忘れられない恩人の一人でありました。今は亡き高橋さんのご冥福を祈ると同時に深く感謝する次第です。

このクラブは私が入会する以前、長い間北田純一さんが会長をいささか強権的に務められていました。その後

色々あって、北田さんの後任会長に、西川武彦さんが就任され、運営委員長の松谷隆さんと事務局長の私の三人による気の合った執行部体制で、暫くの間楽しいクラブ運営に携わることができました。長年事務局長を務める間に、多くの会員の皆さんと親しくお付き合いが出来るようになりましたから、定年後の私の人生でOBペンクラブ活動はととても有意義なものとなりました。

このクラブの創成期には、出版活動も盛んだったようですが、暫くクラブから本を出版することがなくなっていました。そこで、西川さんの発案で出版活動を再開しようということになりました。その契機になったのは、「ペン川柳」分科会の始めから携わったメンバーを中心に、広く会員の皆さんの協力を得て、エッセイ、掌編小説の作品を纏めたことです。

川柳では、出版社「青蛙房」に原稿を持ち込んだところ、女性編集長から高い評価を得て、【卒サラ川柳】『不良老人たちの溜息』というタイトルで即出版が決まり、専門的な校正作業を経て、一般書店の店頭に並べることが出来たのです。平成十八年（二〇〇六年）の事でした。

本の帯は、作家・安部譲二の名前と紹介文で飾ったのです（以下にその帯の内容をご披露します）。

「川柳に込めた元企業戦士たちの溜息、

吐息、ときに熱き想い

何をして遊ぼうと俺たちの勝手さ。

どうだ、羨ましいだろ。

この穏やかでヌルい爺様達が、

若い頃は鋭くて、豊かで平和な日本を造った

なんて信じられますか？ アナタ……

安部譲二 青蛙房 定価…本体千八百円＋税

これに気を良くして、【卒サラ川柳】はこれまでに第二、三の続編を出版しました。

このクラブは開設以来ずっと男性オンリーのクラブでした。女性会員第一号は二〇〇八年一月、三春さんの入会迄待たねばなりませんでした。その三春さんは「ペン川柳」の会にも所属され、積極的な活動を今の今まで続けてこれ、このクラブに大いに貢献されています。

三春さんの入会以降、続々と優秀な女性会員が入会さ

れ現在に至っています。

女性会員第二号は文章を書くことにも長けた優秀な山崎礼子さん、そして第三号は小寺裕子さんでした。山崎さんは懸賞小説に何度も果敢に挑戦されていました。小寺さんは、同時通訳の資格を有しておられ、現在もその専門分野で大活躍をされています。残念ながらお二人とも外部での活動が多忙を極め、いずれ復帰する可能性を残しつつ、惜しまれてこのクラブをお辞めになってしまいました。

現在三春さんの他に掌編小説やエッセイ他の分野で大活躍の内藤真理子さんを始め多くの優秀な女性会員が大いにクラブ活動を盛り上げてくれています。クラブの若返りを期待して更なる女性会員の入会が待たれるところです。



GoToトラベルキャンペーンに参加して

福本 多佳子

GoToトラベルは近く予算を使い切り来年を待たずに終了の可能性、と耳にした友人と私はコロナ自粛期間の思い出となる「味覚だけではないプラスαの旅」を考えた。すると、朝刊に直島ベネッセハウスの写真。

銀座で画廊を営んでいた亡き親友のボヤキが聞こえるようだ。「ベネッセハウスに泊まりに行きたい。でも今の状況では余裕がない」。念願の直島行きを実現することなく彼女は逝ってしまった。

国内旅行は高齢者になってからと考えていた私も七十年代、ここ数年の二回に及ぶ引越し作業で疲れきっている旅を考える良い時期と考えた。

直島一泊というツアー日程を見るといつか巡ろうと考えていた島根県の足立美術館、倉敷の大原美術館、四国の大塚国際美術館、直島アートサイトと全てが網羅されている。料金も「このコースでこの価格」とリーズナブ

ル。即、予約サイトにアクセスするが三月までの全ての出発日が満杯。「なんだ。新聞広告掲載前に全て満席」とがっかりしたが二回目のキャンセル待ちで旅が実現した。

このツアーの魅力は一点豪華主義のお手頃価格設定。最初の二泊は駅隣のビジネスホテル。シンプルながら清潔で設備に問題無し。紅葉が残る岡山空港に降り立つとツアー・エスコートとバスが待っていた。車窓からは紅葉の丘と枯れた黄色の広々とした田畠が広がり赤い瓦の家々が点在、予想より明るい色彩の農村風景だった。

日本はどこもが以前より明るく綺麗になっていると感じていた。奈良東大寺大仏殿前の広場も昔と違い土埃のない、鮮やかな緑の芝生、公衆トイレも様変わり。鎌倉の寺院も綺麗に整備され、庭には花が美しく咲きそう。国の豊かさに伴い、観光地は美しく変わっていた。

今回のツアーの一部地域は学生時代に訪れている。夏のアルバイトで貯めたお金を旅費の一部に、東京駅から鳥取へと向かう寝台列車に乗車した。早朝、目を覚ます

と外の景色は嵯峨野付近、山陰に向かっていることを実感。鳥取砂丘観光後に向かったのは玉造温泉の宿。現在のKKR、国家公務員共済組合の保養所だ。

翌朝、境港から船で西之島の別府港へと向かった。船が真っ青な海を進んでいくと周囲には海面上を飛ぶトビウオの雄姿。びっくりするほど透き通り、海藻が揺らぐ海底を覗きこんで感動した。崖上の国民宿舎に荷を降ろすと、国賀海岸へ向かった。誰もいない山路を登り魔天崖とそれに続く断崖上の青い空と眼下の青い海原との青の競演を見て感激した。翌日、連絡船の乗り継ぎ時に無人の白砂のビーチを歩き、透き通る水の中で泳いだ。

三泊目は隠岐の島、西郷泊。当時の隣人が隠岐の島出身で宿をとってくれていた。タクシー観光を済ませ夕食後に隣人の実家を訪問。蜷舞う庭先の岩場でサザエを手で掴み取ることが出来た。玉造温泉に戻り、友人の車で出雲大社参拝。

当時の夏休みで混雑した大社と、今回のツアーのコロナで人影少なく緑美しい背景の大社では印象が異なる。

心に残る画像が置き換えられた。二度目の大原美術館の本館にはテレビで観たばかりの児島虎次郎の絵画『和服を着たベルギーの少女』が入場者を温かく迎えていた。

念願の直島は宇野港からフェリーで十五分。まさに瀬戸の内海、十二月とは思えない明るく澄み切った海に浮かぶ小島群、海苔の養殖網が広がっていた。「家プロジェクト」から始まり、地中美術館、ベネッセハウスミュージアムでの現代アート鑑賞後の陽光溢れるカフェでのひととき、ホテルへと下る山路に咲く可愛い花や草木、ホテル専用栈橋を歩き、草間彌生のカボチャをバックに写真、サイト内に配置された作品の数々、夜は希望者へのハウス内現代アート鑑賞ツアーと充実した滞在だった。

隠岐の鮮烈な記憶の上書きを避けるべく再訪せずにいたのと同様、直島再訪も考えないかもしれない。この時期に心休まる旅を楽しめたことに感謝しつつ、ライトアップの倉敷美観地区を散歩していたのが私たちのみだったことを思い起こす。早い時期のコロナ禍収束への道筋がほしいと願う日々である。

コロナ禍の中で

藤原 道夫

コロナ禍がはびこる中、遠出の旅はおろか居住地の三鷹から都心に出かけることさえほとんどなくなりました。時間がありそうで、さほど余裕はありません。日常の雑用の多さに改めて感じ入ったものです。そんな中で聴いたCD、まとめたエッセイ、これから取り組みたいと思っている本などについて記してみます。

CDを聴く機会は増えました。昨年を通して最も多く聴いたのは、大バッハの曲でした。至高の「無伴奏チェロ組曲」(マイスキー)、「ゴールドベルク変奏曲、弦楽三重奏版」(今井ら)、ピアノ演奏による「コラール、人の望みの喜びよ」(ブーニン)などを聴いては感激を新たにしました。最高傑作の一つと思っている「マタイ受難曲」は部分的に。ワーグナーもよく聴きました。長大な「リング」は抜粋版にて、音の魔力は十分に聴きとれます。穏やかな「ジークフリート牧歌」朝比奈隆、関西フ

イルハーモニー)は愛聴盤の一つです。モーツァルトとブラームス「クラリネット五重奏」の聴き比べが面白かった。ひたすらきれいな前者に対して哀愁とロマンに満ちた後者、こちらに強く魅かれました。とっておきのCDは「ベートーベンとシベリウスのヴァイオリン協奏曲」(庄司沙矢香)。特に後者で聴こえてくるヴァイオリンの音の繊細さ、究めつくされた高音の響きは魅惑的です。

次に、書き下ろしたエッセイのこと。思い入れの強い桂離宮について六月末までに十篇にまとめました。発表できたのは三篇のみ、エッセイ・コラムに投稿したのは(六)まで、「(七)内装」については写真を付けて発表したと思います、叶わぬまま時が過ぎてゆきます。たまたまペンクラブに発表する文として思い入れの強いものは好ましくない、という一文を見つけて少々驚きました。しかし桂離宮についてまとめる機会に恵まれたことに自分としてはとても満足しています。エッセイを書きながら数えてみると、初めて母と連れだつてこの離宮を訪れたから五十年経ち、母の三十三回忌に当たっていました。続いて見つけたテーマが芭蕉の俳句でした。五月に作

家で精神科医の加賀乙彦が著した『私の芭蕉』を入手し、とりつかれてしまいました。言葉の美しさ、響き、並べ方によって変わってくる重みの違いなどが面白い。一方、句の解釈については合点がいかないことも多く、しばしば自分なりに思い巡らせてみました。芭蕉の時代に生きた積りになって感じてみる、そういうながらもこれがなかなか難しい。ただあれこれ想像するのは楽しいことです。芭蕉ともなると、情景ないし心象が句に多面的に詠みこまれているように思います。権威者が唱えた解釈が必ずしも当たっているとは限らない。しかしいったん定説ができてしまうと、異論を呈しても容易には受け入れられないのはどの世界も同じなのでしょう。

秋には紅葉狩りを中心として修学院離宮について書いてみました。桂離宮の時のようにシリーズとするのではなく、断片的ながら興味を抱いたことを三篇にまとめました。この離宮がどのような意図によってつくられたのか、そして自分がどうしてこうも惹きつけられてきたのか、もやもやとした疑問は書きながら少しずつ晴れていくような気がしました。具体的に書くのは難しいの

ですが、この離宮は自然の中に遊ぶ開放感があり、四季の移り変わりの美しさ、特に紅葉の見事さは天下無類といつてよいでしょう。

最後に昨年末に入手した『美学』（小田部胤久、東大出版会）について触れておきます。新聞の書評欄にこんなことが書いてありました。「美学は美しいとする趣味判断を主体としてその判断の分析に向けられている。

……美は個々の事物に宿るのではなく判断の形式に宿る。……だからこそ美は世界の中心に位置することができ」。

今後この本に向き合っていきたいと思っています。

コロナ禍は第三波が「緊急事態宣言」の下でピークを越したものの、高止まりしているといわれています。ワクチン接種が現実のものとなりつつありますが、コロナ禍の収束にはなお時間がかかりそう。現在生きている人たちはこのウイルスにしばらくの間悩まされそうです。そんななかで、自分なりの楽しみを見出して発展させていくことが、生きる上で大事な糧になるでしょう。

三文判でオランダから必死の脱出行

細谷 博

「今日はあそこで五件目だな！」と担当の警官が同僚をふり返って言った。オランダの首都アムステルダム駅前のバス切符売り場で一寸の油断のすきに、膝に挟んで置いた旅行兼用書類鞆をあとという間に盗られて追いかけたが間に合わず、やむなく近くの警察署に駆け込んだ次第である。

それはそれは見事な七、八人のチームプレイで、あつと振り返った私の視野をさえぎる奴の先を、三手か四手に別れて走り去る。どのグループが私の鞆を持っていたのか見当もつかず、途方に暮れて警察に來たのだが、流暢な英語で応対する警官の態度から鞆の回収は絶望的と推察。ならばと、翌日の午後三時スキポール空港発のJAL便に乗るために不可欠なのに盗まれてしまった搭乗券とパスポートを、如何にして再発行して貰うかに全力を傾注せざるをえなくなった。

もう夜になっていたのでホテルからJAL事務所に電話で窮状を訴えたところ、先ずオランダ出国に不可欠な臨時旅券を入手するのが先決で、それが成田行きの便に間に合って確認出来れば搭乗券は即座に発行するので、翌朝一番にJAL事務所まで打ち合わせ後、臨時旅券の手続きを進めてくれとのことであつた。ただし、査証業務は大分離れたハーグにある日本領事館でのみやっており、また今迄の実績では臨時旅券発行には本人確認が問題で、本国照会に二、三日は要しているとのこと。絶望的になったその晩は同行の開発設計技師とやけ酒をしたたか飲んだ。

翌朝は一番でJAL事務所で打ち合わせのち、ハーグ行き電車に飛び乗ってハーレム、ライデン経由にて一時間少々でフェルメールで有名なデルフトや肴が美味しいスケベニンゲン（本当の地名！）もほど近いハーグに到着。日本領事館は町外れとのこと。駅からはタクシーを飛ばした。

小ぶりながら瀟洒な建物で出迎えてくれたのは日本人とオランダ人の若い女性で、既にJALから電話で予告

があつたため、事態の説明は殆ど必要がなかった。

その二人の話によると、帰国だけのための臨時旅券の発行を求めている人が、本人であることを証明する物が必要ということである。しかし、肝心のパスポートを盗まれたうえに写真入りの運転免許証も持ち合わせていない。暫く気まずい沈黙が続いたあとで、日本人の女性がぼつんと思ひ出したように言った。「日本人ならば大切などときには印鑑を使うので、お持ちならば、それが証明になります」とのこと。私は「そんな大切な物を海外出張の時に持ってきてませんよ」と言いかけて、ふと思ひ出し、財布から定期券サイズのカードを取り出した。

それはカードに認め印が仕込んであり、印影はシャチハタ風でなく、かさばらなくて便利だと財布に入れていたものだ。そのカードで紙に押しつけてみると鮮やかに私の名字が捺された。それを見た女性は「それなら結構かな？」と奥の上司に相談に行き、暫くして満杯の笑顔で戻つて来て「オーケーよ！ 直ぐ臨時旅券を作製しますからお待ち下さい」

既にお昼休みの時間に入っていたが二人は作業を続け

てくれ、また奥に入つて暫くすると総領事の印が捺された臨時旅券を手渡してくれた。感謝感激で旅券を押し頂くと、タクシーは呼べないとのことなので、最寄りの市電の停留所まで一キロ近くを全力疾走して、丁度やつて来た市電に飛び乗つてハーグ駅へ。

電車はワンマンで、チケットは車内では売っていないかどうかどうしたら？と迷っている内に駅に着いてしまった。

すると運転手はにこつと笑つて、どうぞと私に下りろとの合図。オランダ人はダッチアカウントと世界中でいわれているが、実は温かい財布の持ち主だとまた感激。

アムステルダム行きの乗り継ぎ電車の中でも気持ちは全力疾走で、空港駅に到着次第JALカウンターに駆けつけると「細谷さんですか？ もう時間がありません。私と走つて下さい」ということで係の女性と又々全力疾走。搭乗機のゲートにつくと女性は息を切らしながらも「ビジネスクラスは満杯になったのでファーストクラスで我慢して下さい。空路はご無事で」

サービスドリンクの淡い黄緑のシャンパンの泡をしみじみと眺めてハンコに乾杯をした。

穴原温泉の旅

松田 昌康

昨年十一月末、「GoToトラベル」を利用して穴原温泉に行った。穴原温泉は、奥飯坂温泉とも言われる。JR福島駅から福島交通飯坂線に約二十分乗り、終点の飯坂温泉駅で下車。階段を上って改札口を出ると、松尾芭蕉の像と大きな卵のオブジェが目を引く。名物のラジウム卵を表すようだ。駅前の観光協会に立ち寄って飯坂温泉の観光パンフレットを貰い、ホテルに電話をして迎えるマイクロバスを予約してから、飯坂温泉街を見て回った。松尾芭蕉が旅の途中で飯坂温泉に立ち寄り、『奥の細道』に「其夜、飯坂にとまる。温泉あれば湯に入て宿をかるに土坐に筵を敷てあやしき貧家也」と記した。飯坂温泉発祥の場所には鯖湖神社があり、その左側に「泉仏お湯かけ薬師如来」が祀られている。その道沿いに公衆浴場の「鯖湖湯」があり、誰でも安い料金で入浴できる。中はこじんまりしていて、花崗岩の床が珍しかった。

さらに、旧堀切邸を見学した。邸内の土産物店を兼ねた案内所にボランティアの年配の女性がおられて、案内、説明してくださった。広い屋敷の中には源泉かけ流しの「足湯、手湯」があり、和風の主屋、廊下続きの土蔵三つ、使用人用の建物や米俵などを置く広い倉庫があった。観終わって出るとき、庭の南天の真っ赤な実と軒先の干し柿が目を引きいた。

マイクロバスの来る頃になったので駅前に戻り、迎えるバスに乗った。バスは途中で摺上川に架かる橋を渡り、川上に向かって進み、約十五分で穴原温泉の吉川屋に着いた。公道から二階分ほど下ったところにホテルの玄関がある。大型バスが数台は駐車できる広いスペースを持つ、摺上川に沿って立つホテルで、周辺に数軒のホテルがある。ホテルの裏手は険しい崖になっていて、夜になると岩肌が見えるところがライトアップされ、ホテルの露天風呂からも見えるようになっていて。

チェックインを済ませると、入浴予約掲示板の当日の希望時間帯のところに部屋番号を書いた。夕食も希望時間帯を指定するようになっていて、コロナ感染対策のため

めの人数制限を行っていた。

ホテルで目についたのはNHK連続テレビ小説「エール」のポスターで、あちこちに貼られていた。また売店の一角には古閑裕而のコーナーまで設けてあり、エールの宣伝効果にあやかりたい熱心さが伝わってきた。

翌日は、マイクロバスで飯坂温泉駅に出て、電車で二つ目の医王寺前駅で降りて医王寺に行った。妻が観光案内の地図を見ながら示す道を進んだが、十分経っても一向に医王寺を示す表示がない。道沿いの庭に居た人に医王寺への道を尋ねたところ、全く反対方向に来ていると言われ、道を引き返して倍の時間をかけてなんとか医王寺に着いた。

医王寺は、真言宗豊山派のお寺で山号は瑠璃光山。平安時代八二六年の開基で、奥州藤原氏一門の佐藤氏の菩提寺。源義経に付き従った佐藤兄弟の石像があった。

山門入って詰所受付で入場券を買ひ、さらに門をくぐると、庭の奥に本堂があり、本堂の外側の白壁の塀と左の杉並木の大木に挟まれた小道がまっすぐに伸びて、薬師如来が祀られた奥の院薬師堂に至る。堂を囲む

樹々の中に銀杏の大木があり、樹に残った葉も一面の落葉も真黄色で、奥の院に相応しい眺めだった。元禄二年（二六八九）、芭蕉も奥の細道の旅の際にここを訪れて、佐藤兄弟を偲んで「笈も太刀も五月に飾れ紙幟」と詠んだ。また、山門前の右側に竹藪に沿って下る狭い坂道があり、「おくのほそ道・芭蕉坂」と記した柱が立っていた。帰りは、飯坂温泉駅まで歩いた。途中、片岡鶴太郎美術庭園の前を通った。草津にも彼の美術館があったのを思い出した。駅に着いてバスの予約時間まで少し間があったので、十綱橋を渡って、巻せんべいを買に行った。三日目の朝食後に、近くの林檎の自動販売機まで行っただが、早かったためか中は空っぽだった。帰る途中の林檎畑で、農家の人が三人で林檎を収穫していた。分けてもらえないかと尋ねたところ、量り売りしてくれた。十個ほど買って帰宅後に食べたが、新鮮ですこぶる美味しかった。

JR福島駅の「餃子照井」で円盤餃子とラーメンを食べ、帰りの新幹線に乗った。コロナ禍の中、旅情を満喫できた癒しの三日間だった。

百歳の胃

松谷 隆

世間で「うちはガン系」とか「脳梗塞系」とか言っているのをよく聞いてきた。この分類では、我家は間違いなく「胃ガン系」である。祖父、親父、五人の叔父のうち三人、二代で五人も胃ガンで亡くなったからだ。

三代目は過去の胃の内視鏡検査で、二度の腺腫検出も摘出手術の結果、「ガン性物質なし」で、ガンとは無縁だと思っていた。だが、そうは問屋が卸してくれなかった。

「あなたの胃は百歳の人の胃です」と言われたら、あなたはどうか反応しますか？ これは昨二〇二〇年五月十三日内視鏡検査後、二十五日の胃ガン手術の打ち合わせ中に、主治医から筆者に発せられたもの。

彼の論点は、一八年六月に腺腫摘出後の大出血時の応急手当による胃の変形、一月以来の腺腫と病理サンプル摘出手術や数回の噴門の拡張手術により、胃の内部が正

常でないために、「ガン部を含め胃三分の一の摘出だけ、最悪、胃の全摘もありうる」ということ（と分かったのは入院前日の二十一日）。

この全摘には「偉丈夫だった亡父が全摘の結果、三九^キまでガリガリに痩せて亡くなった。あの繰り返しただけは何があってもご免だ」と強硬に反論した結果、主治医は「受けるかどうかよく考えて、入院日の二十二日に決める」とのセリフを残し終了。

発端は十九年十月二日の内視鏡による胃の検査で、二度目の腺腫が検出されたことである。その後、十一月十四日以降横浜市立市民病院（以下病院）の消化器内科で内視鏡センター長の診察、検査が繰り返され、二十年一月二十八日に摘出手術を受けた。そして、二月十三日に「摘出部より初期ガン物質検出」との通知があり、翌日、事前に説明されていた噴門の収縮による嘔吐が起きた。

その後四月中旬まで、三回の入院、五回の噴門拡張手術でも、内視鏡を充分操作できる大きさに拡張できず、センター長より「外科手術の考慮」を示唆され、消化器

外科での面談に同意したものである。

「胃全摘もあり」との通告にはたまげた。ガン摘出経験者の話を聞くと共に、ネット上の経験談を集めた結果、いかなる場合も「初期ガンで全摘」は見つからず、前述のセンター長の意見を聞こうとしても、できなかった。

幸い、電話にでた看護師が、主治医に当方の関心事を伝えてくれて、入院前日の夕方面談できた。

彼は開口一番、「私はあくまで部分摘出をします」と宣言、全摘と言った覚えがないと言わんばかり。妻共々あつけにとられた。長居は無用と礼だけ言って退散。今は「ケ、セラ、セラ」と決め、気分良く入院できた。

五月一日に移転、六日業務開始の新病院の個室は太極拳もでき快適。だが家具が使いづらく、公衆電話も一階に故障多発の一台だけ。一時妻と音信不通になり、息子にメールで中継を依頼し事なきを得た。緊急事態宣言中は、面会も制限され、かつ病棟のセキュリティは厳しく入り口の開閉も看護師がおこなう缶詰状態だった。

四分の一切除で済んだ術後の経過は便秘以外順調で、リハビリも理学療法士や看護師から、「運動習慣があるので問題なし」「姿勢が良い」「お腹も柔らかく安心」と言われ、予定通り六月六日に退院。体重は入院時比三^キ減の五八・四^ロ、高校一年時に逆戻りでシヨック。

自宅療養になり、妻が術後食の手引きに沿って、外食も含め毎食準備してくれたのは感謝に堪えない。お陰でその後五七・九^キが最低、三カ月で三^キ増、以降プラス一^キ台で推移している。これには主治医もにつこり。

心配だった飲食物の逆流は、流動食終了と共に増加し、十月が最悪で、ほぼ一日おき、また日に二回もあった。しかし、その後はだんだん減り、現在は月一回程度だ。

だが、昨年十二月の内視鏡検査で、前日の未消化残が見つかり、新たなシヨックを受けた。

胃にもっと注意を払えという警告と思い、「百歳の胃」と言われないよう従来以上に注意しようと思っている。

天国は曇りのち晴れ

三 春

古いイタリア映画『ニュー・シネマ・パラダイス』を観た。といっても、三十二年前は映画館のロードショー、今は自宅のパソコンで熱燗やおでんと共に。

年齢と経験を重ねたおかげか、昔より多くの感動、年月と人生の重み、人と人、人と土地のつながり、温もりと優しさ、忘れていた沢山の思い出が呼び覚まされた。

一九八〇年代のローマ。高名な映画監督サルヴァトーレが夜遅く帰宅すると、三〇年も帰っていない故郷シチリアの母からの伝言があった。「アルフレードが亡くなった。明日は葬儀」。ここから、「トト」と呼ばれていた幼少の日々、アルフレードとの思い出の回想が始まる。

トトは母親と妹の三人暮らし。父親は第二次世界大戦で戦死した。そんなトトを夢中にさせたのは村で唯一の

娯楽、映画だった。広場にある「パラダイス座」には村の老若男女が集い、恋愛もの、喜劇、西部劇などの映画を観ては、泣いたり笑ったり叫んだり賑やかさ。教会の神父がチェックして男女のキスシーンをカットさせるので、その度に観客は失望と不満の声をあげる。

アルフレードは村でたった一人の映写技師だ。彼を父親のように慕うトトは、母親の目を盗んでは毎日のように映写室に通う。カットされたフィルムのコマ切れを欲しがるとトトに根負けしたアルフレードは「お前のものだからまだ早い。俺が預かっておく」と。

ある夜、「パラダイス座」が火事になり、アルフレードは火傷して失明してしまう。建て替えられた「新パラダイス座」の映写技師は子供ながらもトトの役目だ。

月日は流れ、青年となったトトは八ミリカメラに夢中で、高嶺の花のエレーナとも恋仲になるが、彼女の両親に認めてもらえず、失意のまま兵役につく。

一年後、兵役を終えたトトにアルフレードが忠告する。「この村にいると自分が世界の中心で何もかも不変だと感じる。だが他所にはんの数年いるだけで何もかもが変

わる。今のお前は私より盲目だ。人生はお前が見てきた映画とは違う。行くんだ、帰ってくるな。私たちを忘れる、ノスタルジーに惑わされるな」

別れの駅、アルフレードの表情はサングラスで見えないが、トトの頬を優しく撫でる手に真情がこもっていた。

あれから三十年。葬儀に参列するために故郷に戻ったサルヴァトーレと老母との対面。「昔のことは忘れたと思っていたけど、帰ってきたら何も変わっていない、ずっとここにいたようだ」と語る彼に母は言う。「お前に電話するといつも違う女性が出る。でもお前を心から愛している声をまだ聞いていない。聞けばわかるのよ。お前が誰かを愛して落ち着いてくれば嬉しいわ」

アルフレードの葬儀の列。振り返ると、かつての観客の老いた姿がいくつも見える。神妙に話しかける彼らに「どうして僕に敬語を使うんですか?」「すっかり偉くなられたから。でもお望みならこう呼ぶよ。トト!」

アルフレードの妻から形見を受け取ったサルヴァトーレはローマに戻る。形見はフィルム缶だった。試写室の

スクリーンに映しだされたのは、幼少のころにアルフレードが預かってくれていたあのこま切れフィルム、銀幕スターたちのキスシーンだった。

さて、「パラダイス座」には、映画に向かって叫ぶ人々、上映中に授乳する人、いたずらをされて叫ぶ人などが頻繁に登場した。映画を静かに鑑賞する現代とは異なり、映画館は人々にとってお祭のような場所だったのだろう。幼い私が父に連れられてよく行った近所の映画館もそうだった。子供の泣き声、観衆のヤジ、食べ物の匂いなど当たり前で、時には「おとーちゃん、おしっこお!」「何だよ、せつかくいいところなの……そこでやつちゃいな!」なんていうのもあった。館内の通路は緩い坂になっていて、まもなく後ろから小川チヨロチヨロ。

その映画館はチャンバラ専門だった。片岡千恵蔵、市川右太衛門、嵐寛寿郎、大友柳太朗、東千代之介……、父の大好きな時代劇を支えたスターたちだ。

ところで我が家ではテレビでキスシーンがあると、母は慌てて茶を入れ替え、父は新聞を広げだしたものだ。

米国大統領選挙

森田 晃司

米国の真の支配者という意味で、近年はDS（ディー・ステート）という言葉が良く使われています。

DSの構成員は主にロスチャイルドやロックフェラーに代表される国際的な金融資本とエスタブリッシュメントと呼ばれる既得権益者グループです。

DSは大統領選挙の結果をも支配する力を保持してきました。一八九六年に選出の第二十五代のマッキンレー大統領以降の百二十年間に誕生した大統領は、例外なくこのDSが支援し作り出してきた大統領だったと、歴史研究家の林千勝氏が述べています。

ところが、二〇一六年にドナルド・トランプ氏がエスタブリッシュメントの手から国民の手に米国を取り戻すといって選挙を勝ち抜き、第四十五代の大統領に就任しました。

トランプ大統領はDSに取り囲まれた四面楚歌の中

で、巧みな政権運営を続け、国民第一の政策を貫き秩序の回復に努め、無益な戦争からの撤退と中東和平を進め、中共への融和策を改めてその浸透を防止する方向に転換するなどの施策で国民の信頼と支持を得てきました。二〇二〇年には再選は確実と目されてきましたが、そこに中国発のウィルスが襲ってきました。反トランプ陣営は、混乱に乗じて、多数の州で、不正の温床とされる郵便投票を拡大または強引に導入するなど、不正の準備を整えました。

元ウクライナ大使の馬淵睦夫さんは近年の国際状況を、DSを中心としたグローバリズム勢力、中共を核とした共産主義勢力、トランプに代表されるナショナリズム勢力の三つ巴の戦いと分析しておられます。中共を利用する一方で、中共の躍進の後ろ盾だったDSは、覇権争いの観点から中共封じ込めに転じてトランプに協力してきました。しかし、この選挙では中共と手を組みトランプ追い落としを図っています。

それでも、選挙はトランプ優勢で開票が進められていましたが、深夜になって突如バイデン票が急伸するとい

う不自然極まりない展開で、接戦州をバイデンが逆転で勝ち取ったとマスメディアは報じています。

トランプ大統領は、選挙結果は不正によって盗まれたと主張し、議会闘争や法廷闘争を続けています。中共や民主党重鎮との深いかわりがあり、しかも不正で定評のあるドミニオン社の集計システムの採用、郵便投票にかかわる様々な手口の不正、投票資格者数を上回る投票数など明白な不正の証拠が明示されても、州政府も州議会も裁判所も動くとはしません。最高裁も訴えを受理せず、門前払いです。

DSに支配されている大手のマスコミは不正隠しに躍りになっていますが、中小のメディアやネットを通じて不正の実態は徐々に拡散し、今や国民の大半は不正選挙だったと認識しているようです。戒厳令の実施なども取りざたされていますが、トランプ大統領は国民の支持の高まりを拠り所に最後まで戦う構えです。少なくとも、本年の一月二十日の大統領就任式までは、何が起るのか、予断を許さない状況です。

それにしても、今回の不正選挙で驚かされるのは、そ

の手口の粗っぱさです。白昼堂々と銀行強盗に入るが如き大胆不敵さで、発覚を恐れません。事実、明白な証拠が示されても州政府も州議会も司法省もFBIも、そして連邦裁判所さえも動くとはしません。議員も判事も官僚も、見て見ぬふりを続けています。DSの支配と中共からの静かな侵略の米国社会への浸透ぶりをまざまざと見せつけられる思いです。

一月二十日にどんな結末が待っているのか、予断を許しません。しかし、自由と民主主義を標榜する米国は存続の岐路に立たされています。米国政権の唯一つの正当性の根拠である大統領選挙があらゆる不正で踏みこじられるという、国家存立にかかわる危機です。米国民は立ち上がるのか、注視していきたいと思っています。



我が授業

八木 信男

その1 文字について

私 「数学では数を表すのにアルファベットを用いる。

a、b、c、dは定数に、x、y、zは未知数に用いる」

生徒 「aはわからないのに何で定数なんですか？」

私 「それはね。例えば1個a円のリングという場合で話しましょう。1個a円のリングっていくらですか？」

生徒 「わからないです」

私 「そうですね。でも、果物屋のおじさんは、朝早く市場へ行ってリングを買ってきます。そして、今日は1個80円で売ろうと決めます。そのときはaは80だ。夕方店じまいをしようとするとき、50円で売り切ってしまうおうとするとaは50になる」

生徒 「さっぱりわからん」

私

「遠山啓というえらい数学の先生が、文字が表す定数は、一度決めると変化しないといった。だからaを80と決めたら、変えない限り80という定数なんだ。文字が表す定数を未知の定数、数字が表す定数を既知の定数といってもよいと思う」

生徒 「授業もa分にしてください。aは20で！」

その2 クリスマスのネタ

（これは私が中学か高校で英語の先生に習った小話）

私 「最近ようやく宣伝などでXmasのアポストロフイが消えたね」

生徒 「アポストロフイはいらないのですか？」

私 「辞書を引いてごらん。ないでしょ」

生徒 「ほんとだ」

私 「昔、英語の先生が、ケーキ屋さんに注文したクリスマスケーキを受け取りにいったとき、アポストロフイは間違いだとかケーキ屋の主人に文句を言った。さて、ケーキ屋の主人は何と答えたでしょう？」

生徒 「???」

私 「チョコレートをおまけしておきました、とさ」

その3 必要十分条件の覚え方

私 「十分なら必要と覚えてください」

生徒 「それで覚えられたら苦労しません」

私 「それなら、ならばを表す矢印 $\Rightarrow$ が始まる方の条件が主語なら十分条件、終わる方の条件が主語なら必要条件」

生徒 「覚えにくい!」

私 「仕方がないな。そうそう、ジュンク堂は何を売っているの?」

生徒 「本でしょ」

私 「なら、ジュンク堂ならば本屋は正しい?」

生徒 「正しい」

私 「だったら、JならばHと覚えてください」

ジュンク堂のJは十分条件のJ、本屋のHは必要条件のH」

生徒 「ジュンク堂ならば本屋ね。はいはい。でも先生

ジュンク堂がなくなれば使えませんよ」

その4 包含関係の記号 $\supset$ と $\subset$

私 「集合Aが集合Bを含むとき、 $A \supset B$

ある要素aが集合Aに含まれるなら $A \ni a$ 」

生徒 「わからん」

私 「ならこれでどう? スマップ $\cap$ ジャンニーズ

キムタク $\cap$ ジャニーズ」

生徒 「先生わかったけど、例が古いわ」

その5 Σ の使い方

私 「 Σ の次にkが含まれていない式があれば、その式をn回加える」

生徒 「???」

私 「 $\sum_{k=1}^5 k$ はどうなる?」

生徒 「 $A + A + A + A + A + A$ 。何これ?」

私 「北斗の拳って知らない?」

生徒 「おまえはもう死んでいるって、古いっしょ!」

土佐藩の料理人

矢澤 正二

土佐の領域は高知県とほぼ同じで、関ヶ原の合戦以前は長宗我部氏が治めていた。改易となり遠江国掛川を治めていた山内氏は率先して徳川氏に味方した功績により大幅な加増を得て土佐一国を与えられ、この地を治めることとなった。

こうして土佐藩には、山内家の従来からの家臣で藩主について掛川から土佐に入った者（上士）、長宗我部氏の旧臣で郷士など（下士）の二重構造になっていた。上士の代表格は後藤象二郎、板垣退助。下士の代表格は我らが坂本龍馬、中岡慎太郎である。

藩主のお目通りがかなう「御目見え」、それ以下の身分である「御徒」とそれに準ずる「御徒並」と分けてもよい。そこまでが「士分帯刀身分」であり、その下が「足軽」である。

私の母方のルーツは土佐である。先祖は藩主やその家

族の料理を作る料理人であったという。料理人の身分は「足軽」より上で「御徒並」である。「士分帯刀身分」からいえば最下層である。

時代が進み、江戸中期には商品経済が農村部まで浸透するようになり、生活苦から武士の身分を譲渡するようになった。我がご先祖が生活困窮のため武士の株を売ったのか、はたまた藩主やその家族のために料理を作るのが嫌になったのかは不明である。

いずれにせよ我がご先祖は、掛川から付き従ってきた山内家の武士（料理人）の株を売った金で、土佐の中心地から離れた地にくばくかの土地を買い、小地主（農業従事者）として再出発した。包丁を鋏に替えて生計をたてることとなった。

これとは逆に坂本龍馬の坂本家はもともと商家であったが、郷士の株を新規に取得し郷士となった（余談）。

その昔、その地域には料理好きで器用な人がおり、「器用やり」と呼ばれ、冠婚葬祭や講など大勢の客が集う行事の際、皿鉢料理に腕を振るっていた。

刺身などを盛合せた皿鉢料理は土佐の郷土料理として庶民に定着したものである。これは一つの大皿の料理を分けあって食べることによって、連帯意識や仲間意識が養われたのであろう。我がご先祖は以前が藩の料理人であったことから、その腕を見込まれ「器用やり」として地域の人達に重宝されていたと思いをはせる。

我が家の料理人は私と妻である。朝食は二人で作り、片付けは私、昼食（コロナでなければ散歩を兼ねて近くで外食することが多いが）は主に妻、片付けは私、夕食は妻が担当する。

私の料理といえば土佐伝来のカツオのたたき、カレー、かぶ、生姜の酢漬けである。若い頃は握り寿司などいろいろ挑戦したものである。私は料理が嫌いではない、半日位台所に立っていても苦にならない（デパ地下などは好きである）。

たまに一緒に食事する孫たちが喜んでくれば、こんなに嬉しいことはない。料理人の血が僅かながら引き継がれているものと自負している。

我が家には、先祖から引き継いだ土佐の大皿（直径四十一センチ、濃紺）があるが、久しく出番がない。しかも二〇二〇年来のコロナ感染防止のため、一つの大皿から料理を取り合うのを避けるのはやむを得ないことである。

早く穏やかな日常が戻り、寿司、刺身など大皿の料理を分け合う、楽しい小宴が我が家に戻ることを願うばかりである。



先祖から引き継いだ土佐の大皿

ボケ防止の大ボラ噺(その2)

山縣 正靖

昨年の『悠遊二十七号』に「ボケ防止の大ボラ噺」をご披露申し上げましたが、その二〇二〇年はコロナ禍に温暖化の大災害が加わり、まさに想定外、とんでもない年とはなりにけりでした。

さてボケ防止の大ボラ噺は、齢八十を超えてのボケ防止には、ひたすら好きなことをやれば良し。ただ同じ事を繰返すのではボケるので、やるのなら面白がつて少しでも進歩させようじゃありませんか、という自分への努力目標でした。

古来、人の楽しみには、絵描き、もの書き、歌うたい、海彦、山彦、光源氏とありますが、それらに沿って自分としては

- ① 今までやったことのない抽象画を描く。
- ② これまた初めての地経学予測システムの論文を書く。
- ③ 下手な川柳を進歩させるAI川柳を詠もう。

④ 多摩川で黄金の鯉をフライでだまして釣り上げる。

⑤ ゴルフは八十八歳にエージシューターになる。

との五つの大ボラを吹きました。

小生は弱い性格で、ついサボル癖がある。大ボラを公表しておく「あれ、どうなった？」とからかわれるやも知れず、サボリの退路を断つ想いがありました。

進歩があったか？一年後の決算は二勝三敗といった惨めなものでしたが、おのおの悟るところはあったので引き続き努力を重ねる所存です。なお、Yahoo! Japanで『地経学予測システム(試論)』を検索すると小生の駄作が読めます。興味のある方はご批評頂ければ幸いです。

今回も『悠遊』の挿絵の寄稿のお誘いを受けました。

まず古い商屋の挿絵は近くの旧甲州街道烏山下宿の古い建物です。日頃はボヤーと見ていたのですが、挿絵に描こうとよく見ると思いがけない発見がありました。屋根の形が城の天守閣に似ている、金の鯰こそありませんが鬼瓦が四方を睨んでいます。また延焼防止の壁が建物を護っています。この建物は昭和二十四年築だそうで、戦

災の教訓から防火壁を付けたのかもしれませんが。

このような旧街道沿いの古い建物はいずれ歴史の中に消え去っていくかも知れない。今のうちに『悠遊』の挿絵に残しておこう、と小生の努力目標に加えました。

次の古い帆船の挿絵はポルトガル東インド会社所属の高速武装帆船です。原画はポルトガルのコインブラで入手したのですが、小生のもう一つの趣味で古い帆船のラジコンモデルを作り実際に走らせるという訳です。結構手間がかかっている間に新たな発見がありました。この帆船はリスボンを発し、難所の喜望峰を回ったあと東インドを目指して航行し、さらに海賊の跋扈するマラッカ海峡をその高速と武装をもって押し渡り、織田信長の時には日本に到来していたそうです。信長は鉄砲と火薬、美酒など欧州の文明をもたらすポルトガルを歓迎し、キリスト教の布教も許していました。

このような、日本に画期的な変化をもたらしした帆船をラジコンモデルに仕立て、許されるなら『悠遊』の挿絵にしようと思いいちました。元寇の時の元の軍船、日本開国の先触れになった米国の捕鯨船、ペリー提督の率い

た黒船などが候補です。

さて我ら高齢者にとってボケ防止はコロナ対策と同じほど重要ですが、つくづくOBペンクラブに入って良かったと思います。多士済々の会員の皆様から楽しみのヒントや刺激を戴けるし、外出自粛のなかでもオンラインで盛り上がるなど、これ天国ですね。



ポルトガル東印度会社 高速武装帆船
(古い商屋の絵は裏表紙に掲載)

『失われた時を求めて』岩波書店版

吉田 眞人

岩波書店より刊行されていた、京大名譽教授の吉川一義氏の訳によるマルセル・プルースト『失われた時を求めて』全十四巻の刊行が、一昨年（二〇一九年）の晩秋に完了した。

小生が会社員生活を卒業して間もない二〇一〇年の十一月に第一巻が刊行され、又、ほぼ同世代の訳者（一九四八年生まれで小生より三つ若い）によるものもあったので、これも何かの縁かと購入し読み始めた。以来、毎年一―二巻刊行される毎に、十年間買い求めてきた。当初は、完了まで訳者の気力と体力が持つのか、又、読者たる自分の興味が持続するのか心配したが、無事完了したわけである。

この訳書は極めて親切な本で、多くの訳注と図版が添えられており、読者の理解を促している。

因みに、第八巻の構成は次の通りである。

全 622ページ、本文 543ページ

訳注 592、図版 31

訳者あとがき 42ページ、他に地図等々
又、最終第十四巻の構成は

全 612ページ、本文 303ページ

訳注 273、図版 7

訳者あとがき 35ページ

全巻を通じた人名索引、地名索引、引用作品索引

267ページ

大変な労力を掛けていることが判る。さすがに岩波書店ではある（小生は、「右巻き」なので、同書店の本は基本的には買わないのだが）。

では、何が書かれているのか。何か格別な事件が起きたり、起伏のある物語が書かれている訳ではない。ドイツ流の Bildungsroman（教養小説：主人公がさまざまな体験を通して内面的に成長していく過程を描く小説）ではない。書かれているのは、主人公である「私」の幼少期から晩年に至る様々な記憶である。ベル・エポック

(十九世紀末から第一次世界大戦勃発までの、パリが繁栄した華やかな時代) の上流階級(華族や上層ブルジョアジー)が集うサロンの様子や、幾つかの恋愛模様が延々と描かれているに過ぎない。

併し、読んでいると何故か安心感を覚える。かつて憧れた西洋の(というかフランスの)教養主義が頭の中に流れ込んで来るような気がするからなのか。

この本の底流をなすのは「無意識的記憶」である、と言われている。さらにその基本は次のような認識論である。人が、ある物やある人を理解していると考えているものの内実は、実はその物やその人そのものではなく、人がその物やその人に自らが(勝手に)抱いているイメージに過ぎない。

蛇足ながら、この訳書では「mère」を「母」と「maman」を「お母さん」と訳している。この「お母さん」の響きが、少々しっくりしない。「ママ」では子供っぽ過ぎるのであれば、いっその事「mère」を「母上」、「maman」を「母」としたらどうであろうか、と考えたりしていると、

翻訳というのは大変な仕事だと言うことが良くわかる。(尚、窪田啓作訳のカミュ『異邦人』では、maman はそのままママンと訳されている)



「ペン俳句」で錆びない私に

宮原 由利子

コロナ禍の為に医療も経済も大事という、相反する問題を抱えている中、少しづつ旅行や飲食店などの規制が緩和されてきました。そんな中、コンサートや合唱の活動など芸術、音楽に関する開放が最後になっている事は残念です。

紀元前の壁画にも描かれているように、人間がおよそ文明をもつようになった時から、音楽は生活と共にありました。コロナ禍の為に、心が疲弊している時こそ演劇や音楽が必要だと思えます。

昨年はベートーベンの生誕二百五十年という事で、演奏会がたくさん予定されていましたが軒並み中止です。わが杉並公会堂のコンサートも中止になり、十月になってやっと開催されました。

この日は、小林研一郎指揮、日本フィルハーモニー交

響楽団の演奏によるベートーベン作曲「エグモント」と「英雄」でした。

久しぶりの演奏に、指揮者、奏者、聴衆が一体になり感謝と感動で、両手を高く掲げての大拍手でした。私にとっても、忘れられないコンサートになりました。

クラシック音楽に詳しくはないのですが、お気に入り、スメタナの「わが祖国」の中の「モルダウ」です。チェコ音楽を代表する名曲です。

二台のハープのメロディーで始まり、ピアノシモのせせらぎは憂いを運び、アレグロの大河まで川の流れの描写は絵画的で美しく、フルオーケストラによるクライマックスは壮観です。

このモルダウに似た曲で、箏曲の宮城道雄作曲による、「瀬音^{せおと}」という曲があります。宮城道雄は盲目の箏の奏者、作曲者で、「春の海」が有名です。「瀬音」はその五年前の大正十二年に作曲されました。十三弦の箏と低音の十七弦の箏による二重奏曲で川の流れの強弱を、二つ

の箏の掛け合いで奏でる美しい曲です。

若いころに箏を弾いていて、いつかこの「瀬音」を弾くことが私の夢で、目標でした。四十代になりいくつかの免状を頂いた頃が、ちょうど子供達の中学や高校の受験期に重なり、日頃の練習や毎年のおさらい会、合宿などが時間的にも経済的にも負担になり、一旦休止にしました。

いつか再開したいと思いつながら気がつけば数十年が経っていました。途中何度か再開はしたもののやはり無理になり、退職して時間ができた今年になってようやく箏の練習を再開しました。

ところが眼と譜面台との距離が微妙に合わず、また指も以前のように動きません。「六段の調べ」や小曲がなんとか弾けるくらいで、中伝や奥伝教師まで頑張った自分にとってはあまりに不甲斐なく、ついに断念することになりました。やはり「鉄は熱いうちに……」という事なのでしょう。

もう一つ再開したいと思っていた事に「俳句」があり

ました。数十年前に友人に誘われて俳句会に入ったのですが、仕事をしながらの作句は、時間にも心にもなかなか余裕はなく、名ばかりの会員の期間が長い間続いていました。退職を機会に、是非また俳句を再開できたらと思っていたところ、友人の真理子さんに誘っていただき、「ペン俳句」に入会いたしました。

頭も言葉も、思うように働きませんが、今度こそ長く続けていけたらと願っています。頭だって錆びているかも知れないと思いつつ。



ジョルダノ・ブルーノ

松浦 俊博

カンポ・デ・フィオリ。日本語に訳せばお花畑である。現在、ローマのこの広場にはその面影はなく、ほぼ一日中多くの人で賑わっている。午前には生鮮ものを買いに来る地元の人で、午後は土産物を見に来る観光客で、そして夜間は地元の人や観光客が広場を眺めながらレストランで食事をする。このように広場は時間帯によつて違う顔を見せている。しかし、その雑踏を全く気にせず一日中広場の中央に立つて、修道服にフードをかぶり気難しそうな顔つきで人々の動きを見下ろしている像がある。ジョルダノ・ブルーノである。彼の像は広場の真ん中にあるにも拘らず、気に留める人は少ない。さらに、台座の正面に書かれた辞、「時代を先取りしたブルーノ、ここに火刑で死す」に注目する人はほとんどいない。

私はローマに行けば必ず彼に「ご挨拶」に行く。ブルーノについては、「ガリレオが異端審問にかけられた時に、

ブルーノのように処刑されることを恐れて自説を撤回した」という程度しか知識がなかった。

彼はナポリ出身の修道士であり哲学者である。異端の嫌疑をかけられナポリの修道院から逃避して、フランスやイギリス、ドイツの各地で講演と執筆活動を行った。そして最後にヴェネツィアで逮捕され、ローマの異端審問で有罪となった。罪状は教義神学に反する教説ほか多項目にわたる。彼の像がこの広場に建てられたのは、処刑から三百年近く後の一八八九年であった。当時、イタリア統一をほぼ完成した王国と、教皇領を王国に併合されたローマ教皇とは対立していた。教皇レオ13世はフランスと組みイタリア統一の転覆を企てたと言われる。イタリアの民衆はその報復に、この広場に「自由のために殉教した反教権主義の象徴」としてブルーノの像をバチカンの方角に向けて設置した。

一昨年の年末、ローマ滞在時にブルーノについて何か新しい発見がないかとナポリまで足を延ばした。彼が育ったナポリにあるヌオーヴォ城や王宮、ヴェスヴィオ火

山を見るため地下鉄1号線に乗り通勤ラッシュを経験した。王宮に着く頃にはかなり疲れも出てきたが、入り口の正面に両シチリア王国初代国王のルッジェーロ2世、神聖ローマ皇帝カール5世、初代イタリア王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世などナポリ王国とかかわりの深い八人の王の像を見たときに疲れも吹っ飛んだ。

さらに、全くの偶然であるが、この王宮の中でブルーノに関する文書に遭遇した。「正義を越えた神話」という特別展を開催していた部屋に、ブルーノの裁判について手書きの記録が展示されていた。説明文には、十六世紀のヨーロッパにおける正義の適用と残酷な刑の執行、現在の人々に知らせるために公開したと書かれていた。記録は十七世紀に作られ、羊皮の表紙がついている。中の紙は薄く裏の字がはつきりと見える。初期の本はベージごとに紙のサイズが違っているので、ばらばらな感じを受けるが、書かれている文字の書体は最初から最後まで全く変わらず、鳥の羽のペンをさらさらと運ぶ書記官の様子が目に浮かぶ。

さて、この裁判記録だが、ローマで八十か月にわたって異端審問が行われた最後の部分の記述だという。もちろん書いてある言葉は分からないが、なぜ哲学者の彼を処刑しなければならなかったのか、そして処刑の様子はどうかだったのか、イタリア語と英語で簡単な説明パネルがあり、後から読むために写真に撮ってきた。それによると、宇宙は無限であり地球もその一つの星に過ぎないと説いたことが異端とされた大きな理由であった。また、処刑の様子について、彼の死まで見届けた人が記録し絵まで描かれていると説明文にある。彼はチュニクを着用し、見物人が処刑の様子をはつきりと見られるように彼の顔には固定装置が、首には本人確認のために名前が書かれた板がつけられていたということだ。

大発見のあとナポリからローマに戻り、再びブルーノに会いに行った。相変わらず雑踏をものともせず立っていたが、彼の名誉が完全に回復されたのはヨハネ・パウロ2世時代の二十世紀後半であった。異端の判決より名誉回復の決定の方がいかに勇気のいることかと感じた。

一 辺倒外交のつけ

首藤 静夫

日韓関係がうまくいかない。今に始まったことではないが――。

古代の朝鮮半島はご承知のように、百済、新羅、高句麗の三国鼎立が続いた。倭人は半島最南部から北部九州まで、対馬海峡をまたぐ「海峡国家」を形成、盛んに往来した。倭とは日本に限った名称ではなく、元来は東アジアの海洋民の総称だと聞いた。右の三国との民族学的な関連は知らないが大差ないだろう。お互いに交易を求めて親しくつき合っていた。

日本は百済との相性が良かったようだ。百済とはそれ以前の、馬韓と呼ばれた時からのつき合いだ。日本が中国に遣使する、中国の文物を輸入する時の仲介者として、あるいは半島の先進技術の伝達者として日本人にはなじみが深い。卑弥呼が中国に遣いを出した時も世話になったし、仏教も百済から伝えられた。

百済が隆盛のうちはそれで良かったが、新羅の勢力が伸びてきた。日本も百済とだけつき合っている訳にいかない。東アジアの政治情勢が大和朝廷に影響を与え始めた。

それが端的な形で現れたのが乙巳の変である。俗に大化の改新といわれる、中大兄皇子が蘇我入鹿を斬殺した事件である。六四五年のことだ。

時は蘇我氏の全盛時代。蘇我馬子、蝦夷、入鹿の本家は自らを大王おおきみと呼ばせたほどだ。蘇我より以前、日本は百済べつたりだった。百済の旗色が悪くなっていくのに朝廷外交は改まらない。そこで蘇我は政治パワーを発揮、百済、新羅、高句麗とバランスのとれた外交をめざした。それが百済一辺倒の中大兄と、百済から来たらしい中臣鎌足には我慢がならない。それで前述の暴挙となった。

蘇我本家はその後の『日本書紀』で悪者扱いされている。しかし勝者はいつの時代も自分に都合のよい史書を残す。蘇我氏は進歩的、開明的な政策集団だったのかも知れない。結局、朝鮮は新羅によって半島統一がなり、百済は

歴史の闇に沈んだ。蘇我氏の目は確かだった。

面白いのは乙巳の変のあとの日本だ。ご承知の通り中大兄皇子が天智天皇に、弟の大海人皇子が天武天皇となつて時代をリードする。この二人は本当に兄弟かと思うほど仲が悪い。外交政策も異なり天智は百済一辺倒、天武は蘇我氏と親しく新羅寄りなのだ。

『日本書紀』は天武天皇系の王朝とされる奈良時代に編纂された。それなのに天武と近かつた蘇我氏が悪者扱いされている。不思議だった。

キイワードは持統天皇と藤原不比等である。持統は天智の娘で天武の皇后だ。夫と二人三脚、壬申の乱を勝ち抜き、夫の天下取りを助け、今も明日香村の御陵に夫婦で眠っている鴛鴦と思っていた。ところが彼女は天武亡きあと自ら天皇となつて夫の政策を覆し、父の天智と同じく百済寄りに舵を切った。既に百済は亡びている。遺民を保護、登用したのだ。藤原不比等は天武の時代には見向きもされなかったが、持統によってあれよあれよと政權中枢に引揚げられ、『日本書紀』は彼の指導下にま

とめられた。

持統のあと、文武、元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、称徳（重祚）と天皇が続く。形の上では天武の一統なのだが、実質は持統一統といえる。元明は持統の実の妹、文武と元正は孫、聖武はひ孫なのだ。持統は天武の生存中は夫に寄り添うように辛抱を続け、夫の死後、巧妙に、実に巧妙に帝位を奪った。「書紀」の中でも父、天智の功績を持ち上げている。

奈良時代を通じて新羅との関係はギクシャクし、結局遣唐使の渡航ルートも危険極まる東シナ海横断に切り替えざるをえなくなった。

ところで彼女の腹心の藤原不比等だが鎌足の次男である。彼は天智天皇の隠し子で、鎌足に預けられたとの説がある。鎌足の長男は僧籍に入れられ、不比等が鎌足の後を継いだ。してみると、持統、不比等は実の姉弟で、二人して父の敵討ちとばかり天武の遺産を篡奪したのか。日本は戦後アメリカ一辺倒が続いている。アメリカが百済の二の舞にならない保証はない。さりとて……、さて、どうしたものか。

私の履歴書(2)―世田谷は終の棲家―

大泉 潤

世田谷の住いから西を眺めると富士山が見える。冬の快晴に恵まれると白銀を頂き、裾野を広げ堂々とした姿を現す。朝は東から白み始め、丹沢、武蔵の穏やかな丘陵、少しとがった山並みが南北に蛇行する。

ここ世田谷の地は、東京二十三区の一つで武蔵野台地にあり、南端は多摩川を隔てて神奈川県に接する。中世は地方豪族吉良氏の所領であった。大正時代からは住宅地として開けた。昭和七年東京市の拡張に伴い荏原郡、世田谷町などが合併して成立し、二二年特別区となった。主な数字を拾うと、面積約六万平方キロ、人口八十八万人、東京二十三区中最大の広さを誇る。全域を九地域に分けて管理している。特徴として、交通網が発達し、鉄道とバス路線が網の目のように張り巡らされ、都心、横浜、八王子などの都会に連なっている。その他の特徴として救急医療体制、情報網、文化設備などをはじめ

め、まちづくりセンター、相談窓口、健康、医療、福祉、子育て、スポーツなどの区民生活の活動の拠点が整備されている。また住み慣れた人々の感想として、第二の故郷であり、終生住み続けたいと思っているそうだ。その理由は、

一 自然が美しい。太陽、空気、水に恵まれ、朝目を覚まし空を見上げると、素晴らしい一日を寿ぐようだ。西には月が沈みつつあり、残光を家々の屋根に残していることもある。

二 人情が豊かである。世田谷は東京二十三区で人口八十万人と最大を誇る。多摩川に面し、肥沃な土地に恵まれ、農作物も豊かである。

三 従って食べ物が美味しい。野菜、穀物も豊富である。

四 どこへ行くにも便利。道路と交通機関が四通八達し、国内の主要都市のどこへ行くのも便利である。

五 歴史が豊か。

いずれも良いところばかりで終の棲家にしたいと思っている。

阿部典文さんを偲んで……

野瀬 隆平

同じ造船会社に勤務していた阿部さんと親交を深めたのは、同じ時期にミラノに駐在していた時である。今から四〇年以上も前のことだ。彼は単身赴任であったので、我が家で一緒に食事をすることもあった。

阿部さんの趣味の一つに山登りがある。ミラノは絶好の根拠地。独り身の気安さで、週末を大いにエンジョイされていた。仕事を終えて事務所から歩いて五分のミラノ中央駅へ向かえば、その日の内にスイスの山の麓にあるホテルに入れる。彼の案内で、我が家の家族もハイキングに連れて行ってもらったこともある。

（下の写真は、その時の一枚）

退職したあと、たまたまクラブの話を阿部さんにしたところ、興味を持たれ、入会されることとなった。二〇〇九年の夏、今から十一年ほど前のことである。

あとはご存知の方も多いと思うが、「何でも書こう会」

で個性のある作品を続けて披露された。第二回の熱海の合宿にも参加、お酒はあまり飲めないが、話題が豊富で愉快的語り口で場を和ませる人であった。

八〇歳を過ぎてからの健康状態は、万全ではなかった。二〇一八年の『悠遊』に、自身の健康について次のように書いている。いくつかの病気を抱えていることを語った上で、「……万全の注意を払い健康寿命を延ばす所存である」と。

しかしながら、昨年七月残念ながら、その生涯を閉じられることとなった。享年八十六。

天上より想い出の多いアルプスの山々をゆつくりと眺めて下さい。



最近のクラブ活動より



Zoomで「何でも書こう会」 福岡の木村さんはご夫婦で参加



コロナ直前の鎌倉合宿 再開が待ち遠しい！

創作短編



水彩 首藤 静夫

室原川の螢

大塚 喜子

午後四時になる。広島から乗った高速バスは、国道432号線が渋滞しなければ昼過ぎには奥出雲に着く予定だった。バスを降りて、いつもなら数台待機しているタクシーを手配するのにも難儀した。

大矢ひろ子が思わず運転手に愚痴ると、

「そりゃー悪かったがあ。なんせGOTOトラベルで京阪神からのお客さんが大勢で来なさったで、たたら刀剣館と、鬼の舌震いは大層な賑わいじゃったワァ」と出雲訛の初老男のズーズー弁に付き合うことになった。

姑から青い柿の実が描かれた絵手紙を、三月に受け取った。(顔を見せに来てください)と書き添えられていたが、コロナ禍を理由に無沙汰を重ねてしまった。明日は二人で庭の柿落としをすることになるだろう。

「あの四辻を左と言いなさったナ」。バックミラーの中

で運転手とまた目が合った。

「ええ図書館の裏の道をお願いします」

「じゃア、大矢さんとかいナア」。古い家に一人で暮らす姑を知っているらしい。ひろ子は小さく頷いた。風が出てきて雲の流れが見て取れる。今晩は仲秋なのだ。

「足元に気いつけて、転ばんようにナア」。腰を庇ってぎこちないひろ子の様子を見ての、おざなりでない言葉がけが嬉しかった。

玄関灯がついているのに、押したベルに反応がない。

「こんばんは」ひろ子の声は暮れかけた闇に吸い込まれるばかりだ。仕方なく枝折り戸を押して田んぼの横手から庭に廻った。ここを通るのは夫の十七回忌の法要で、去年の田植えの後に新婚間もない娘夫婦と訪れて以来だ。あの時、娘夫婦は田んぼの脇を流れる室原川(斐伊川の支流)の螢の群生の中で、抱き合って歓声をあげていた。遠目で其れを見て、姑が涙を拭いていた。

「こんばんは…ひろ子です」。縁側から上がってもう一

度呼んでみた。電話の呼び出し音がして、居間に急いだ
が、音はブツリ切れて、それっきりだった。

廊下の突きあたりにある台所の戸口から漏れる光が、
微かに揺れている。床の軋む音に耳についてくる。

「誰かいるの？ お義母さん？」

ひろ子は身構え佇んだ。開けようか、迷いながら戸を
開けて、台所の明るさに息をのんだ。

天井近くの大きなはめ込みの素通しガラスから、仲秋
の明かりが差し込んで、台所全体が暖かい光に満ちてい
る。風に揺れる木の影が幾筋もの線になって、壁や床で
も優雅に艶めかしく揺れている。

二度目の電話が鳴ったが数秒で切れて、それっきりだ
った。

不気味さを拭いきれないまま縁側に立った。遠くの船
通山がクレヨンで描いたように鮮やかだ。池で鯉が跳ね
て静寂を破った。

「誰じゃ。又鯉を盗みに来よった！」

「あ、…お義母さん…ひろ子ですよ」。サツと雲が動い
て月明かりが姑の険しい顔を映した。無言で居間に入っ

た姑に、ひろ子は従った。

挨拶もそこそこに、姑は忙しく小引き出しを開け閉め
している。何かを探している風でもなさそうだが、ひろ
子が目の前にいるなど全く意に介していない。

「お義母さん」躊躇いながら呼びかけた。姑は姿勢を
変えてひろ子に向き合うと、

「国男を早死にさせてもーて。アンタがちゃんと見ち
やれば、あげなことにはならなんだに」

「お義母さん、国男さんの急死はどうにもならなかつ
た事よ」

「一人息子なんじゃよ。アンタが殺したんじゃ。返し
てーな、私の息子を」

「お義母さん。国男さんの十七回忌もすんだというの
に今更、何を言い出すの。あの人は旅行先で亡くなった
の。露天風呂で倒れたと、何度も医師や警察から一緒に
説明を聞いたでしょ」

涙と洩を交互にすする姑を、ひろ子は冷めた目で見て
いた。こんな事をぶつけるために呼び出されたのなら、
今すぐに席を蹴って広島に帰りたい。

楽しそうに歩く夫の後姿を、「土産を待っているわ」と言いながら娘と手を繋いで見送った。

何が組合旅行だ。半年前に飲み屋で知り合った女との二人旅だったと知って、夫を恨み、女を憎み、自分を責めてどれほど煩惱したことか。

「とにかく国男を殺したんはひろ子さんアンタじゃ」

言い終わると、立ち上がって手洗いに行き、戻るとストーブの前に身を屈めて、姑は居眠りを始めた。

「お義母さん、風邪ひくわよ。寝巻に着替えてください」

「ああ！ ひろ子さんは優しいね。そんな優しいこと言うてくれる人はおらん」。先ほどの勢いはどこへやら、姑は目を細めてひろ子を見上げた。

近所付き合いを何より大切にしながら暮らしている姑だつて寂しいに違いない。優しい言葉をかけたわけでもないのに、よほど嬉しかったと見える。嫁を「人殺し」と言い放ったことなどすっかり忘れている。拘るひろ子が大人げなかったかもしれない。

戸惑うひろ子を遮って、目を覚ました姑の上ずった早口が被さった。

「茶飲み友達もおるし、今更、一緒に住んでーなどは言わんからアンタは心配せんでええ」

「今日は寄り合いにでも行つていたの？」

「何処へも行つたらん。ずっと家におったよ」

「お義母さんが出かけている間に何回か電話があつたわよ」

「アア電話ね」

「え？ 知つてたの？ 二階にいたの？」ひろ子は膝を乗り出して姑に食らいついた。

「なして睨んどるンだよ。わちは何も知らんのじゃけん。あんたが来るのに、留守にはよーせんわ」

「お義母さん、どこで何をしていたの？：お願いだから教えて」。ひろ子は姑ににじり寄った。気迫に驚いて姑は肩をすばめてポツリと呟いた。

「お上から十万円もろたから、スマートホン買ったんや。電話をかける練習しとったんや」。いいながらポケットからあずき色のスマートホンを差し出した。待ち受け画面に、県庁に初登庁した時の凛々しい国男が写っていた。姑は居眠りの続きを始めたが、ひろ子は心ならずもあ

の当時の自分を思い出した。

始めはそんなつもりはなかった。受話器を強く耳に当て、息をつめて無言を通した。鬼の形相の母親のスカートを小さな手がしっかりと握っていたが、娘の事は眼中になかった。

「もしもし、もしもし」受話器の向こうで繰り返される爽やかな声を聞いて、ひろ子は言葉を失った。

この声で、女は夫と何を囁き合ったのか？ 電話をしている自分が惨めで愚かしくて、やりきれなかった。日増しに強まる嫉妬心に殺意すら加わった。愚行を続けた末に嫌悪感だけが残った。

年上のあの女は無言電話の主を見破り、冷ややかに眺めていただろう。瞳に涙をため、母親を見上げる娘がいなかったら、ひろ子は更に落ちていったに違いない。

スマホの待ち受け画面の息子に電話をかけ続けて、挙句に、嫁を非難する姑など可愛いものだ。ひろ子は居眠りする姑に毛布をかけながら、醜かった、かつての自分を見ていた。

「寝とりやせんよ。やっぱり国男はあんたに殺されたんじゃ。あんたが普段からちゃんと見ちゃれば、気づいちゃれば、国男はあげなことにはならなんだよ。アンタに殺されたんじゃ。せやろ。ちゃうか？」。椅子に座り直して、思い出したようにくり返す姑の言葉を遮って、流し台に立った。

娘を育てるために広島自動車部品工場で必死に働いてきた。ひろ子が体調を崩すと、姑が駆けつけてくれて、娘の世話をしてくれた。米や金銭の援助もしてくれた。だから娘は大学を卒業できたし、幸せな結婚もできたのだ。

長い年月をかけてようやく女の事も、夫の事もひろ子の執着から殆ど消えたというのに。

最早、欄間から月明かりは差し込まず、窓の外の暗闇には蛍の乱舞が見えるだけだ。

「そげに水を出したらあかん。茶碗を洗っただけじゃろ」

「目が覚めたんですか？」

「寝とりやせん。やっぱり国男はあんたに殺されたんじゃ」

椅子に座り直して、思い出したようにぶり返す姑の話を、これ以上は聞きたくない。

「いやに改まってどげな話じゃ？」

ひろ子は姑を腰掛けさせて、姿勢を正した。

「お義母さん。私の話をよく聞いて」。ひろ子の声は明確だったのに、次の言葉が出てこない。口をついて出たのは情けない……。

「今年は柿を何キロ収穫できるかしら？ 明日は一緒に柿落としをしましょうね。干し柿を作りましょうね」

姑はひろ子に見向きもしないでガラス戸に額をあてて螢に見入っている。螢は室原川の川沿いを東に西に田の畔に沿いながら乱舞している。

「わちも来年は曾孫が抱けるかも知れんネ……」言いながらよめいた。ひろ子が咄嗟に手を添えると、姑はその手を強く握って放そうとしなかった。

月はすっかり位置を変えて船通山の向こうでかがやいている。

たたら遣構しかないこの奥出雲で、ひろ子に出来る仕事が見つかるだろうか？



鼻飾りの男

内藤 真理子

ペルー・リマのホルヘチャベス国際空港に着いたのは、深夜の十一時二十五分だった。成田を出て二十三時間。着くと同時に飛行機の中で拍手が起こった。南国ペルーの国民性なのだろうか。

その日は空港に隣接したホテルに泊まった。

部屋のカーテンを開けると、二階建ての細長い空港ビルが見え、その向こうには、砂漠のような土地が広がっているのがうつすらと見えた。

自分がこんなところにいるのが不思議だった。きっと、母が背中を押してくれたのだろう。

「私が死んだら、お金を残してあげるから、あなたの好きなものを買いなさい。全部旅行に使っても良いのよ。お金は、使ってくれる人が好きなのよ、使えば又、巡ってくる。だから私があげたお金は、老後のために残すとか、節約して使おうとは思っては駄目よ」

引っ込み思案でドケチな私に、母は昔から口癖のように言っていた。その母が九十歳で亡くなって、約束通りお小遣いという名目で何度も海外旅行に行かれるほどのお金を遺してくれた。

私は六十歳。新聞にペルー旅行の宣伝が出ていた。

行くんだったら今しかない！ 決死の覚悟でツアーに申し込んだ。

ペルー観光の初めに首都リマの旧市街地にある黄金博物館に行った。ツアーの人数は三十人位でほとんどがカップルか友達同士。私のような一人参加は四人だった。博物館には、金銀の装飾品など千年以上前からの埋蔵品が、修復され展示されている。

順に見て行くと、顔を赤く塗り、鼻飾りをつけたミイラの写真があった。色彩豊かな服の上に、金を平らに伸ばしたものを縫い付け、ネックレスをジャラジャラとつけた男性で、装飾品は魔除けだと書いてある。又、金を伸ばして作った袋を胸の前に下げている。その袋の中には葉っぱを入れ、それを、パラパラと撒いて吉凶を占っ

たり幸運を願ったりしていたそう。

「私の母も黄金や占いが好きだったな」と思っ
てしばらく立ち止まっていたら、そのミイラの落ち窪んだ
空洞のような目が私を見ているような気がした。

「この写真、やけにリアルですね、生き返って来そう」
いつまでもボーッと写真を見ている私に一人参加の早
川さんが同調してくれた。

早川さんは新聞記者だったそう。

お昼に行った食堂にも同じ写真が貼ってあって、近く
にいた早川さんと思わず顔を見合わせた。食堂では添乗
員の計らいで一人参加の四人が同じテーブルを囲むこと
になっていた。昼食はエビのスープとペルー風焼きそば。

一番年長の早川さんは、

「新聞社を定年で辞めてすぐに、脳血栓で右半身が動
かなくなったのですがね、回復しまして旅行にまで来ら
れるようになったのですよ。夢のようです」と自己紹介
をした。背が高く、がに股で歩く姿は飄々としている。

高木さんという女性は、私と同じで独身。公立中学の
先生をしていたそう。私と同年輩かな。

もう一人が、五十代の無口な、陸田と名乗る男性で、

「自分は自衛官をしています。休暇を取ってこのツア
ーに参加しました」と言ったり、一人でビールを飲ん
でいる。高倉健に似たイケメンで、成田からヒュースト
ンまでの飛行機で隣に座っていた人だ。私は三人席の窓
際だったのだが、この人は、ずーっと飲んでた。CAが
飲み物を聞きに来る度に、曖昧に私を指さしながら、ビ
ールやウチスキーを二つずつ注文して一人で飲んでた。

早川さんが食堂の写真を見ながら、

「この写真は存在感がありますね。見られているよう
な気がする」と言うと、高木さんが、

「私も惹かれました。これは千年以上前のインカ帝国
の身分の高い人ですよ。装飾品をたくさん身につけてい
るでしょう」と思い入れたっぷりに言い「でも気味が悪
いわ」と付け加えた。私もさつきから、肩でもつかまれ
そうな殺気を感じていたのだった。

ツアー三日目、リマから更に約一時間飛行機に乗っ
て、かつてのインカ帝国の首都、クスコに到着した。山
の斜面に「VIVAPERU」の文字が出迎えてくれる。

標高三千四百メートル。空気が薄く頭がくらつとする。

ここで一泊。このホテルにも、あの鼻飾りの男性の写真が飾ってあった。ツアー一人参加の四人は、写真を話題にだんだん打ち解けてきた。

四人は誘い合わせて早朝の散歩にでた。おしゃべりをしながら歩いていると、通りの反対側にいる物売りの女性に、日本人観光客がカメラを向けている。

陽に焼けて黒光りをした顔のその女性は、チリチリの黒くて長い髪の上に果物かごをのせた自分のことを指さしてから、両手の指を全部開いた。

「写真のモデル料は十ソル」と言っている。

観光客は身振り手振りを交えて日本語で、

「ごめんよ、何も持っていないのだよ」と言う彼女、民族衣装のギャザーがたつぷり入った、ひざまでの丈のスカートをくねらせながら、気の良い笑顔でポーズをとった。交渉は成立したようだ。

それを見ていた早川さんが、

「財布も持たずに散歩する奴なんか、いやしねーよ」
気の良い物売りの肩を持ってつぶやいた。

その時だった。

絵から抜け出して来た鼻飾りをしたミイラが物売りの側で胸の前に下げた金の袋の中から乾燥したハッパを取り出して早川さんの方にふわっと撒いた。

次の瞬間、緻密な石造りのクスコの町は古代の人であふれていた。何故か私の母までいた。

その光景は、疾風の如く映し出され、四人だけが体感したものだろう。ほんの一瞬の出来事だった。

「あー、目に見えない何かのお陰で、私は今ここにいるのだ」と体全体で感じた。

旅の最後に行った朝もやの残るマチュピチュの全景は、まるでおとぎの国に足を踏み入れたようだった。少し登ると見張り小屋があり、一気に視界が開け、谷底から山の頂きまで続く広大な石組と、そこに広がる緑の段々畑。峻嶒な頂きには石造りの家があり……。

どこから鼻飾りの男が見守ってくれているみたいね。一人が言った。鼻飾りの男はもう気味が悪くも怖くもなかった。

「ペン」活動を楽しもう！ 【会員募集】

企業OBペンクラブとは

性別年齢を問わず、「書くこと」「読むこと」「撮ること」に興味ある人たちの集まりです。企業OBと冠してありますが参加制限はありません。作品を持ち寄って楽しみ、感想交換を楽しむ人たちの集まりです。会員だけで自主運営されています。できた作品は当会のホームページで一般に展示できます。月例会と分科会で構成されます（詳細は「企業OBペンクラブ」で検索して下さい）。

月例会 各ジャンルの月間活動を紹介しあう他、ゲスト講演・会員講演、音楽・ビデオを楽しんでいます。

分科会 「800字で何でも書く」「エッセイを書く」「掌編小説を書く」「俳句」「川柳」「フォト句」（写真に句をつける）「写真」「文芸作品を読む」「英語を読む」「時事問題を語る」。いくつ参加しても自由です。

懇親会 会の後はたいいてい懇親会です。これを楽しみに、という人もいます。

活動場所

東京・代々木にある「国立オリンピック記念青少年総合センター」で主に活動（現在はZoomが多い）。

入会金、年会費

入会金はなし。

年会費は一万五千元。但し、首都圏以外は一万円。

初年度は入会時期により減額。

月例会、分科会見学

大歓迎です。無料です。

希望される方は事務局長宛にメールでお願いします。

(kgobpenclub@gmail.com)

入会希望

右記同様に事務局長宛メールでお願いします。

Zoomで活動 コロナ禍で活動が制約されます。

月例会・分科会とも、Zoomによるオンライン活動を行っています。全国どこからでも参加できる便利な機能です。

活動報告



油彩 福本 多佳子

何でも書こう会

昨年の「何でも書こう会」は、突然のコロナウィルス襲来によりオンラインブックセンターが閉館となり、二月末を最後に開店休業の状態に陥ってしまいました。

この間やむなく「会員談話室」「リレー随想」「エッセイコラム」などにより、画面上でエッセイを発表しながら凌いでおりましたが、関係者のご努力により五月末、Zoomを用いた書こう会に初挑戦して、見事成功いたしました。

実施にあたって種々ご協力いただいた皆さんに深甚なる謝意を表したいと思います。

その後Zoomによる書こう会が定着してきましたが、十月になり、もうそろそろ良からうということで、久しぶりにオンラインブックセンターに集まり、Zoom併用にチャレンジしたところ、これまた成功。月に一度はこれで行こうかと張り切っていた矢先に第三波がやってきて、昨年末現在、元に戻ってしまいました。

このように昨年は予期せざる事態に遭遇して、会の運

営が懸念されましたが、結果的にはZoomのおかげで遠隔地会員の出席も可能となり、毎回多くの方が参加されるようになったのは、望外の成果でした。

作品の題材としては、天文学、自然科学から、応用技術、政治、経済、芸術、宗教、哲学と森羅万象にわたり、いっぽう日々の生活の中から、食談、酔談、粹談等々、また時節柄、コロナに関するものも多く見られました。

皆さん、外に出られなくなったかわりに、日頃思われることを筆にしようというお考えが表れているのではという気がいたしました。

これからも「何でも書こう会」の原点に立ち返って、いろいろなテーマについて、分かりやすくて確な表現と構成を追求し、皆でワイワイ言いながら切磋琢磨していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(プロマネ 大森海太)

掌編小説勉強会

コロナ感染症の拡がりの懸念があったので、三月のオンラインピックセンターでの開催（作品募集を含む）を急遽、中止した。その後、会場での開催を望む声もあつて開催を予定したものの、感染状況からやむをえずZoomを使つてのリモート方式に切り替え、リモートを継続した。この形式での参加が難しいメンバーもいて、参加者が限定されたことは残念だった。また、勉強会後の懇親会を楽しみにしているメンバーには物足りなさがあつた。計五回の開催で三十八作品が投稿されたが、時節柄、コロナを題材にしたものもいくつか見られた。

投稿作品を紹介する。（作者五十音順）

「マレーシア讃歌」内田豊文 作

異国での工場建設に携わったサラリーマンの苦勞話。

「女たちの審判（十八歳の恋）」大塚喜子 作

人妻に恋した男の話。強い女と不甲斐ない男の対比。

「分水嶺夫婦」小道周帆 作

旅先でいろいろな夫婦に会い、夫婦とは？と自問自答。

「ボルちゃん」喜多川雅人 作

主人公は帽子。帽子の持ち主の行動が描かれた作品。

「刺青」今日あした 作

温泉宿で見た入れ墨の女。女の辿ってきた数奇な人生。

「迷い」とんだ玉三郎 作

コロナの感染が怖く外出自粛、悶々とする老人の姿。

「悩める商社マン」中村アキヤ 作

海外での会議に赴く商社マンたちのドタバタ劇。

「小説機関投資家」野上浩三 作

日本経済の実態・変遷の模様を綴った経済小説。

「シンギュラリティ」廣澤重穂 作

過去、現在、未来の世の中、目に移った未来の姿。

公開サイトに二十五作品が新たにアップされた。

（プロマネ 児玉寛嗣）

サロン21

昨年は、ご多分に漏れず当分科会もウィルスの影響を受けて、三月から九月まで活動を休止するのやむなきに至りました。状況の改善が見通せない中で、オリンピックセンターでの会合は暫くあきらめ、オンラインでの開催を十月から実施しています。

顔を合わせての談論風発ができず、また、放課後の反省会を兼ねての飲み会ができないのは物足りないのですが、オンラインなら遠方にお住いの会員にも、また、お出かけしにくい方にも参加いただけるメリットがあります。特に、福岡在住の太平さんにご参加いただき、従前どおりの熱弁を振るっていただき、当会の盛り上がりに大いに貢献いただいております。オンラインの長所も確認できましたので、当分の間はオンラインでの開催を続けることになりそうです。

開催いたしました各月のテーマは下記のとおりですが、激しさを増す米中の対決を受けて、日本はいかなる対応をとるべきなのかに関心が集まりました。

二者選択を迫られる中で、どっちつかずの曖昧な対応は許されるのか。安全保障は米国、経済は中国といった両天秤の対応は可能なのか、などなど米中対決の中の日本の立場を考える月が続きました。

更に、デフレの中で、ウィルスに直撃された日本経済の回復への施策、また、世界的に圧迫が続く言論の自由はいかにあるべきかについても意見交換をいたしました。二〇二二年も世界は激動必至です。引き続き、あるべき日本の針路について、議論し、勉強を続けていきたいと思っています。

二〇二〇年の各月のテーマとプレゼンターは左記のとおりです。

- | | | |
|-------|------------------|------|
| 一月 | 日産自動車の企業体質について | 上原利夫 |
| 二月 | 米中対決と日本の道 | 森田晃司 |
| 三月〜九月 | 休会 | |
| 十月 | 中国の脅威 | 大平 忠 |
| 十一月 | 表現の自由はどこまで許されるのか | 森田晃司 |
| 十二月 | 「CSISレポート」について | 下山健夫 |

(プロマネ 下山、森田)

ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

昨年はコロナウィルス感染症の対策、自粛という未曾有の騒動に極まる一年であった。『悠遊』が無事に発刊されることに大きな希望を得ている。OBペンクラブの運営維持に努めて下さった方々に感謝したい。

句座はメールによる句会を経て、Zoomを使ったオンライン句会に移行、三月の句会休会のみで一年を過ごし得たことは大きな喜びであり、プロマネはじめ参加者の熱意によるところが大きく、句の成果も大きかった。

オンライン句会ならではの嬉しいことに、子泉さんの五く七月の投句参加があった。二月には高橋由紀子さん、九月には宮原由利子さんをお迎えし、句会は昨年引き続き大盛況であった。本年度の退会者は、村谷たかしさん、田中水えさん。健吟を続けられることを願っている。十一月五日、明治神宮、代々木公園界隈吟行敢行。コロナ禍の中の熱心な活動を力強く思った一年であった。

向日葵の裏側ですと待ち合せ
水撒いて自粛自粛と日を過こす

西川 知世

人声の絶ゆる町中石叩き

百日をマスク放さず花カンナ

十六夜の雨片割れの耳飾り

神木の大楠秋の陽を孕む

.....

全天の虹に子の声届きけり

安藤 晃二

兵一人楡の若葉の駐屯地

楠の護る銅屋根の宮秋高し

奥多摩や千切れ雲浮き秋高し

叢雲や冬満月の天心に

一句目、声が届いたと詠い、子の元氣と空の高さを表出。三句目、今年の貴重な吟行句会の企画を担って、ものにされた句。大楠と葺き替えられた銅葺き屋根が美し

かった。五句目、自肅のせいか夜空が澄み渡り、天心に掛かる月がむらがり立つ雲の間に美しい。

星月夜逢瀬の胸の土耳古石
山眠る櫓の年輪ひとつ足し
来し方とベンチに浴ぶる冬日かな

藍と白折り目正しき夏来る

大泉 子泉

祓ふこと数多携え茅の輪くぐり

万緑を貫き若人ひた走る

梅雨晴れの西に輝く銀富士や

坂道を杖を突きつつ炎天下

一句目、黒潮の潮流から下五で鮮やかに初鰹に展開してダイナミック。四句目、深々と雪に覆われ冬眠しているようでも、幹の中では水が流れ生きる力を蓄え続ける櫓である。五句目では、日常のさりげない一瞬を切り取り人生を宜うおらかな句に仕立てあげている。

一句目、藍と白を空と雲と読むと、夏のはっきりした

日差しが見えてくる。四句目、梅雨の日々を過ごせば、

窓辺に散歩に富士を見つけることは嬉しい。首都圏に住

む多くの人にとって嬉しい富士山。二句目、五句目は日々

の健康への希求。ご健康の維持をなによりお祈りする。

田起こしの土黒々とハ高線

斉藤まさお

夏めくや書きかけの原稿用紙

青梅雨や捨てるつもりの文庫本

マスク顔寄せて練香火花かな

冬ざれや赤く錆びたる一輪車

浴浴と黒潮万里初鰹

大津そうかい

夾竹桃郵便ポスト錆びし家

並べられた句に、物に託す俳句の強さを思う。ハ高線の車窓の広々とした耕地。窓の辺に夏日を感じながらの

机の原稿用紙。手に馴染んだ少し色褪せた文庫本。花火に浮かぶ少しの不安感漂うマスク。誰かが乗っていた赤い錆の浮く一輪車。映像の組立てと感情の抑制が秀逸。

暁の気合裂帛はとどぎす

志村 良知

番とぞ妻指す蜥蜴石隔て

蛸のカノン罨す朝まだき

須走の富士のつべりと蕎麦の花

改札に吾を待つ人冬帽子

一、三句目、ほととぎすの声、蛸の声を感覚的な言葉で表現を試みる、良知俳句の特徴が見える。四句目、蕎麦の花が咲く初秋の富士山はインパクトが弱そう、蕎麦の小さな花が大景の中に美しい。五句目、寒さの中待合せの弾む心が伝わる。改札口という具体的な場所の効果。

畦塗れば潮の香甘き千枚田

首藤しずを

豊かなる石仏の里麦焼酎

深海を満月ゆるく生まれけり

旅立ちの駅のざわめき菊日和

鮭一本いきなり届く年の暮

一句目、畦を塗り終えたばかりの千枚田。旅心が起こる。

三句目、満月が深海から生まれると詠って、太古人の気分浸っている作者かも。四句目、今年は駅も一変して殺伐としている。こんな平和な駅を取り戻したい。五句目、中七の措辞がリアルで、喜びと戸惑いが句の俳味。

浅瀬渡る子のすね白し夏木立

高橋由紀子

夏陽さんさんソーラーパネルの空き家かな

霜ばしら庭踏み回る小さき靴

冬晴れや走り終えたる馬の湯気

帰途はみぞれジムのガラスのフラダンス

一句目、脛と具体的に表現したこととか細い子供の足を想起させる。木立から蟬声も聞こえてくるよう。四句目、馬場から戻ってきた馬から湯気が立つ。いかにも寒そうな大気。五句目、みぞれの中を帰る作者と、ジムの窓に見えるフラダンスの練習、現代の街角の佇まい。

立春や半音高き猫の声

田中 水え

ふつくと泰山木の花の自若

長雨にへの字を寄せる案山子かな

朝虹や海辺の町に市が立ち

軽石にかかとが笑ふ夏の宿

一句目、立春は体感ではまだ寒い、猫の声が半音高いと気づき春を感じている。二句目、泰山木は空に向かって大きく開く花、自若に頷く。四、五句目、旅が好きなの作者の句。今日一日の旅の始まりに心弾み、一日を歩きつくして宿に落ち着く。中七のユーモアに実感がある。

奔放に枝を伸ばして桜かな

内藤まりこ

カナヘビの胸を張りたる炎天下

更衣幼な児の手に万華鏡

あれは夢自分に云いし昼寝覚め

九十九折り窓に紅葉の十重二十重

一句目、桜に自分を重ねて希求しているのか、諾っているのか。三句目、「ころもがえ」と読む。下五の展開が素敵だ。夏服になった軽やかさと、光の渦は良く合う。五句目、一読、日光のいろは坂とか伊豆の峠などを思う。車窓に見える紅葉に挙がる歓声が聞こえてくる句。

春空をゆつくり混ぜる観覧車

長尾進一郎

虹立つや高速艇の目指す島

補助輪を取りて子供の夏終はる

窓越しの虫の音を愛で長湯せり

白鳥の突つく水面の輪の幾重

一句目、春空が効果的、中七の措辞で春の大気の少し水分を含んだ感じもある。三句目、自転車の練習に明け暮れた夏休み。自身を重ね、吾が子を重ねる人も。四句目、灯を暗くして至上の長湯。五句目、白鳥の嘴は大きい。水面をつつけば大きい輪が幾重にも広がる。

万緑や風土記の里のカレー蕎麦

中村 晃也

噴煙は雲に届かず夏薊

山頂に珊瑚の化石盆の月

北斗星冬波ブイを奪い合う

木の根開く炭焼き小屋に犬の声

一句目、風土記の残る地の緑とカレー蕎麦は現代の夏の気配を語る。三句目、太古、地は海から隆起したそう。夏蓬の育つ山頂の珊瑚の化石は太古のロマン。五句目、「木の根開く」が雪国の早春の季語。山木の周りの雪が解けて土がのぞくこと。雪籠り後の生活が動き出す。

新田ゆふき

春星を水面に映す地球かな
鳶高く逆白波の湖夕焼
月澄みつ叢雲わたる銀の權
枯色を分けて真白き霜の花
冠雪に襲を刻みて富士不動

一句目、春宵の星の映る水面を見て、自分が立つ地球に思いを巡らす。それほど美しい星影だったのだ。三句目、むらがり立つ秋の雲を月が渡って行く、銀の權を操りながら。詩的な句。四句目、枯れた草に霜が花のように降り積んだ。しんしんと寒い夜の華やぎである。

つり革の白き二の腕夏はじめ

宮原 ユリ

秋めいて少し重たき薬指

秋日和ひらりと通る改札機

晚通夜を一人帰り来星月夜

引きこもるコ罗纳で雨で大根煮る

夏本番ではない微妙な季節の移ろいを二の腕の描写で表現。二句目、秋の訪れを何で感じるか。いつもつけている指輪の重さに気づく、繊細な季節感。三句目、今様の改札機を通る時の秋の空気感を漂わせて中七は秀逸。五句目、引き籠っていても季節は過ぎ、日常も過ぎる。

.....

令和明く雲一つなき初御空

森田 元斐

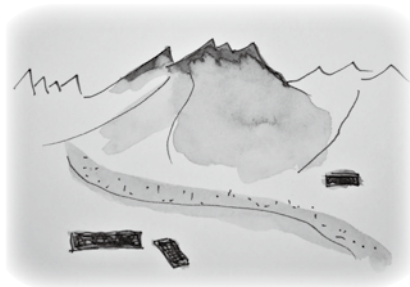
夏座敷自在に渡る宵の風

受け函に宅配一つ秋の蝶

寄せられし菰樽重ね神の秋

大木の空を狭めて秋の声

二句目、風がよく通る部屋は心地よい。中七によって風にとっても心地よい部屋だと表現している。三句目、今年は宅配の車をよく見かけた。玄関先の受函の包みに秋蝶が低く舞う。静かな町の風情。四、五句は吟行句。秋の声はしみじみと響いてくる心の感覚を表す季語。



ペン川柳

二〇二〇年はコロナ禍による制約で、ほとんどメールによる投句会になってしまい、勉強会後の懇親会も少なくなっていました。

七月には長く川柳会を盛り上げて頂いた岩崎さんがOBペンクラブを退会されました。しかし三月から曾山さんが新たに加入され、活発に活動しています。

また諸般の事情から川柳会会場は、オリンピック記念青少年総合センター内会議室に移しました。

ホームページ「川柳を詠む」の表紙を一新しましたので覗いてみてください。

今後ともペン川柳会のご支援宜しく願います。

以下ペン川柳子の活動をご紹介します。

【晃二】 うろへ

(安藤晃二)

「燃える」…怨念の振袖宙に江戸燃える

「水」…水商売伏兵に泣く歌舞伎町

「風」…浮世風遮断したのにまた開く

「傘」…傘忘れ名曲残すバカラック

「氷」…薄氷をそれでも踏むか深き業

江戸時代最大の「明暦の大火」は振袖火事とも呼ばれています。これを機に江戸の防火対策は一層強化されたようです。昨年の初めにはクラスター対策で新宿歌舞伎町が話題になっていましたが、今や飲酒を伴う飲食店が広く取り上げられています。「雨にぬれても」は西部劇『明日に向かって撃て!』の挿入歌で、バート・バカラックの作曲です。

【井波】 いなみ

(稲宮健一)

「燃やす」…燃やすなら古い恋文今のうち

「水」…億ションもゲリラ豪雨で水浸し

「傘」…すわ豪雨傘など放ってそれ逃げろ

「熱」…密恋し寂しく熱唱フェンス立て

「熟」…熟れる前摘んだ連れ合い枯れた今

投句に細かなコメントをいただき、世話人は助かります。時の事件から家族問題まで幅広い話題で、川柳会を

楽しませています。二〇一九年の大雨では多摩川沿いの
タワーマンションで水没したところもありました。自由
にカラオケで歌える日が待ち遠しいです。

【不言^{ふげん}】

(岩崎洋一郎)

「火」…戦火知る世代も消えて再軍備

「水」…澱む水そろそろ政府も浄化せな

「歩」…卒寿越え歩くことすら卒業し

「風」…風立ちぬ裾^{すそ}氣にする娘^こ今や無し

「傘」…相合傘ビニル傘では風情無し

ご高齢により七月OBペンクラブを退会されました。

投句はいつも一番乗りでした。何か月か先まで詠んで、
準備しておられたようです。ご貢献有り難うございました。

政治・社会問題を鋭く詠んでいます。一方若い世代の
最近の風潮に嘆きもあるようです。

【だし】

(大野 暉)

「燃やす」…燃やしてもまた燃やしても消えぬ過去

「水」…水道水いつの間にやらフランス製

「歩」…徒歩五分歩いてみれば十五分

「傘」…傘させば巧い具合にディスタンス

「足」…足り過ぎて八十七歳老衰死

(一月)「燃やす」と(五月)「歩く」が最優秀句に選

ばれました。「水」のフランス製は、フランスの水メジ
ヤーのことを詠んでいます。「歩く」は不動産広告で時々
遭遇します。ソーシャルディスタンスを維持するため、
傘の使用を勧める動きもありました。

【火酒^{ウイソカ}】

(三 春)

「水」…禍福とはコロナ嬢との水入らず

「歩」…肩で風いまは歩くに息を切る

「傘」…夜目遠目傘にマスクの美男美女

「熟」…淡柿が熟柿妬んで酒浸り

「氷」…薄氷を踏んだ浮気でヒビ入る

二〇二〇年の川柳会で優秀句に選ばれた数は、圧倒的
に一番でした。その中でも投票数の多い句を選びました。
(五月)「歩く」では最優秀句に選ばれました。いつも感

性のある句を詠んでくれています。句のリズム感も抜群です。「コロナビール」はコロナのお陰で一時生産停止に陥ったようです。

【^{めいて}酩帝】

(曾山清徳)

「火」…返納後乗り替えるのは火の車

「歩」…悔しいが前歩く妻追いつけぬ

「風」…給付金風と共に消え去った

「風」…妻の過去風の便りに聞く怖さ

「傘」…傘杖に色街急ぐ八十路かな

三月加入の新人ながら、生活感溢れる川柳のセンスは抜群です。「返納後」は運転免許証の返納でしょうか。初参加初優秀句です。「風」の題では、新人特別奨励賞で二句優秀句に選びました。また投句会ではいつも素晴らしいコメントを寄せてくださり、メンバーを楽しませてくれています。

【^{すい}酔雅】

(西川武彦)

「水」…コロナさまおかげで一家水入らず

「風」…風当り外より強い家中の

「熱」…熱い仲歳重ねれば暑苦し

「足」…足を知る分からねうちに千の風

「氷」…水割りの氷も頼る宅配便

いつも軽妙な川柳で優秀句に何回も選ばれました。今回も(四月)「水」、(六月)「風」で最優秀句に選ばれました。安住の地である家の中が外より風が強いとは、どこへ行けばよいのでしょうか。しかし、反対に「コロナさまおかげで一家水入らず」とも詠んでいます。

【^{ウイスキー}我々好】

(浜田道雄)

「水」…水垢のごとき思い出身に纏い

「熱」…熱気避け日傘で杖つく老いた伊達

「熱」…熟女なのうそぶくけれど実は古希

「足」…選挙前代議士手をすり足をすり

「落」…マスク美女落としてみたら獅子っ鼻

いつも鋭い句と批評は、川柳会を盛り上げています。「足」の句は小林一茶の「やれ打つな蠅が手をすり足をすり」からの発想です。昨年は選挙違反事件で随分話題

になりました。「口説き落としてマスクを取ったら、あゝあ！」は作者の嘆きです。

【酔深^{すいしん}】

(平尾富男)

「燃える」…情熱が燃えて失う自制心

「火」…火遊びが過ぎて労災(老妻)保険出す

「傘」…傘差して肩を半分濡らす愛

「熟」…熟し過ぎ味も落ちたし実も崩れ

「足る」…妻が言う足りた試しのない家計

代表世話人は(一月)「燃える」と(七月)「傘」で最優秀句を獲得しました。特に、「傘」の句は、情緒あふれる句ですね。いつまでも自制心を失うほどの情熱が燃える若さを感じられます。若い頃は、皆家計の苦勞をしてくれました。

【損得^{そんとく}】

(細谷 博)

「燃やす」…ゴミ減らせ燃やすと増えるCO₂

「水」…面倒は水に流してもう一杯

「傘」…おかげでも美人に見える傘の内

「熱」…熱々の仲でもマスクは外せない

「落」…落書きを億円かけて落札し

「落」の句は、一新した「川柳を詠む」表紙の最初を飾りました。英国のストリートアーティスト、バンクシーのことを詠んでいます。一億五千四百万円で落札された「少女と風船」落札後シュレッダーが作動し、一層有名になりました。

【零門^{れいちもん}】

(松谷 隆)

「水」…怖いものコロナ洪水小池知事

「傘」…男にも日傘差させる温暖化

「熟」…巣ごもりだ増える熟女のひとり酒

「足」…無駄足も我が人生の潤いに

「水」…角ハイの水減らせと客文句

二〇二〇年も多くの句が優秀句に選ばれました。(一〇月)「足」と(十二月)「水」は最優秀句に選ばれました。「足」の句など深い洞察が感じられます。「水」の句では、若い頃を思い出し賛同する声が多数ありました。コロナを巡るやり取りで小池知事の実在感を目立ちますね。

【明^{めい}迷^{めい}】

(八木信男)

「火」…火遊びが文春砲で火事になり

「水」…死に水に角を垂らせという親父

「熱」…熱中症エアコン代で命買う

「熟」…少女美女熟女と生きた完熟女

「氷」…説教で氷が溶けた若いころ

大阪から沢山の優秀句を投句しています。「火」の句は、東出／杏ちゃん事件をタイムリーに取り上げたもので、(三月)の最優秀句に選ばれました。「女」を四文字も連ねた「熟」の句も印象的です。氷が溶けるほど説教を受けた人は沢山いたと思います。

【安^{やす}兵^{べい}衛^え】

(山縣正靖)

「燃える」…白髪染め燃える男のいじましき

「風」…風の声トランプの耳ロバの耳

「熱」…春コロナ夏熱中症秋は何

「熟」…熟れ頃は腐る手前のそこが良い

「氷」…コロナ禍で世は氷河期へ逆戻り

時局を上手く取り上げ、賛同が多くありました。(八月)
「熱」と(九月)「熟」は最優秀句に選ばれました。秋もまたコロナ、更に冬もコロナとなりましたね。早く終息して、メンバーで飲み語りたいです。「腐る手前」は言い得て妙ですね。「そこ」とは「どこ」よと色々想像させました。

【拿^だ々^だ】

(塚田 實)

「火」…歳重ね鉄火肌より桜愛^めで

「水」…雲水はどんな水かと孫が聞く

「足」…人生で何度あったか勇み足

「落」…落ち目でもオレより辛い妻元氣

「氷」…薄氷を踏まず人生渡れるか

(十月)「足」は最優秀句に選ばれました。作者は勇み足を何とか潜り抜けて、今日あります。年甲斐もなく、孫に「行雲流水」と禪僧の話を、たつぷり聞かせました。会社人生では何度薄氷を踏んだか数えきれません。これからもペン川柳会を盛り上げるよう頑張ります。

(世話人 平尾、塚田)

ペン・フォト句会

年が替わって昨年皆様に使用していただいたペン・フォト句会百回記念のカレンダーが終了した。

毎日ではなくても、時折フォト句会のメンバーの力作が皆様の目に止まることで印象に残り、良かったと思っている。毎年この種のカレンダーを作りたいが、目立つ写真と素敵な句のついた作品が集まらないのが実情である。

令和二年はコロナの影響で全員が集まる機会が極端に減り、毎回の幹事は会場の予約や会終了後の懇親会の設定に苦労した。

フォト句の使用である写真を撮りに外出もままならず目をみはるような作品にお目にかかる機会も減少した。

ただし句の作成は上達が著しく、季語を上手く配して作品の品格をあげる風潮が定着したのは喜ばしい。

各人の代表作を挙げると

安藤さんの「夕映えに輝く並木冬はじめ」

大月さんの「密な場所ストレス発散蜜な時」

鋭い感覚で世相を睨んだ大越さんの

「歪みたる世こそ兜太忌石牟礼忌」

「コロナ禍や春夏秋冬巢にこもり」

松田さんの「夕立や七色の橋かけて去る」

池田さんの「ウーンきみはセレブになれる手相だよ」

清水さんの「初春の祈りに応え湖光る」

下山さんの「巢篋りや梅雨の季節となりにはけり」

常にウィットに富んだ句を作る三春さんの

「千円の床屋泣かせのモジャ頭」

「腐っても鯛ボケても十三夜」

写真も句も冴えをみせる長尾さんの

「夜間飛行目覚める頃は異国の地」

「空分けるジグソーパズル秋の森」

「お客さん冷やかしならば帰っとくれ」

オノマトベを上手に使った矢澤さんの

「シンシンと信濃の国の朝の雪」

「ハテハテと鴉も喰わぬ熟柿かな」

新年を迎えてプロマネもうかうかしてられないぞ。

(プロマネ 中村晃也)

英語を読もう会

英語文献（報道記事、論説が主）についてメンバーが輪番制でプレゼンを行い討論した。

開催月	題 名	担当名
1 月	Is China beating America to AI supremacy? Graham T. Allison, the Harvard Kennedy School (AI技術米中の戦い)	森田
2 月	No turning point in sight as IMF predicts sluggish global growth Reuters(Davos会議、IMF総裁による景気低迷予測)	安藤
3 月	コロナの状況により休会	
4 月	Crisis in the making? How coronavirus could impact the Chinese economy for years to come Asia Blog Brand (コロナ禍で中国経済はスタグフレーションに見舞われる)	森田
5 月	Why the Covid-19 coronavirus is so hard to kill WP(コロナは何物か、生態について詳述) A coronavirus survivor's story: 'I touched death' BBC news(英国人女性の死の床から生還のコロナ体験記) Ethanol plants seek rule changes to resupply hand sanitizer AP(米国のFDA規制による消毒液供給の問題)	安藤
6 月	Silent invasion Clive Hamilton(オーストラリアが中国に密かに侵食される) 富岡さんより紹介	安藤
7 月	The urgent quest for a coronavirus treatment involves door-to-door blood collection and a llama named Winter. Antibody treatments could be a bridge to a vaccine WP(リヤマを使った抗体治療薬の話からコロナ治療薬の一般事情等)	安藤
9 月	Why Buffett's bet on Japan could turn on higher inflation, weakening dollar Reuters(日本五大商社株に Buffet氏が投資、その戦略)	安藤
10 月	同上、加えてノーベル賞詩人 Louise Gluckの Snowdropsを翻訳コンテスト(野瀬、富岡、安藤が参加)	安藤
11 月	Why the Muslim middle east supports China's Xinjiang crackdown Adam Lammon, The National Interest (新疆ウイグル問題に対する中東諸国のスタンスの変化)	森田
12 月	China's influence in Japan everywhere yet nowhere in PARTICULAR Devin Stewart(CSISは米国の安全保障関係に注力するシンクタンク、中国の日本へ影響を与える努力とその限界を分析)	下山

何でも読もう会

この四月で満四年を越え、読む作品が変わってきました。

当初は漱石、芥川、谷崎はじめ有名文豪たちの本が続いていましたが、昨今は下記の通りユニークな作品を取り上げています。メンバーの年齢構成から、若い作家の作品が少ないのですが、無理することもないので自然流でやっています。毎月一回、十名ほどで読んでは感想を述べ合っています。男女の数が均衡して、感想が微妙に違うところが面白いです。

昨年はコロナ禍で思うような活動が出来ませんでした。試行錯誤してオンラインによる「読もう会」が始まりました。これも面白いのですが、終了後のワイワイ歓談会がないのが淋しい。それで青少年センターでやれそうな時は、それとばかり集まりました。女性軍の方が活発でした。

また、下記の通り持ち回りで、自分の好きなテーマを紹介する時間を設けています。「」の部分です。名作のあと

の新鮮な話題も清涼剤になっています。

二〇二〇年に読んだ本

二月 『日はまた昇る』

A・ヘミングウェイ

『英語で読む万葉集』

野瀬 隆平

三月 『工藤写真館の昭和』

工藤美代子

メールによる感想交換

四月、五月 中止（コロナ）

六月 サロン会（Zoom試行）

七月 『蕨野行』

村田喜代子

『工藤写真館の昭和』

工藤美代子

九月 『女たちの審判』

紺野仲右エ門

『十七歳の光源氏』

内藤真理子

十月 『戦争の悲しみ』

バオ・ニン

『能に見る小町伝説』

斉藤 征雄

十一月 『マチネの終りに』

平野啓一郎

『日本の叙情詩鑑賞①』

首藤 静夫

十二月 『螢川』

宮本 輝

『日本の叙情詩鑑賞②』

首藤 静夫

（世話人 首藤 静夫）

ホームページ関連

コロナ禍に見舞われた今年、我がホームページは、新規に掲載した作品数も読者のアクセス数も例年より多いという隆盛の年になった。

掌編小説の公開サイト掲載を開始して順調にスタートした今年であったが、三月にコロナ禍でクラブの活動拠点であるオリンピックセンターでの勉強会が不可能になってしまった。ここで知恵者が現われ、会員専用のチャットルームⅡ会員談話室にテーマを決めた短いエッセイを載せていくリレーエッセイを提唱し、複数テーマが平行して走り、三か月で約百五十編が集ってコロナ逼塞中の会員交流の場になった。

しかし、公開サイトに掲載する作品はオリンピックセンターに集まっただけの勉強会活動の成果である。会員専用サイトで盛り上がってばかりではいけない。

五月、昨年来続けてきたホームページ改革プロジェクト

トのメンバーからの提案と会員の新しいものに挑戦する意欲によりZoomが導入された。このために新しいパソコンを買った会員も一人ならずいると聞く。

やるとなったらすごい力を発揮する我が会員、各勉強会はそれぞれ独自の工夫を凝らしてZoomを電子メールや会員専用サイトと組み合わせて使いこなし、リモートでの勉強会活動を我が物とした。その成果が公開サイトに掲載され続け、今の隆盛というわけである。

改革プロジェクトの主導と会員諸氏の猛勉強の成果として、今年から長年の夢であった「エッセイの縦書き掲載」が可能になった。

日々進歩する「OBペンクラブ」のホームページの益々のご愛読をお願いするとともに、トップページにある「ご案内」と「活動予定」のご高覧をお願いし、お仲間になりませんか、とお誘いしたい。

(プロマネ 志村 良知)

クラブ活動を振り返って

二〇二〇年

(会員への敬称略)

一、役員

前年十二月に役員の改選が行われ、左記の新役員が以後二年間、会の運営に当たることになった。

名誉会長

西川 武彦

理事・会長

斉藤 征雄

理事・副会長(講演会、新年会担当)

塚田 實

理事・運営委員長、IT担当

志村 良知

理事・HP、渉外担当

松浦 俊博

理事・財務担当

大森 海太

理事・会計担当

長尾進一郎

理事・事務局長

首藤 静夫

事務局顧問

三 春

監事

清水 勝

二、年度方針

コンセプト「明るく楽しいOBペン活動」

1. 新規会員の獲得
2. 各プロジェクト・勉強会の一層の活性化
3. 月例会の工夫、活性化
4. ホームページの活用
5. インフォーマル活動の奨励

三、各月の活動報告

在籍数…一月一日現在 六二名

一月例会(十六日)

・新春特別公演「Russian Romance」

演者…ニキータ山下氏、後藤ミホコ氏

・新年会(十六日)

会員四十名、ゲスト十名参加

二月例会(二十一日)

・会員講演Ⅱ平尾富男『そろそろ終活!』

・第十二回「何でも書こう会」鎌倉合宿(十二、十三日)

熱海から鎌倉のKKRホテルわかみやに変更

出席者（二十三名）

三月例会（十九日予定）

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、開催中止

・新会員Ⅱ 曾山清徳

四月例会（十六日予定）

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、開催中止

・『悠遊』二十七号配付

五月例会（二十一日予定）

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、開催中止

・『悠遊』二十七号合評会も中止

・新会員Ⅱ 池松孝子

六月例会（十八日予定）

新型コロナウイルス感染症拡大を受け、開催中止

・新会員Ⅱ 鎌原俊二

七月例会（十六日）

・五ヶ月ぶりの例会実施

青少年センター（十五名）とZoom（九名）の

合計二十四名出席 例会にZoomを初導入

・会員講演Ⅱ 吉田真人『ドイツの日本村』

・退会Ⅱ 岩崎洋一郎さん

八月（夏休）

九月例会（十七日）

新型コロナウイルスの再拡大を受け、初めて全面Zoomによる例会実施（二十一名）

・会員講演Ⅱ 原田信

・『疑獄事件取材の断面』ロッキード事件取材メモ

・新会員Ⅱ 長谷川修、宮原由利子

十月例会（十五日）

青少年センター（十九名）とZoom（八名）の合計二十七名出席

・会員講演Ⅱ 池田隆

『最新のエネルギー・環境事情と山荘暮らし』

池田さんが、長野の山荘からオンライン遠隔講演

当会初の試みが成功

十一月例会（十九日）

青少年センター（十四名）とZoom（八名）の合

計二十二名出席

・会員講演Ⅱ松谷隆 『OBペン19年生』

十二月例会(十七日)

全面Zoom (二十名出席)

・会員講演Ⅱ首藤静夫

『神武東征はあつたゝ東征と水銀朱の関係』

・退会Ⅱ金京法一さん、鵜飼直哉さん、村谷卓一さん、

廣澤重穂さん、田中みづえさん

二〇二〇年は、会員数六十二名でスタートした。

期中、岩崎さんはじめ六名の方が、ご高齢その他の事情で退会された。

一方、本年は新たに六名の新会員を迎え、久しぶりに賑やかな一年となった。新会員の皆さんは既に会の活動に溶けこみ、楽しんでおられ、うれしい限りである。

特筆すべきは新型コロナウイルスの問題である。本年初から春先にかけて世界中に広まり、パンデミックを引き起こし、年末に至るも未だに猛威を振るっている。

当会の活動拠点のオリンピック青少年センターも数ヶ

月に亘って利用中止となり、会の活動に多大の影響を及ぼし、今日に至っている(年末現在)。

このため、年初の実行計画の幾つかが実現されず、残念である。

他方、このコロナ禍を機に、オンラインによる自宅でのPEN活動が拡充、嬉しい誤算となった。HP及び会員サイトへの投稿・アクセス数が飛躍的に伸び、オンラインによる会員相互の交流が活発に行われた。

その一環として、「Zoom」を利用したオンライン会合・オンライン勉強会もスタートした。五月に、書こう会と掌編小説勉強会にてZoomを初導入し、今や遠隔会員の参加も得て普通に利用されるまでになった。会員のPEN活動への情熱がひしひしと感じられる。

今後新しい取組みに挑戦しつつ、新しい仲間を迎えたい。

(事務局長 首藤静夫)



最近のクラブ活動より



俳句会は明治神宮に吟行



川柳会の奥湯河原合宿（コロナ直前）



復調なった
松谷さん
颯爽たる講演風景



たまには有志で歩こう会
下町散策後の打上げ（コロナ直前）



氏 名	主 な 活 動 分 野
田原 敬	書こう会、エッセイ
塚田 實	書こう会、掌編小説、川柳、絵
都甲 昌利	書こう会、エッセイ
富岡 喜久雄	書こう会、エッセイ、掌編小説、英読会、読もう会
内藤 真理子	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、俳句
長尾 進一郎	書こう会、俳句、フォト句、写真
中村 晃也	書こう会、掌編小説、俳句、フォト句、写真
西川 武彦	エッセイ、掌編小説、サロン21、川柳、写真
西川 知世	俳句、エッセイ
新田 由紀子	書こう会、読もう会、俳句
野上 浩三	書こう会、掌編小説
野瀬 隆平	書こう会、掌編小説、サロン21、読もう会、英読会、写真
長谷川 修	書こう会、エッセイ
馬場 真寿美	書こう会、エッセイ、掌編小説
浜口 須美子	エッセイ、写真
浜田 道雄	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、写真
原田 信	書こう会、エッセイ
平尾 富男	川柳、書こう会、掌編小説、サロン21
福本 多佳子	読もう会、掌編小説、絵
藤原 道夫	書こう会、エッセイ
細谷 博	川柳、エッセイ
松浦 俊博	書こう会、エッセイ
松谷 隆	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、川柳
松田 昌康	フォト句、エッセイ
三 春	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、フォト句、写真
宮原 由利子	読もう会、俳句、エッセイ
森田 晃司	サロン21、英読会、エッセイ
八木 信男	エッセイ、川柳、絵、会員談話室
矢澤 正二	エッセイ、フォト句、写真
山縣 正靖	エッセイ、サロン21、川柳、絵
吉田 真人	書こう会、エッセイ

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	主 な 活 動 分 野
浅井 壮一郎	書こう会、サロン21
新井 良侑	エッセイ
安藤 晃二	書こう会、英読会、俳句、川柳、フォト句、絵 他
池田 隆	書こう会、エッセイ、サロン21、読もう会、フォト句、写真
池松 孝子	書こう会、エッセイ
市川 忠夫	書こう会、英読会、サロン21
稲宮 健一	書こう会、エッセイ、川柳
上田 信隆	エッセイ、サロン21
上原 利夫	書こう会、エッセイ、サロン21
内田 満夫	書こう会、エッセイ、会員談話室
大泉 潤	書こう会、英読会、俳句
大越 浩平	書こう会、エッセイ、フォト句
大津 隆文	書こう会、エッセイ、俳句
大塚 喜子	掌編小説、読もう会
大月 和彦	書こう会、読もう会、フォト句
大平 忠	書こう会、エッセイ、サロン21、会員談話室
大野 昱	川柳、エッセイ、サロン21
大森 海太	書こう会、エッセイ
鎌原 俊二	エッセイ、英読会
川口 ひろ子	書こう会、エッセイ
川村 邦生	エッセイ
木村 敏美	書こう会、エッセイ、絵
児玉 寛嗣	書こう会、掌編小説
斉藤 征雄	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
清水 勝	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、フォト句
志村 良知	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句、写真
下山 健夫	サロン21、英読会、フォト句
首藤 静夫	書こう会、読もう会、俳句、絵
杉浦 右藏	エッセイ、サロン21
曾山 清徳	英読会、川柳
高橋 由紀子	俳句

▽二〇二〇年は激動の年として長く記憶に残ることでしょう。そのことは皆さんの作品にも各勉強会の活動記録にも明確に残されています。しかし、私たちは立ち止まらず歩み続けました。改めて素晴らしいクラブだと思います。

宮原由利子さんが新会員にも関わらず編集委員を引き受けられ、頑張ってくださいました。頭が下がります。(首藤)

▽俳句が好きでクラブへ九月に入会しました。十月には『悠遊』のお仕事のお誘いがあり未経験の為固く辞退していましたが、歓迎会のお蕎麦屋さんを出る時には編集委員になっていました。不慣れな私を温かくご指導下さいました。首藤さん、松浦さん、三春さんに感謝しています。作品はどれも素晴らしく、皆さんの造詣の深さに感動し気後れもしています。どうぞよろしくお願いいたします。(宮原)

▽今年はコロナのお陰で会員のみなさんが「新しい日常」を先取りして積極的に活動されるようになりました。お互いに教えあつて、ZoomやPCを使いこなして会の活動を楽しまれる様子を見るのは嬉しいことです。遠隔会員の方々ともZoom「書こう会」で作品についてのお話がでるようになりました。「禍を転じて福と為す」、人間は強く変わるものだと感動しております。(松浦)

企業OBペンクラブ同人誌

『悠遊』第二十八号

二〇二二年四月十日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

斉藤 征雄

印刷所 新灯印刷株式会社

東京都新宿区水通町二一五(〒一六二〇八一)

TEL 〇三―三三六〇―九二六一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

首藤 静夫

神奈川県川崎市高津区瀬田二一三(〒二二二〇〇三)

Eメール: shutou12@ol.itcom.net

クラブURL: http://www.obpen.com

口座 三菱UFJ銀行海老名支店(409)

企業OBペンクラブ(普通) 1086096

ペンフォト句 ②

涼新た
色付く庭を
愛でにけり

安藤 晃二



吹く風が
そつと触れたか
君の頬

矢澤 正二



美しき
仏像がおわす
古刹秋

下山 健夫



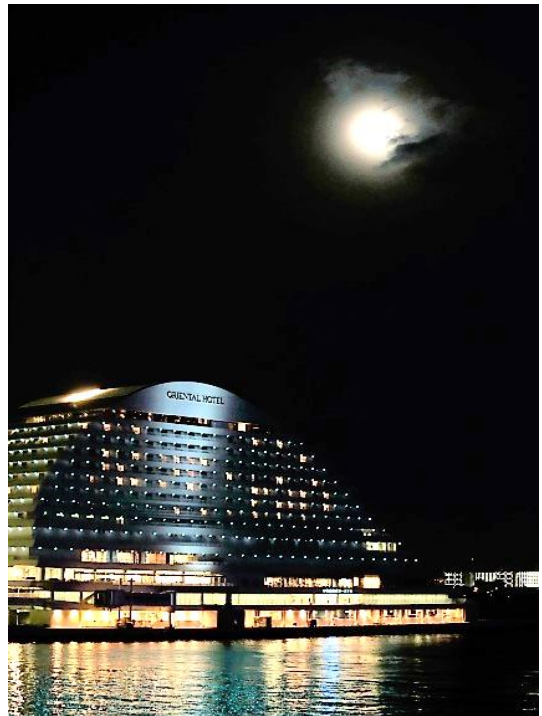


コロナ禍や
春夏秋冬
巣に籠り

大越 浩平

腐っても鯛
ボケてても十三夜

三 春



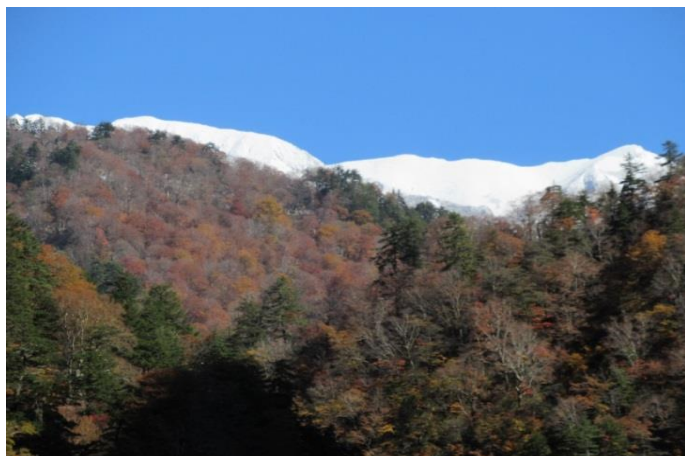
淡い日に
透ける瘦身
冬隣

中村 晃也



紅葉の
峰に寝そべる
白くじら

松田 昌康



夜間飛行
目覚める頃は
異国の地

長尾 進一郎





木村 敏美



野瀬 隆平



安藤 晃二



田中御堂 嘉山下巻 古市屋

山縣 正靖



塚田 實



福本 多佳子